

博士論文

ケアと行為者性の哲学

——揺れ動くものとしてのケアと行為者性——

早 川 正 祐

目次

序論	1
第1章 ケアの導入的考察	4
1. 1 関心の表現としてのケア	4
1. 2 ケアの三区分の導入	7
1. 3 ケア対象の多岐性	13
1. 4 ケアの厳格な解釈	18
1. 5 ケアの厳格な解釈の問題点	22
第2章 動的なものとしてのケアと行為者性	30
2. 1 「気にかかる」という受動的様態	31
2. 2 従来のケア・アプローチ——「大切に思う」集中路線	33
2. 3 行為者性の通時的構造から通時的展開へ	39
2. 3. 1 「気にかかる」の重要性（1）	40
2. 3. 2 「気にかかる」の重要性（2）	43
2. 4 能動性と受動性の混成体としての行為者性	48
第3章 フランクファートのケア論の批判的検討	55
3. 1 フランクファートのケア論の骨子（1）——階層的モデル	56
3. 2 フランクファートのケア論の骨子（2）——意欲の必然性	63
3. 3 フランクファートのケア論の問題点	69
3. 4 ケアとその人らしさ	80
第4章 ケア・計画・方針	89
4. 1 計画・方針	90
4. 2 ケアの文脈における計画・方針	94
終章 受容性という価値へ	103
参考文献	110

序論

英語圏の「倫理学」の分野では、ケアの倫理について様々な議論がなされ、正義の倫理を補うような新たな倫理の可能性が模索されている。にもかかわらず、英語圏の「行為論」の分野では、人間がケアする（される）存在であるということは、真剣に受け止められる機会が極めて少なかったように思える。すなわち現代行為論においては、意図ないし意図的行為の分析が中心に据えられ、主に意図のもつ特徴から人間の行為者性（以下では「行為者性」と略する）——行為者としての人間のありよう——とは何かということが論じられてきた¹。意図的行為の本性を、行為者本人の実践知に着目して明らかにしようとした、現代行為論の創始者E・アンスコム。また、アンスコムの洞察を部分的に受け入れつつも、行為の因果説という全く異なる方向性から、意図的行為が引き起こされる際の心理的メカニズムを解明しようとしたD・デイヴィッドソン。さらに、未来への意図（*intend to do*）の重要性を強調し、予めの計画・方針に基づいて振る舞う行為者のあり方を捉えようとしたM・ブラットマン。現代行為論を代表するこの三人の哲学者たちは、それぞれ方向性が異なり、様々な点で対立もしている。にもかかわらず、あくまでも意図や意図的行為の分析を通じて、行為者性を規定している諸側面について論じてきたという点において一致しているのであり、それゆえ大局的な見地からは、意図という概念を一つの軸にして、行為論はおおかた展開してきたと述べることができるだろう。

しかしながら本稿はこのような意図中心の行為論の現状に満足せず、ケアという観点を手がかりにして、従来の行為者性の哲学に一石を投じることを目指す。ケ

¹ 行為者性ということに関して二つ注意点がある。第一に、以下では「行為者性」という言葉を、人間の行為者性に限定して用いる。またそれに対応して、ケアに関しても、人間によるケアに限定することになる。ただし、動物にも行為者性とケアが認められる、という可能性を否定しているわけではない。そういった点に関しては別途、慎重な検討が必要であり、さしあたりその問題は論じない、ということである。

第二に、本稿では、他の多くの論者に倣い、行為者性という語を、「(人間の) 行為者としてのありよう」というより広い意味で用いる（esp. Bratman 1987; 2007; Frankfurt 1988; 1999; 2004; 2006）。行為者性という語をより限定的に用いている論者としてデイヴィッドソンを挙げることができる。デイヴィッドソンによれば、行為者性は、ある出来事を行為たらしめている性格である。ある出来事は、行為者性が帰属されることによって、単なる身に降りかかった出来事（*happening*）とは区別されるような「行為」としての身分をもつとされる（Davidson 1980b, 43-45）。しかし本稿では、行為者性という語を、より一般的な意味で解する。

アという言葉に多義性があることを認めつつも、ケアをある対象への「関心」を含むものとして広義で捉え、そこでの関心を「気にかかる／気にかける／大切に思う」という仕方で分節化することで、ケアの多彩なあり方と、そこに現れる行為者の複雑なありように光を当てることになる。とりわけ、従来の行為論のみならずケア論においてさえ軽視されてきた、ケアの「受動的側面」（気にかかる）に関して踏み込んだ考察をすることで、一定の時間的推移における能動—受動の絡み合いを通して、ケアが揺れ動きつつ進行する、という動的なケア観を提示するとともに、そこに現れる行為者のありようもまた、そのスタティックな通時的構造ではなくダイナミックな通時的展開から捉え直す。それによって、本稿における（行為者性に関する）ケアの観点からのアプローチが、行為論の発展に重要な貢献をなしうるものであることを示したい。

なお現代行為論をいくらか知る人は、「ケア」と聞けば、H・フランクファートの名前を思い出すかもしれない。実際、ケアという概念が現代行為論に最初に導入されたのは、彼の偉業によってである。現代行為論において意図が中心的概念であったことを踏まえれば、ケアを中心に据えて行為者性を解き明かす、というフランクファートの試みは、極めて野心的なものであった。そして、その試みは、それまで見過ごされてきた、自らの生き方を形作るような通時的な行為者のありように光を当てた点で、従来の行為論とは一線を画する重要なものであった。実際、フランクファートの議論は現代行為論の代表的論者であるブラットマンの議論にも深い影響を与え、行為論を進展させることになる。本稿もまた、フランクファートが打ち出した、ケアの観点からのアプローチを引き継ぐことになる。

ただし私は、一方で、ケア概念の導入というフランクファートの功績に対して敬意を払いつつも、他方で、フランクファートが、ケアにおける関係性という次元——ケアの対象との関係性、またケアにおいて出会われる人たちとの関係性——を軽視した点で、彼の議論に大きな不備があるとも思っている。そこで本稿では、通時的な行為者のありようを重視するフランクファートの発想を継承しつつも、ケアの関係性という次元（以下では「ケアの関係的次元」と略する）を重視することで、フランクファートの考察を重要な仕方で、修正したり補完したりすることになる²。このような修正と補完を通して、未だ萌芽的なものである「ケアの観点からのアプローチ」を充実させ、最終的には、本稿のアプローチが、現代行為論の主流である「意図の観点からのアプローチ」に見いだされない、どのような新しさを

² こうして、フランクファートと私とでは、ケアという概念を行為者性の議論にどう活かすかに関して大きな違いもあるため、フランクファートが提示したケアに関する基本的枠組みを問題なく受け入れることはできない。それゆえ、（もちろん彼の洞察に部分的には依拠するものの）議論の最初から、本稿なりのケアに関する基本的枠組みを積極的に提示して議論をしていくことになる。

含んでいるのか明確にしたいと思う。

本論に入る前に、あらかじめ章ごとのポイントを大まかに言っておこう。第一章では、本稿の「ケアの観点からのアプローチ」の基本的枠組みを提示する。とりわけ、「ケアというものをどのようなものとして捉えるのか」という問題に関して、英語の“care”の日常的用法を踏まえた「ケアの日常的解釈」という方向性を打ち出す。第二章では、「気にかかる」という水準でのケアがもつ重要な役割に注目することを通して、一定の時間的推移の中でケアが生成し展開する仕方と、そこでの行為者の変化に富んだありようを明らかにする。第三章では、フランクファートのケア論を批判的に検討すると同時に、本稿のアプローチを関係的一動的なアプローチ——すなわち、ケアにおける関係性を重視し、なおかつ、その関係性の中で変動するケアと行為者のありように注目するアプローチ——として発展させることで、フランクファートのケア論の欠落部分を補完することになる。第四章では、ケアという概念が、計画・方針といった従来の行為論における中心的な概念とは区別されるべきである点を明らかにする。その上で、ケアという文脈の中に計画・方針といったものを位置づけることによって、「意図の観点からのアプローチ」の成果を取り入れつつ、「ケアの観点からのアプローチ」を発展させることになる。

第1章 ケアの導入的考察

人間の行為者性の問題に関して「ケアの観点からのアプローチ」（以下では「ケア・アプローチ」と略することがある）を採用するときに、まず問題にしなければならないのは、「ケアということをもどのようなものとするのか」という点である。ケア・アプローチは人間の行為者性に関する比較的新しいアプローチであるため、ケアという概念に関して、それほど確立された見解があるわけではない。そこで本章では、こういった現状の改善も念頭に置いて、「ケアをもどのようなものとして捉えるか」というケアの解釈問題に関して一定の見通しを与えることを目的とする。とりわけ、ケアの（英語における）日常的用法を踏まえた形でケアを捉えることで——すなわちケアの「日常的解釈」を採用することで——、ケアの多彩なあり方を考慮しつつ、人間の行為者性を幅広く論じることができる点を示す。

具体的には以下のように議論を進める。まず、ケアがある対象への「関心」を表現する概念であるという点を押さえ、そこでの関心には行為への傾向性が伴っているがゆえに、ケアと行為者性が結びついているということを明らかにする（1. 1）。次に、ケアにおける関心を分節化すべく三つの区分「気にかかる／気にかける／大切に思う」（ケアの三区分）を導入する。こうしてケアをどういうものとするのかに関して一定の明確化を図った上で（1. 2）、英語の“care”の日常的用法を主題的に取りあげ、その日常的用法においてはケアの対象が多岐にわたっている、という点を確認する。そして、本稿で導入したケアの三区分が、そういったケアの日常的用法の特徴（ケア対象の多岐性）を踏まえたものであることを指摘し、その三区分に基づいてケア・アプローチを展開することで、ケアの観点から、人間の行為者性を特定の分野（医療・福祉）に限定されない形で、より一般的に論じられる、という点を示す（1. 3）。さらに、ケアの日常的用法に根ざした解釈（ケアの日常的解釈）と対立するものとして、ケアを道徳性に制約されるものとして厳格に解釈する議論（ケアの厳格な解釈）を取りあげる（1. 4）。そして、その厳格な解釈がかえってケアがはらむ複雑さや危うさに関する考察を妨げてしまう可能性がある点を指摘することで、ケアの複雑さや危うさをきちんと考慮に入れることができるケアの日常的な解釈を擁護する（1. 5）。

1. 1 関心の表現としてのケア

「ケア」という概念は捉えがたい。しかも、現代行為論で流通している「欲求」

や「意図」といった概念よりも、いっそう捉えがたいように思える。現代行為論に限らず哲学の分野では、「欲求 (desire)」と「意図 (intention)」は、すっかり定着した訳語になっているのに対して、“care”という語に関してはこれとして定まった訳語がない。すなわち “desire”や“intention”に関しては、その語が用いられる文脈とおおよそ関係なしに、それぞれ欲求、意図とほぼ一律に訳されてきたのに対して、“care”に関しては、事情がそれほど単純ではなく、不安・心配・注意・配慮・面倒見（世話）・頓着（かまけること）といった仕方で、個々の文脈に応じて訳し分けられているのである。それゆえケアを個々の文脈にまたがって一般的に訳そうとすると、どのような日本語が最適なのか途方に暮れてしまう。その結果、苦し紛れに「ケア」とそのまま訳されることも多い。こういったところにもケア概念のつかみどころのなさが表れているのかもしれない。しかしながら、本稿では行為者性に関する「ケアの観点からのアプローチ」を採用する以上、このつかみどころのなさに安住することはできず、ケアというものをどう捉えるか、ということがまさに根本的な問題となる。

むろん、手がかりとなるケアという概念に関する理解を、行為者性の考察に先立って最初から十全な形で示す必要があるのかと言え、必ずしもそうではないだろう。ケア論をまず完成しなければ、行為者性の議論に取りかかることはできない、というのはあまりに強い主張のように思える。本稿の方向性は、ケアの考察を深めることにおいて、同時に行為者性の考察をも深めるというものであり、そこではケア論の展開と行為者性論の展開はほぼ足並みを揃えることになる³。とはいえ、ケアということで何を念頭に置いているのか、その点がさっぱり分からなければ、議論の出発点さえ得られなくなってしまう。また、そもそも、ケアが行為者性とどう結びついているのかもはっきりせず、その結果、ケアの考察を深めることにおいて、同時に行為者性の考察をも深めるという、ケア論と行為者性論の同時進行性（結びつき）がどのように担保されているのかも不分明なままになってしまう。それゆえ、漠然とではあっても、議論の大まかな方向性が示される程度には、「ケアというものをどう捉えるか」という問いに関して答えておかなければならない。

³ このように、手がかりとなる概念の理解が最初から十全に与えられているわけではない、という点は、本稿のアプローチに特有なことではない。それは行為者性に関する「意図の観点からのアプローチ」にも当てはまることである。例えばその代表的論者であるブラットマンが、未来指向的な意図 (intend to do) の観点から行為者性の分析に着手するとき、あらかじめ、その意図に関する細部まで行き渡った理解を提示しているわけではない。そこでも行為者性の考察は、未来指向的な意図の考察と進行を共にする。未来指向的な意図の特徴、例えば「一定の期間にわたって推論と振る舞いを統制する」ということが明らかされることで、まさにそのような特徴を備えた行為者性の実態も明らかにされるのである。本稿で展開するケア・アプローチもこうしたやり方を踏襲している。

そこで、まず注目したいのは、様々なケアに通底する基本的な特性を、「関心」というものに見いだすことができるのではないか、という点である⁴。不安である・心配する・注意する・配慮する・面倒を見る（世話する）・かまける（かまう）といった形で、“care”は状況に応じて様々な言葉が当てられるが、そこで共通に表現されているのが、「関心」という要素ではないだろうか。ややくどくなるが大事な点なので、それぞれ用例に即して見ていこう。例えば、「太郎は自分の将来に漠然とした不安を感じ、今後、家族を養うだけの収入を維持できるか心配している」といった不安・心配という意味でのケアの言明には、今後の生活に対する太郎の切実な関心が表現されているだろう。また、「太郎は気難しい上司の機嫌に注意を向けたり、上司のプライドに配慮したりする」といった注意・配慮という意味でのケアの言明には、上司に対する太郎の繊細な関心を窺うことができるだろう。さらに、「太郎は年老いた親の元を訪れ、あれこれと面倒を見る」といった面倒見という意味でのケアの言明には、親の暮らしぶりに対する具体的対応を伴った関心が示されているし、「太郎は家事を人任せにして、週末も仕事にかまけている」といった、かまける（かまう）という意味でのケアの言明には、自分の仕事に対する太郎の強い関心が表れているだろう。むろん、このようにケアという概念が関心のありようを表現するからといって、そのことによって、関心という概念に訴えればケア概念は十全に捉えられるということが意味されているわけではないし、また、ケアの一般的訳語として「関心」という語が採用できるということが意味されているわけでもない。ここで押さえておきたいのは、ケアが、ある対象に対する関心のありように焦点を当てる概念だということなのである⁵。

このようにケアを、関心を表現する概念として捉えることで、ケアと行為者性との結びつきがいくらか見てとりやすくなるという点が重要である。というのも一般的に言って、関心とは、行為への傾向性をそれ自体の内に含んで成立するようなものだからである。もちろん、例えば太郎が自分の将来に絶望して不安の極致に陥

⁴ ケアを広義で捉えた場合は関心として解釈できる、という点に関しては浜渦（2005, 14-15）を参照。

⁵ なお、以下では対象という言葉を広義で用いる。第一にここでの対象は、一般的なものから個別的なものまで様々なものが考えられる。例えば人類という一般的なものから花子という個別的なものまで考えられる。また、ある対象は、一般者であれ、個別者であれ、概括的に捉えられている場合と特定の捉えられている場合があるだろう。「人類」や「花子」は、人類や花子の何に関して述べているのか定かではない点で非特定のであり、概括的であるが、「二一世紀の人類の平和」や、「老後の花子の収入」は、それよりも特定のであろう。対象という語を狭義で用いる場合は、概括的な個別者を指すことが多いと思われるが、本稿では、こういった一般的でもありえ個別的でもありえるもの、また概括的でありえ特定のでもありえるものとして対象という語を広義で用いる。（こういった一般／個別、概括／特定の区別に関してはアンスコム（Anscombe 1995, 25-34）に負う。）

り、それゆえ何に対しても全く気力が出ない、という場合は、その不安において表現されている、今後の生活への関心は、何ら彼の行為とは結びつかないかもしれない。それゆえ関心が常にそれに関連する行為と直結している、と言いきることはできないだろう。しかし、それでも多くの場合、関心は、それに関連する行為へと結びついていく傾向性を含むのではないだろうか。例えば、太郎が家族を養う収入を今後確保できるか心配であり、その点で将来の暮らしへの切実な関心をもっているとき、彼は昼食を五百円以下に抑えるようにしたり、外食を控えて自宅で食事をするようにしたりするといった行為を為すかもしれない。また気難しい上司に対する配慮的な関心は、上司の立場を尊重したり、機嫌を窺ったりするような諸行為への傾向性を含んでいるだろう。こういった諸行為への傾向性は、面倒見という形での親の生活への関心や、仕事にかまけるという形での仕事への関心にも当然、見いだされるだろう。やはりそこでの関心も、前者の場合は、親の会話につき合う、親に食事を用意するといった行為を伴っているだろうし、後者の場合は、仕事の成果を上げるための様々な行為を伴っているだろう。もちろんケアと行為の結びつきは、（後で見ていくように）入り組んだものでありえ、ここではそのほんの一端に触れたにすぎない。しかし、こうして「関心」が表現されたものとしてケアを捉え、関心が行為を伴わせている点を踏まえることで、ケアと行為者性とが強く結びついている点が見てとれる。それゆえ関心の表現としてのケアはその人の個体内部で閉じているような特殊な心情ではない。心配といった、ケアの心情としての側面に焦点が当てられたときでさえ、その心情は、何らかの事柄への関心を前提にしておき、その関心事に関わるような行為へと結びついているのである。こうしてケアを、関心の表現として押さえることで、ケアが行為者としてのありようと密接に繋がっていることを確認することができるだろう。そして、ケアと行為者性の密接な繋がりは、ケアについての議論が、行為者性についての議論を含まなければならないことを意味する。それゆえ、ケア論と行為者性論が歩みをともにしうというケア論と行為者性論との同時進行可能性もいくらか支持されることになるのである。

1. 2 ケアの三区分の導入

しかしながら、たとえケアを関心の表現として押さえたとしても、それだけでは、なお議論の出発点となる特徴づけとして漠然としすぎていることは否めない。ケアの基本を、関心の表現と捉えた上で、「ケアというものをどう捉えるか」に関して、もう少し見通しをよくする必要がある。そのための何かよい手だてはないだろうか。

ここで行為者性に関する「意図の観点からのアプローチ」（以下では「意図・アプローチ」と略することがある）を参照することが役に立つ。注目したいのはアンスコムが意図論に着手する際にとった方法である。彼女は意図論の出発点として以下のような意図の三区分を導入した（Anscombe 1963, 1）。

意図の三区分

- （１） 未来への意図 [の表現] ([expression of]intention for future)
- （２） ある意図でもって～、行為が為される際の意図 (with the intention, with the intention things was done)
- （３） 意図的行為 (intentional action)

例えば、「太郎は沖縄でダイビングをしようと思い（未来への意図）、沖縄に行くという意図でもって（行為の際の意図）、航空券を予約する（意図的行為）」といったように、この三区分は捉えられるだろう。

重要な点は、アンスコムがこのような三区分を導入したおかげで、意図に関する様々な問題に関して精緻な議論を展開する足場が与えられたという点である。アンスコム以降、行為論に取り組む哲学者たちは、この三区分を踏まえ、自分がどの水準の意図を話題としているのか、自覚して論じることができるようになった。漫然と「意図とは何か」を問うのではなく、「未来への意図（未来指向的な意図）とは何か」「行為が為される際の意図とは何か」「意図的行為とは何か」と照準を定めて具体的に問えるようになったのである。また、こうした区分を念頭におくことで、ある区分の意図に当てはまる考えを、無自覚的に他の区分の意図にも拡張してしまうといったような、性急な一般化も制止されるようになる。さらに、単に区分ごとにその意図の特徴を考察するにとどまらず、そのように区分化された意図相互の関係性も問えるようになった。例えば、意図的行為には、その行為着手に先立って形成されるような「未来への意図」が必ず伴うのか、といった問題や、意図的行為は、「ある意図でもって」といったような、目的—手段の構造をどういう仕方で備えているのかといった問題についても、議論を展開できるようになった（e.g., Anscombe 1963; Davidson 1980; Bratman 1987）。こういった形で、意図の三区分は、意図に関する綿密で詳細な議論を可能にするような重要な基本的枠組みを提供したと言えるだろう。

こういった点を踏まえると、手がかりとなる鍵概念に対していくつかの層を見いだして分類するということには、それが適切になされる限りは、議論の発展にとって極めて有効なことであるように思える。だから、ケアに関してもまた適切な分類がなされれば、考察の見通しはよくなるだろう。すなわち、区分の導入によって、ケアを考察する論者は、どの水準のケアを念頭に置いているのか自覚的に論じら

れるようになる。それによってどの水準のケアを論じ残しているかも自覚できるから、ケアについての安易な一般化も抑制されるだろう。またケアの相互の関係を問うことで、ケアについてより機微に富んだ見方を手にすることができるかもしれない。

しかしながら残念なことに、これまでのケア・アプローチに目を転じると、このような区分が未だに導入されていないという現状がある。現代行為論にケア概念を導入したのはフランクファートであったが (Frankfurt 1988c, 80-94)、その先駆的な試みにおいては、ケアに関してこのような分類をするという発想は欠落していたように思える。またケア・アプローチを引き継ぐ論者にも同様の欠落が見られる (e.g., Jaworska 2007; Seidman 2009; 2010; Shoemaker 2003; Tappolet 2006)。行為論にケアという観点がもたらされて日は浅いとはいえ、ケア概念が、欲求や意図といった概念以上に捉えがたいとするなら、その捉えがたさを多少なりとも軽減するためにも、何らかの区分を導入することは急務であろう。そこで本稿では、こういった現状を打開すべく、一つの暫定的な区分として以下を提案したいと思う。

ケアの三分区

- (1) ～が気にかかる
- (2) ～を気にかける
- (3) ～を大切に思う

ここでアンスコムと同じく三分区を採用しているが、このケアの三分区は意図の分類の仕方に対応した形での区分を狙ったものではない。例えば、アンスコムの第一区分は、「未来の意図」であり、それは行為に先立つ主体の様態だから、ケアに関しても行為に先立つような様態として第一区分に「気にかかる」を採用した、というわけではない。意図の区分に言及したのは、鍵概念にいくつかの層を見いだし区分を設ける、という発想の重要性を指摘したかったからであり、またケアに関して、こうした区分が未だ設けられていない現状を確認することで、ケア概念が意図概念と比較して、それ程きちんと整理されてこなかった現状を浮き彫りにしたかったからである。そして、ここではケアという概念の特性に合わせて分類を施しているのである。つまりケアは対象への関心に焦点を当てる概念であるため、その概念の特性に合わせて、その区分も、その関心のあり方を分節化するような区分になっているのである。

それぞれの項に関して、あらかじめごく簡単に述べれば、「(～が) 気にかかる」は、対象に注意・関心が引きつけられ、とらわれること、「(～を) 気にかける」は、こちらから進んで対象に注意・関心を向けること、「大切に思う」は、その対象に

対する献身的な関わり方と結びつくような深い関心を表現している。例えば、「太郎は仕事を大切に思っている。そしてその都度、具体的な状況の中で自分の任務が何かを気にかける。またそういった任務の遂行に関する周りの評価が気にかかってもいる」といったように捉えられるだろう。つまり、太郎は仕事に深い関心を払い、献身的に関わっている（大切に思う）。具体的な状況の中で、自分の任務が何であるかに進んで注意を向けている（気にかける）。そういったことについての周りの評価は、たとえ太郎が自ら注意を向けようとしなくても、太郎の注意を引きつけ、とらえている（気にかかる）。もちろん、ケアを三つに分類したからと言って、それぞれの水準のケアが互いに無関連だという主張が含意されているわけではないし、相互に独立した項としてあるという主張が含意されているわけでもない。むしろ本稿ではこの三つの様態がどう関係しているのかにも注目することになる。

さて、以上のようなケアの三区分に関して、当然、その分類の仕方の妥当性が問われるだろう。ただし、ケアをどう区分するかに関して、唯一の正しい解答があるというわけではなく、それを論じる者が、ケアのどのような特徴に注目したいのかによって、どのような区分を設けるのが適切かも部分的には変わってくるだろう。そして、その区分に基づくことによって、ケアに関する考察を深めることができれば、その考察の深化の程度に応じて、その区分は正当化されることになるだろう。むしろ考察を開始したばかりの現段階において、「気にかかる／気にかける／大切に思う」の区分を十分に正当化することは難しいが、しかし、本稿がその特定の区分法を採用するのには、それなりのポイントがあるのであって、そのポイントに関しては現段階でも述べることができる。そこで以下では、ここで導入されている三区分のポイントを大まかにでも明らかにすることによって、その三区分が恣意的な仕方であ案出されたものではない、という点を示しておきたい。

まず全体の区分について、そのポイントを述べたい。序論でも触れたように、本稿では、人間の行為者性を変化に富むものとして描き出したいと考える。そうすることで従来の行為論で構想されているよりも、現実在即した行為者観を提示できると考えるからである。そして、そういった動的な行為者観を提示するときに重要になるのが、ケアが生成し展開する仕方である。すなわち、ケアの生成・展開するさまを考察することを通じて、そこに現れてくる行為者性の動的性格を捉える、というのが本稿の基本的戦略なのである。それゆえケアの区分は、そういったケアの生成と展開を分節化しうるものである方が望ましい。そして、本稿のケアの三区分「気にかかる／気にかける／大切に思う」は、まさに生成・展開の分節化という条件をある程度満たしているだろう。というのも、ケアの進展は、ある対象に注意を引きとめられること（「気にかかる」という様態）から始まり、次第に注意をこちらから向けるようになり（「気にかける」という様態）、さらには献身を伴うような深い関心を抱く（「大切に思う」という様態）に至る、という形をとるからである。

例えば、ある転職希望の人は、求人サイトを見ているとき、ある職種がたまたま目に留まって気にかかり、それからその職種について自ら調べるなどして、進んで気にかけるようになり、実際、その職に就いてから献身的に働くようになって、その仕事を大切に思うに至る、という形でケアが進展するかもしれない。むしろ、ここではその進展する仕方を、その詳細を全く抜きにして極めて単純化して描いている。しかしその進展の入り組んだありようは、後に論じるとして、さしあたり押さえておくべき点は、この三様態「気にかかる／気にかける／大切に思う」が、ケアがどのような段階を経て生成し展開するかということに関して、大まかな分節化を与えている点であり、さらに、この三様態の結びつきや関連性をより細やかに描くことで、ケアが生成し展開する仕方やそこでの変化に富んだ行為者のありようを解明することも可能になるだろうという点である。

次に、第一区分「気にかかる」と第二区分「気にかける」について、そのポイントを述べたい。「気にかかる」と「気にかける」のポイントも、変化に富んだ動的な行為者性という本稿の中心的アイデアに関係している。2.1で主題的に取りあげるように、「気にかかる」は、対象によって注意が引きつけられ、とらえられるという点で、対象から影響を被るというケアの受動的側面を表し、「気にかける」は、対象への働きかけを含む点でケアの能動的側面を表している。そして本稿の立場は、ケアの動的性格は、この受動と能動の絡み合いという点から最もよく理解できる、というものである。それゆえ、受動的側面と関連する「気にかかる」と能動的側面と関連する「気にかける」の両方に関する考察が重要になってくるのである。能動的側面を表す第二区分「気にかける」に関しては、行為者性が能動性と何らかの仕方で結びついた概念だということから考えても、その区分が行為者性の考察にとって重要であることは分かりやすいだろう。他方で、受動的側面を表す第一区分「気にかかる」に関しては、受動性が行為者性とは結びつきにくいと思われるので、行為者性の解明の上で、なぜその区分が重要になるのか分かりにくいかもしれない。そこで「気にかかる」のポイントについてもう少しだけ述べておこう。

まず、「気にかかる」という受動的様態には、主体の理解をはみでる未知の事柄に、その主体を繋ぎ止める働きがある、という点に注目したい。先の例で言えば、ある転職希望の人は、たとえある職種に関して漠然とした理解しかもっていないくても、その職種が興味深く思えて、気にかかっているのである。つまり、彼はその職種に未だ就いたことがないから、その職種は彼が未だ理解していない部分を多く含むが、しかしそれでも、彼の注意はそれに引き留められる。そして、そのように気にかかることによって、彼の行為にも重大な変化がもたらされることがある。例えばその職種がどうしても気にかかったので、実際にその職に就いている知人に会って話を詳しく聞いてみる、もっと本気になって、その職種を調査してみる、という仕方で、転職活動に対する彼の取り組み方——転職活動における彼の行為

のあり方——に関しても変化が生じる。この事例はケア対象（仕事）に関連する活動が好転ないし前進するケースであるが、2. 3において我々はもう少し複雑なケースを扱う。しかし、いずれにせよ、「気にかかる」という様態は、その主体にとって慣れ親しんだ要素のみならず、未知の要素——それは、ときには、その主体がすぐには呑み込めない異質な要素であったり、主体を動揺させるような要素であったりする——に対するアクセスも備えており、それゆえに、主体の行為のありようを重大な仕方で変化させる効果をもつのである。そうだとすれば、行為者の変化に富むあり方（動的性格）を解明する上で、「気にかかる」という受動的様態についての考察は、極めて重要なものになってくる。そして、ケアの一つの区分として「気にかかる」という項を設け、まさにこの水準でのケアに注意を喚起するということが大きなポイントをもつことになるだろう。さらに付言すれば、2. 2で見ると、ケア・アプローチをとる他の論者たち（以下では単に「他のケア論者たち」と呼ぶことがある）は、「気にかかる」という様態に関して、たとえ示唆したり言及したりしていても、それについて踏み込んだ考察をしていない。この現状を踏まえると、ケア対象との関わりの受動的様態に関して、それを「気にかかる」という言葉で特定し、重視されるべきケアの一区分として明示化することは、これまで未開拓であった、ケアの受動的様態に関する主題的考察への道を切り拓くことにつながるから、いっそう大きなポイントがあることになるだろう。

最後に、第三区分「大切に思う」について、そのポイントを述べよう。「大切に思う」を第三区分に採用することについては、本稿が行為者性の問題を扱う以上、行為の遂行性がより強く表現される「大切にする」に変更した方がよいのではないか、という疑問が提起されるかもしれない⁶。だが私は2. 2で、「大切に思う」というあり方もまた、単なる個体内部の状態ではなく、様々な振る舞いのパターンによって表現されているという点を論じることになる。それゆえ、私の考えでは、「大切にする」のみならず「大切に思う」もまた、単なる主体内部の状態にとどまるものではなく、行為の遂行性と少なからず結びついている。とはいえ、そのように「大切に思う」が遂行性と結びついているとしても、確かに遂行性という性格をなおいっそう強調したいのであれば、「する」という言葉が入っている「大切にする」の方が「大切に思う」より適切かもしれない。

しかし私は敢えて第三区分に「大切にする」ではなく「大切に思う」を採用したいと思う。その理由は、ケアの議論において、ケアの一筋縄ではいかない複雑なありように光を当てるとはとても重要だが、まさにそのためには「大切にする」よりも「大切に思う」を取りあげの方が有益だという点にある。というのも大切に思

⁶ こういった疑問が提起されうると気づいたのは、崎川修氏の口頭での指摘による。

うというあり方は、とりわけ「他者」がケア対象であるとき、入り組んだありようを顕著に示す場合があるからだ。我々がある相手を大切に思うということは、同時にその相手によって我々が翻弄されやすくなっているということを意味する。こういった事態が生じる典型的なケースは、相手が苦しんでいるときであろう。大切に思う相手の苦しみは、我々をもしばしば苦しめる。そこで我々はなるべく相手に翻弄されないように、相手を統制するような動きを（知らず知らずのうちに）とることになる。そこでは相手のニーズは多かれ少なかれ我々の都合のよい仕方です——例えば自己の心理的負担を軽減するような仕方です——捻じ曲げて解釈され、結局は相手のためにならないことをする。こういうことが起こりうる。もちろん、大切に思うということが、相手のためになることを為すこととは無関係だと言うつもりはない。そうではなく、相手のためになることを為す方向性と、そこから逸脱していく方向性の両方を混在させていると言いたいのである。そしてこういったケアのねじれは「大切にする」というあり方に注目しても浮かび上がってこないものなのだ。というのも相手を「大切にする」ということは、相手のためになることをすることとほぼ同義であるため、相手のためになることから逸脱していくようなあり方を考察するのには適していないからである。そして重要なのは、こうして「大切に思う」を複雑なものとして捉えることによって、ケアの動的性格も、曲折をはらんだものとして示すことができる、という点である。

1. 3 ケア対象の多岐性

さて前節ではケアを「関心」を表現するものとして大まかに捉え、その上で、ケアにおいて表現されている関心を分節化すべく「気にかかる／気にかける／大切に思う」という三区分を設けた。この節では、ケア・アプローチを展開する上で前提にしている、以上のような本稿の基本的枠組みが、あくまでも英語のケアの日常的用法を踏まえたものであるという点、すなわちケアの日常的解釈に根ざしているという点を示し、さらに、そうした日常的解釈には重要なポイントがある点を示したい。

本来、英語“care”⁷は、日常生活の中で多種多様な対象に関して幅広く用いられ

⁷ なお、英語の“care”は前置詞として“for”と“about”をとる。論者の間では“care for”と“care about”の区別がしばしば問題になってきた。両者を区別する論者もいれば区別しない論者もいる。N・ノディングズによれば“care for”は、“care about”より、対象との関係が直接的で具体的であることを表している（Noddings 1984, 18）。しかしJ・ブルーシュタインは、ほぼ正反対のことを言っている。すなわち“care about”の方が“care for”より対象との関係が密接であるとされる（Blustein 1991, 27-41）。フランクファートは、“care about”を専ら用いて、“care for”という表現は

る語であり、その点において日本語の「ケア」とは大きく異なっている。日本ではケアという言葉は、一九八〇年代に登場して以来、主として医療・福祉の領域において用いられてきた（こういったケアという言葉の受容史に関しては川本（1995, 196-198）を参照）。実際、ヘルスケア・緩和ケア・在宅ケア・ケアマネジャー・ケアワーカーなど日本語でよく耳にするケア関連の言葉は、医療や福祉の分野と強く結びついている。むろん、ケアは最近、スキンケア・ヘアケア・ボディケアなど美容に関することにも頻繁に使われつつあり、より拡張的に用いられるようになってきたと言える。しかし「ケアの仕事をしている」という表現を耳にすれば、多くの場合、特別な注意書きのない限り、介護福祉士・ホームヘルパー・看護師・保健師といった職業を思い浮かべるのではないだろうか。その点で、日本語における「ケア」という言葉は、医療・福祉に依然として密接に関係していると言える。そして、そこでケアが向けられる存在として念頭に置かれているのは、何らかの支援や援助を必要としている人たちであり、それゆえケアの対象は当然ながら人なのである。

しかしながら、日本語の「ケア」と異なり、英語の“care”の対象となるものはそういった仕方で狭く限定されない。たしかに英語でも、ケアという語は狭義では医療・福祉の領域で盛んに使われる傾向もあり、まさに日本語のケアはその狭義での使用法を受け継いでいるのであるが、しかし英語のケアはそのように限定的に用いられるだけではなく、様々な日常的な場面で頻繁に広く用いられる語なのである。この点は、先に触れたように、不安である・心配する・注意する・配慮する・面倒を見る（世話する）・かまける（かまう）といった形で、“care”が用いられる状況に応じて様々な言葉が当てられていることから明らかであろう。（看護や介護も含む意味での）世話という意味でのケア対象は主として人であるが、不安・心配・配慮・頓着（かまけること）という意味でのケア対象は、人のみならず、もの・ことにも広く及んでいる。前節では、例として仕事にかまけるという意味での仕事へのケア（care about one's work）や収入を心配するという意味での収入へのケア（care about one's income）に言及した。ケア対象の多岐性という論点を強調するために、さらに例を付け加えれば、“care for one's garden”「庭の手入れをする」、

用いないが、“care about”に関してはブルーシュタイン以上に、対象との親密な関係性を強調している（Frankfurt 1988c; 1999; 2004; 2006）。D・シューメイカーは“care about”と“care for”の区別は、誇張されるべきではないとし、その厳格な区別に否定的である（Shoemaker 2003, 94-95）。P・ベナーとJ・ルーベルも、シューメイカーと同様、両者をそれほど区別していないように思える（Benner and Wrubel 1989）。こういった論者の様々な立場を見ると、“care about”であれ“care for”であれ、どういう文脈で用いられるかによって、意味の揺れ幅があるということであろう。そして、文脈依存的に生じる意味の揺れ幅という点に関しては、両者は一致するので、本稿では両者を取りたてて区別せずに用いることにする。

“care about environmental issues”「環境問題に配慮する」、「care about what one eats」「食べるものにこだわる」、「care about playing golf」「ゴルフに夢中である」などといったもの——こういった例は、それこそ無数に考えられるが——を挙げることができ、ケアは多種多様な物事（もの・こと）も対象にするのである⁸。また、そういったケアの多様なタイプに共通する基本的特徴として、対象への関心を表現しているという点を前節で指摘したが、関心の対象が、人に局限されず、もの・ことを広くカバーすることからも、ケアの対象が多岐にわたることが窺えるだろう。仕事がケア対象になったり、ゴルフがケア対象になったりすることは、日本語の通常のケア概念を前提にすると違和感があるが、ケアというものを関心の表現として捉えることで、それらのケアは、仕事への関心やゴルフへの関心のありようを表していることになり、違和感が軽減されるだろう。この点は、ケアの日常的用法を踏まえた場合、ケアを関心の表現として捉えることが妥当であるということを示唆するものでもある。

そして、このようなケア対象の多岐性は、別の角度からも確認できる。すなわち、「Xへのケア」という形で、ある単一の対象のケアとして記述されるケアも、実のところ、他の様々な対象（X以外の対象）のケアと結びついて、もしくはそういった様々な対象のケアを部分的に抱え込んで、それとして成立している。家族のために嫌な仕事も続けるという場合は、家族のケアは仕事へのケアと結びついていることになるだろう。家族が余裕をもって安心して暮らせるには一定の稼ぎが必要であり、そのためには仕事も頑張らなければならない、といったように考えられる。またそれだけではなく仕事へのケアは、上司・同僚・部下へのケア（配慮）や、取引先へのケア（配慮）、また自分の体調管理（健康へのケア）などを一部として含んでもいる。それゆえあるケア事象が、「ある単一の対象へのケア」として記述される場合も、そのケアは、複数の様々な対象へのケアにまたがっている場合が多くあり、ここにもケア対象が多岐にわたることが部分的に示唆されているのである⁹。

さらに、やや込み入っているが、関連する次の点にも触れておきたい。本稿では、人へのケアと物事へのケアをさしあたり区別しているし、これからも区別することになるのだが、上記のように「単一の対象へのケア」と記述されるものが、他の様々な対象へのケアと結びついているとすれば、そこでの「他の様々な対象」の内

⁸ 浜渦が的確に指摘しているように、ケアの対象は「かならずしも「人」とは限らない。「動物」「植物」も、さらに「もの（事物）」だってケアの対象となる」（浜渦2005, 15）のである。

⁹ もちろん、ケア対象に多岐性が認められるということは、ケアの考察にとって医療・福祉におけるケアが周縁的であることを意味しているのではない。ここでの強調点は、ケアが医療・福祉に関わりつつも、それをはるかに超えた広がりをもつということにある。

には、人・物事のいずれもが入ってくる可能性がある。そして、そうである以上、ある物事へのケアとして単一的に記述されるものが、人へのケアと結びついている場合もあるし、人へのケアとして単一的に記述されるものが、物事へのケアと結びついている場合もあることになる。実際、直前の例で言えば、仕事という物事へのケアが、仕事を取り巻く人たちへのケアと結びつき、家族という人（々）へのケアが、部分的には仕事という物事へのケアと結びついていた。もちろん、ある対象へのケアが様々な対象と結びついていたとしても、それらの諸対象の中で、焦点が当てられているような第一義的な対象（中心的な対象）は何か、という点から、そのケアの対象を単一的に記述することや、ケア対象が人か物事かを確定することができるし、そうすることは何ら誤っていない。本稿もまたそのような単一的な記述や（ケア対象に関する）人／物事の分類を採用することになる。しかし、それでも、人へのケアと物事へのケアは相互に無干渉であるような別種のものとして扱うことはできないという点は心に留めておくべきだろう。

このような人へのケアと物事へのケアの相互の結びつきが成り立つ背景には、大まかに言って次の二つの重要な要因が働いている。第一に、我々は、ある人にケアしたりケアされたりすることを通して、ある物事へケアするようになることがある。つまり人とのケアのやりとりを媒介にして物事へのケアが生成する。例えば、両親・養育者・友人・恋人・パートナーといった身近な他者をケアしたり、身近な他者にケアされたりするといった交流の中で、どのような物事に対して関心をもつか（ケアするのか）が定まってくるということがある¹⁰。第二に、ある物事へのケアをきっかけにして、その物事へのケアを共有する人同士がケア関係に入っていくということがある。つまり物事へのケアを媒介にして人へのケアが生成する。共通の趣味に夢中になったり、ある仕事への関心を共有したりすることによって、互いの存在を徐々にケアするようになるといったことがあるだろう¹¹。こういったことの根底にあるのは、物事は人同士の間柄に媒介され、逆に、人同士の

¹⁰ そういった一つの典型的場面が、発達心理学において取りあげられる共同注意（joint attention）であろう。共同注意とは、養育者と乳幼児が、ある事柄に関して、共に注意を向け、関心を分かち合う事態を指すが、それは乳幼児が物事について学んでいく際の典型的な仕方なのである（滝川 2011, 127-164; ロシヤ 2004, 166-178）。つまり乳幼児が物事への関心（ケア）を発達させるのは、典型的には、その乳幼児と養育者のケア関係の中であって、乳幼児単独ではないのである。しかしここで強調すべきは、このような共同注意が成立するのは、何ら人生の初期に限ったことではなく、生涯を通じてであるという点だ。

¹¹ 発達心理学において、共同注意が話題になる場合、乳幼児はケア関係をベースにして、物事を学ぶという側面が強調され、物事（例えばおもちゃやおもちゃで遊ぶこと）をベースにして、ケア関係を学ぶという逆方向は強調されない傾向にあるように思える（e.g., 滝川 2011, 岡本 1985）。しかし、物事（もの・こと）を活用してケア関係をつくるというあり方にも注目する必要があるだろう。

間柄は物事に媒介される、という当然の事情である。このような人へのケアと物事へのケアの相互干渉的な関係は、ケア対象の多岐性という論点を直接に支持するものではないが、それでも、単一対象へのケアが様々な対象へのケアと結びついて、という先の論点を補足するものである。それはケア対象の多岐性が、複雑なケアのネットワークに、ある仕方で部分的に依存しているということを示唆しているのである。

いくらか脱線したが、このようにケア対象の多岐性という論点を踏まえた上で、指摘しておきたい点は、本稿で導入したケアの三区分「気にかかる／気にかける／大切に思う」のいずれの様態も、多様な人・もの・ことを対象にとるという点で、ケアに特徴的な対象の多岐性を確保していることである。そもそも我々は関心というケアの日常的用法を重視して、その関心のありようを分節化するために、「気にかかる／気にかける／大切に思う」の区分を導入したため、当然、その対象の多岐性もきちんと確保されることになるのである。すなわち、気にかかったり、気にかけてたり、大切に思ったりする対象は、仕事に関すること、趣味に関すること、家族に関すること、お金に関すること、社会の諸問題に関することであったりするわけで、日本語で考えられているように医療・福祉に関することとは限らない。新規事業のこと（仕事の場合）、週末のゴルフのこと（趣味の場合）、息子の進学のこと（家族の場合）、遺産相続のこと（お金のこと）、原発依存のこと（社会の諸問題の場合）等の事柄が、気にかかる対象、気にかける対象、大切に思う対象となるのである。こういう仕方で、その三区分は「日常に溢れたものとしてのケア」（浜渦 2005, 14）をしっかりと念頭に置くことができる区分になっているのである。

さて、そもそも以上のように、「気にかかる／気にかける／大切に思う」によって対象の多岐性が保証されている点が、なぜそこまで強調すべき重大なポイントになるのか。それは、ケアというものが元来もつ広がり確保し、活かしてこそ、ケアから人間の行為者性を幅広く考察できるようになるからにほかならない。ケアを医療や福祉の領域に押し込めておくことや、ケアが向けられる対象は第一義的には人のみだとすることは、ケアという切り口から人間の行為者性一般を論じることを不可能にしてしまうだろう。当然ながら、何事かを為すという行為者としての人間のありようは、医療・福祉といった領域に収まらないし、人を第一義的とする対人行為のみに関連しているのでもない。ケアの観点から人間の行為者性を、特定の分野に限定されない形で幅広く論ずるためには、ケアの観点自体が、それ相応の広がりをもつものでなければならず、ケアを「気にかかる／気にかける／大切に思う」という三様態から捉えることで、まさにこの広がり確保されているという点が肝心なのである。つまりケアをその三様態に解することによって、ケアを様々な領域にわたる日常の行為・振る舞いに関連するものとして捉えることが可能になり、ケア論を通して、行為者性論を展開するという本稿のアプローチが可能

になっているのである。

1. 4 ケアの厳格な解釈

前節では、ケア対象が多岐にわたるという論点を支持するとともに、本稿で導入したケアの三区分別が、ケア対象の多岐性を保持するような区分であること、それゆえ、この区分を採用すると、人間の行為者性を幅広く論じることができることを指摘した。しかし、こういった前節の議論は、あくまでもケア (care) の日常的用法を踏まえてなされている。つまりケアの日常的用法を重視し、それを活かすのが本稿のケア・アプローチの重要な特徴となっているのである。本稿では、ケアは日常的な意味で解釈されているので、ケアに関する日常的解釈が採用されている、と言えるだろう。

しかしながら、ケアの日常的解釈を採用するか否かは、一つの争点でありえ、どのようなものがケアの対象になるのか、どの範囲までケアの対象は及ぶのか、という点が問題になる。その際、しばしば論じられるのが、ケアと道徳的関心の関係である (e.g., Frankfurt 1988c; 2004; Shoemaker 2003)。そしてケア対象の多岐性を主張する論者は、ケアにおける関心が道徳的考慮に必ずしも制約されるものではない点を強調する。例えばフランクファートは、ケア論という探求部門は、倫理学という探求部門とは独立にたてられるべきだと主張した後、以下のように述べている。

一般的に言って、道徳的であることに大きな関心を抱く人でさえ、それ以外の事柄にいつそう大きな関心を抱く。例えば、自分自身の個人的なプロジェクト、特定の個人や集団、様々な理想などを大切に思い、それらの対象に対して決定的な重大性を認めている。そして、その重大性はとりたてて倫理的な性格のものではないのである。例えば、家族のしきたりを忠実に守るという理想や、私心なく数学的な真理を追究するという理想や、またある分野の美術品の鑑定家であることに人生を捧げるという理想には、道徳的に特有なものは全く存在しない。(Frankfurt 1988c, 81)

ここでは、道徳性ということで、誰にでも例外なく妥当するような普遍的な要求が念頭に置かれている (ibid.)。このようにケアにおける関心が普遍的な道徳的考慮に必ずしも制約されないという点を指摘することが重要なのは、ケアが道徳的考慮に条件づけられるものに限定されてしまえば、ケアの対象が多岐にわたるという論点が脅かされる可能性があるからである。フランクファートの例で言えば、数

学的な真理を追究すること（数学的な真理に対する深い関心）や美術品の鑑定家であること（美術品に対する深い関心）は、普遍的な道徳的考慮に制約されていないように思えるため、普遍的な道徳的考慮をケアの要件として課すと、そういった対象はケア対象に含まれなくなる恐れがあるだろう。それゆえ、フランクファートは、ケアが道徳的考慮を構成要件とすることを否定しようとする。そして、本稿も、この論点に関しては、フランクファートの方向性を継承し、普遍的な道徳的要件をケアに課すべきではないと考える。

しかしながら、現代の代表的なカント主義者のC・コースガードはこういった主張に対して、ケア対象が、人・もの・ことに及ぶ広範性をもつことを前提にしつつ、なおかつケアが本質的に、道徳性へのコミットメントに制約されなければならない、と主張する（Korsgaard 2006, 56-76）。フランクファートははじめケア対象の多岐性を支持する論者は、道徳的考慮に制約されないという重要な指摘をしつつも、こういった道徳性による制約を訴えるコースガードの議論に対して、十分な検討や応答をするまでには至っていない¹²。そこで本稿ではコースガードの議論を取りあげ（本節）、ケアを道徳性に結びつける彼女の議論がケアの非主観的な側面に光を与える点で重要性をもちつつも、ケアの多彩なあり方を考慮するのには適さない点を示すことで、ケアの日常的解釈という方向性を擁護したい¹³。

まずコースガードが着目するのは、「道徳性へのコミットメントが、……ケアの論理 (logic of care) と呼ぶものによって含意されている可能性がある」(ibid., 56) という点である。つまりケアは本質的には、道徳性へのコミットメントをその必要条件としている、という方向で彼女は議論を推し進めようとする。とはいえ、ここで念頭に置かれている道徳性へのコミットメントとは何なのか。彼女の議論に基づけば、道徳性へのコミットメントは、ケア主体がもつ、以下のような普遍性に関するコミットメントを指し示している。すなわち、

ある主体Sがある対象Xをケアしているなら、主体Sは、誰もが尊重すべきような普遍的な価値を、対象Xの内に認めているのでなければならない (esp. ibid., 75-76)

むしろコースガードはこの見解をとることによって、「主体Sが対象Xをケアして

¹² フランクファートは、ケアに関する考察の中で、カント主義的な普遍性の重視に対して異を唱えているにもかかわらず（Frankfurt 1999d, 134-136; 2004, 72-82）、自らの立場を擁護するような議論が十分ではないように思える。それゆえ、コースガードの反論を受けることになる（Korsgaard 2006）。

¹³ また、実のところ、彼女の主張を受け入れればケア対象の多岐性という論点も部分的に損なわれてしまうという点も示す。

いるなら、Sは、誰もがXをケアすべきだ、と考えていなければならない」と主張しているのではない。例えば太郎が花子をケアするなら、太郎は「誰もが花子をケアすべきだ」と認めるはずだ、と言っているのではない。そうではなく、あくまでも、太郎は花子に見いだされる何らかの要素や性質に、普遍的価値を認めているのでなければならない、と言っているのである。そして、コースガードによれば、ある対象Xをケアするということは、対象Xの内に普遍的な善——誰もが例外なく尊重すべき善——を認め、その善を推進する立場に身を置くことなのである (ibid., 73-76)。

彼女はまず人へのケアを例にして、こういった道德性（普遍性）へのコミットメントの不可欠性を擁護しようとしている。コースガードによれば、我々がある人物を本質的な意味でケアしていると言えるためには、誰もが尊重すべきような普遍的な価値——人間としての尊厳——を、その人物の内に認めているのでなければならない。その点で、我々はある人をケアするとき、普遍性へとコミットしているのだとコースガードは考える (ibid., 73, 75-76)。例えば、我が子が臓器移植を受けなければ余命わずかであるような状況で、親がその子の命を救うために、他人の子を殺し臓器を奪うとしたら、それは我が子に対するケアとしても破綻していると彼女は主張する。その親Aは、我が子A'に愛情を注いでいるがゆえに、A'の命には格別の価値がある、と考え、A'の命のために他の親Bの子B'を殺してしまう。その場合、親Aは、我が子A'の尊さ（価値）が個人的愛情に由来することを認めることにおいて、「(個人的愛情をA'に対してもたないような) 誰もが例外なく尊重すべき普遍的な価値を、我が子A'が備えている」という点を否定してしまっている、とコースガードは考える。

この点は次のような仕方で確認することもできるだろう。Aのように、「我が子への個人的愛情があるなら、我が子の命を救うために他人の子の命を奪うことが許容される」と考えてしまえば、結局、逆に他の親Bが同様の状況になったときには、(Bにとっての我が子である) 子B'に対する個人的愛情から、A'の命が奪われても仕方ないことになってしまう。そして、Aは「他の親Bが同じタイプの状況なら、Bによって我が子A'の命を奪われても仕方ない」とすることによって、我が子A'の尊厳が普遍的価値をもつこと——誰もがA'の命を尊重すべきだということ——をやはり否定してしまっているのである。このように我が子A'が尊厳を普遍的価値として備えていることを（結果的には）否定している以上、我が子A'への愛情から、他人の子の命を奪うということは、我が子へのケアとして大きな問題をはらむ、とそうコースガードは考える。それは我が子に関心を抱いている点でケアとたと言えらるとしても、「誤った」(ibid., p. 73)、そして「病的な形態 (pathologies)」(ibid., 75) のケアであり、そのケアは健全なものではない。

そしてコースガードは、このように普遍的価値に背いたり、また背かないまでも、

そういった普遍的価値を支持しなかったりするならば、それはケアの本質を欠いているという主張に傾斜していくのである。「何かをケアすることは、その何かにある種類の普遍的価値……を認めるということを本質的なものとして含んでいる」

(ibid., 76) のであり、その対象に普遍的な価値を認めないような関わり方は、ケアの本質を欠いたものなのである。それゆえ彼女はケアを愛とほぼ同義で用い、次のようにも指摘している。「あなたは何かを愛するとき、あなたは、その対象に普遍的価値……を現に認めているのだ」(ibid. [強調は引用者])。

とはいえ、コースガードの主張には、多少曖昧なところがあるという点にも触れておかなければならない。一方で、普遍的価値を認めるということを欠いた場合は、ケアとは言えるが誤ったケアなのだ、と主張しているようにも思える(ibid., 73)。だが他方で、普遍的価値を認めるというのはケアの本質に属する事柄であり、したがってその本質を欠いたら、(ケアとは言えず) ケアもどきでしかない、と主張している(ibid., 76)。その意味で彼女の主張には揺れがある。しかし彼女が最終的に論証したいのは、ケアの本質はその対象に何らかの普遍的価値を認めることにある、という見解であり、その本質を欠いたら厳密な意味ではケアとは言えない、ということのように思える。だからこそ、ケアの本質——それが備わらなければそもそもケアたりえないような性質——を規定するケアの論理に、普遍性に関するコミットメントを見てとろうとするのである¹⁴。

さらに、彼女は、普遍性に関するコミットメントの不可欠性という論点を、単にケア対象が人である場合だけでなく、物事(もの・こと)である場合にも拡張している。つまり対象が物事であっても、その対象への関わりがケアの本質に適うものであるためには、「(誰もが尊重すべき) 何らかの普遍的価値がその対象に備わっている」とケア主体が認めていなくてはならない(ibid., 73-75)。その点で普遍性に関するコミットメントを含意するのである。例えば、データを意図的に改ざんし、他の研究者を欺く科学者や、他人の作品を盗用する作家は、知的探究における知的誠実さや、芸術活動における独創性といった、その探究や活動に含まれている、(誰もが尊重すべき) 普遍的要請を重んじていないのであり、それゆえ自己の科学的探

¹⁴ コースガードは、ケアの論理には以上のような普遍性に関するコミットメントが必ず含まれている、と自信をもって断言できるほどに、自身の論証が完璧だとは考えていないようだ。だからこそ、その問題を論じている論文において「ケアの論理は道徳性へのコミットメントを含んでいる可能性がある」(Korsgaard 2006, 56, 76 [強調は引用者]) という控え目な主張もしている。しかし、彼女が、より傾斜しており、また最終的に主張したいのは、「何かをケアすることは、それにある種の普遍的価値……を認めるということを本質的に含んでいる」(ibid., 76 [強調は引用者]) という点——その対象に普遍的な価値を認めないならば、それはケアの本質を欠いているという点——であり、まさにそのような強い主張をしたいから、その主張を支持するような議論を展開しているのである。

求や芸術的活動に対して関心を抱いているとしても、それは病的な性格を帯びている (ibid.)。やはり、コースガードの考えでは、「何かをケアすることは、その何かにある種の普遍的価値……を認めるということを本質的に含んでいる」(ibid., 76) のであり、そういった不健全な関心は、ケアの本質を欠いているのである。

1. 5 ケアの厳格な解釈の問題点

さて、以上のようなコースガードの議論には大きく分けて二つの問題点があると私は考える。第一に、普遍性に関するコミットメントが欠如したケアは、誤ったケアないし病的なケアであり、厳密な意味ではケアたりえない、という主張はあまりに強すぎる。少なくとも、物事(もの・こと)に関するケア(関心)に関してはその主張はそれほど妥当性をもたないように思える。第二に、普遍性に関するコミットメントが欠如しているがゆえに、不健全だと認められるケースにおいても、そういった(コースガードの言うところの)「病的形態」への傾向性を取り除いたものを、ケアの本質として主張することは、ケアの複雑さを過小評価することにつながり、結果的にケアの真相に迫るのを妨げる。第一の問題点から取り組んでいくが、それに先立って、以上のようなコースガードの議論には、彼女のどのような問題関心があったのか、その点をまず確認しよう。

そもそもコースガードがこのような普遍性へのコミットメントに着目した理由は、ケア対象の価値に関する、主観主義的ないし投影主義的傾向の強い見解を退けることにあったと考えられる (ibid., 70-71)。この種の見解によれば、ケア対象の価値は、主体が対象をケアすることを通して付与するものとされる。つまり主体によるケアとは独立に、対象に価値が備わっている、という点が否定されるのである。コースガードは、フランクファートの内に、このような主観主義への傾向を見いだす。とはいえ、フランクファートは、ある対象がもつ重要性(価値)が、その対象をケアするかどうかとは独立であるようなケースを認めているので (Frankfurt 1988c, 92)、その主観主義的傾向が徹底されているわけではない。しかしそれでも、彼の議論には対象の価値に関する主観的側面を強調する傾向が確かに見いだされる。例えば、フランクファートによれば「我々は、まさに何ごとかをケアすることによって、世界に重要性を吹き込むこと (infuse) ができる」 (Frankfurt 2004, 23) のであり、「ケアすることは我々にとって重要な事柄を産み出す (create)」(ibid.) とされる。また、ケアと愛をほぼ同義で用い「我々が愛するがゆえに、その愛する対象が、我々にとって価値を獲得するのである」(ibid., 39) とも述べる。例えば「親が子供を愛するがゆえに、子供が価値あると親には思えたり、また子供が親にとって実際に価値があったりするのである」(Frankfurt 2006,

25)。フランクファートは、上記の引用した箇所「我々 (we)」という言葉を用いているが、M・ダン・コーヘンが的確に指摘するように、フランクファートが「我々」という言葉を使うときには、「我々ひとりひとり」という仕方で配分詞的 (distributively) に用いている (Dan-Cohen 2006, 92)。それゆえ、ここでは、ケアの個々の主体が、ケアを通して世界に意義や価値を付与するような言い方がなされているのである。こういった主観主義への誘惑に対抗するために、コースガードはケアが、普遍的な価値への支持によって制約されるべきだと考えた (Korsgaard 2006, 70-71)。

ここでフランクファートのように主観的側面を強調することが、ケア対象の価値に関する理解の進展に資するものなのか、それを妨げるものなのかは、主観的側面の詳細を彼がどう描き出すかにもよっている。したがって彼がそこまで議論を展開していない段階でその是非を判定することは難しい。しかしながら、それでも次の点は指摘するに値する。すなわち我々はある対象をケアすることを通して、その対象の価値を発見するといったことがあり、そういった発見的性格は、その対象に意義や価値を主体が「吹き込む」とか「産み出す」といったフランクファートの語り口では取りこぼされてしまう危険性がある、という点である。例えば会社づきあいでのいやいや始めたゴルフであったが、徐々にゴルフの楽しみや魅力がわかってきて、ゴルフをすることの価値を発見していくといったようなことがあるだろう。そういった価値の発見的性格は、ゴルフというスポーツに、主体が意義や価値を「吹き込む」という言い方や「産み出す」という言い方によっては捉えきれないだろう。もちろん、あたかも、そこで発見されたかのように付与しているのであると強弁することは可能かもしれないが、しかし、それでも主体の一方的な付与によって捉えられない側面があるという点は確かではないだろうか。また、たとえ主観主義という一つの立場を最終的にとるにせよ——フランクファートはそこまで極端には走らないが、仮にそういう立場が可能だとしても——、主体による付与で片づけるのが困難に見える発見的性格にきちんと目を向け、それを十分に考慮した上でそういう立場をとるのが望ましいだろう。

それゆえ、ケア対象の価値には、主体による付与ではないような非主観的な側面が見いだされるのではないか、というコースガードの着眼と問題提起自体は非常に重要である。なるほど、彼女は価値に関する発見的性格を積極的に取り上げているわけではないが、ケア対象の価値の非主観的側面をどう説明するかは、ケア論にとって大きな課題となるものであり、そこに問題を見だし、その問題の解決へと果敢に挑んでいった点で、コースガードの議論は評価できる。しかし彼女は、ケア対象に認められる価値の非主観性を、誰にでも例外なく適用できるような普遍的な価値として考えるとき、ケアに関する主張としてはあまりにも強いものになってしまうように思われるのである。

確かに、1. 3 でケア対象の多岐性を示すために挙げた事例、“care for one’s garden”「庭の手入れをする」、「care about playing golf」「ゴルフに夢中である」、「care about what one eats」「食べるものにこだわる」などに関しても、普遍性に関するケア主体のコミットメントを見いだすことができる場合があるだろう。庭の手入れを小まめにする人は、季節によって色とりどりの表情を見せる植物の豊饒な生命力に、誰もが尊重すべきような普遍的価値があることを認めているかもしれない。またゴルフに夢中になっている人も、スポーツをして体を動かすということに価値を見だし、その価値が誰もが重んじるべき普遍的なものだと考えているかもしれない。また食に強い関心を抱く人も、健康な食生活を送るということには、誰もが推進すべきような普遍的な価値があると主張するかもしれない¹⁵。

しかし、普遍性へのコミットメントというコースガードの主張は、ケアを「大切に思う」という、対象への深い関心を示す水準で捉えた場合でもなお、強すぎるように思える。例えば、ある人が、美味しいものを食べることやゴルフをすることを大切に思っている場合であっても、「美味しいものやゴルフが、誰もが尊ぶべき何らかの普遍的な価値を体現している」という考えを支持しているとは限らないだろう。その人は次のように言うかもしれない。「ゴルフがとにかく面白くて、ゴルフのことで頭が一杯だ。今やそれは自分には欠かせない大切なものののだ。しかしゴルフをすることに、誰もが尊重すべき価値が備わっているかは別の問題だし、そこまでは思わない」。こういった人に対して、「あなたはゴルフに何らかの普遍的価値を認めていないのだから、ゴルフをすることを本当のところ大切に思っていないのだ」と指摘することは的を外しているように思われる。

もちろん、人はある対象をケアするとき、そういった対象に関してある種の価値を認めているかもしれない。美食家は贅を尽くした料理が、大金を払って食べるような価値があることを認めているだろう。さらに、そういった価値が、自分のみに理解可能なものではなく、他者と分かち合うことができるものであることも認めるかもしれない。その美食家は、他のグルメ通との情報交換や交友を通じて、贅を尽くした料理の美味が他者と共有できるような素晴らしい価値であるという考えを認めるようになるかもしれない。しかしながら、こういった価値の共有可能性が認められたとしても、なぜケア主体は、そこで見いだされる共有可能な価値が、誰もが例外なく尊重すべきような普遍的な価値であると考えていなければならないのだろうか。この点に関する説明がコースガードの議論には欠けている。留意すべ

¹⁵ また、この点はフランクファートが道徳的関心に制約されない事例として挙げた、数学的真理の追究に専念する学者、美術品の鑑定に生きる意味を見いだす芸術鑑定家に関しても、想定可能である。数学者は数学的真理に誰もが尊ぶべき価値を見だし、芸術鑑定家もまた、美しいものに普遍的価値を見いだしている、といったように想定できる。

きは、こういった価値についての他者との共有可能性に関するコミットメントを、価値の普遍性に関するコミットメントと同一視するわけにはいかないという点である。なぜなら、価値の共有可能性へのコミットメントとは、ケア主体がケア対象に見いだしている価値を、誰かしらと分かち合うことができる、という考えを支持するものであって、その価値が、誰もが例外なく尊重すべきような普遍性をもつ、という考えを支持することではないからだ。

以上を踏まえた上で重要な点は、コースガードの主張（もしくはコースガードが推進している主張）——すなわち、その対象に何らかの普遍的価値を認めることに、ケアというものの本質がある——をそのまま認めてしまえば、必ずしも普遍性に関するコミットメントを伴わないような、我々のケア（関心）の多様なあり方が、その考察から抜け落ちてしまう危険性があるという点だ。彼女は、普遍性の論理を、人へのケアのみならず、もの・ことへのケアにまで拡張することで、ケア対象の多岐性を保持したままで、道徳性の制約を様々なケア対象に見いだそうとした。しかし実際には、ここで取り挙げたゴルフへの関心や美食への関心（ケア）のように、普遍性に関するコミットメントを満たさない場合が多くあり、道徳性の制約が見いだされる場合は限られている。それゆえ、ケアの本質が普遍性へのコミットメントにあると主張してしまえば、それを満たさない様々なケアが、考察対象から排除されるか、少なくとも軽視されることになるだろう。このような仕方でのケアの多様なあり方を視野に入れるのが妨げられてしまうことは、ケア論の充実にとって決して望ましいことではない。

次に、コースガードの議論の第二の問題点に移ろう。それはコースガードの議論には、「ケアの純粹主義」とでも言い表せるような傾向が見いだされる、という点である。ここでの純粹主義的な傾向とは、ケアがはらむ危うさを除去可能なものと見なし、そういった危うさを取り除いたものを、ケアの本質ないし本当のケアとして捉えるような傾向である。むしろ、ケアの危うさと言っても、様々なタイプの危うさがあるかもしれない。だがここではコースガードの例に即して、親Aのケアに見られる危うさ、すなわち我が子A'の命のために他の子の命を奪ってしまう、親Aのケアの「見境のなさ」——我が子の命のことだけ考え、他のことを顧みないで突っ走る暴走的なありかた——に注目したい。コースガードによれば、そういった見境のなさは病的であり、ケアの本質から逸脱している。彼女によれば、見境のなさといった危うい側面は、ケアに備わっているものというよりは、ケアの除去可能な非本質的部分であり、そういった見境のなさを取り除いたものが、本当のケアなのである。

しかしながら、むしろケアは対象への強い思い入れを含むような場合は、そういった危うさを、多かれ少なかれ、潜在的には含んでいるのだ、と主張することもできるのではないか。私が追究したいのは、この可能性である。というのもケアが猥

身的なものになればなるほど、その人の注意はその対象のみに集中し、他のことを考慮できなくなってしまうため、しまいには見境がなくなる、ということもありうるからだ。例えば親Aの場合であれば、次のように想定できる。親Aは他のことが一切、冷静に考えることができないほどに、愛する我が子A'の命を救おうと無我夢中だった。それは何を犠牲にしても絶対に失いたくない命であり、我が子の命を救うために、あの手、この手を考え、万策尽きたところで他人の子どもB'の命に手を出してしまった。ここでは「A'のために何とかしてやりたい、どんなことでもしてあげたい」という無我夢中の献身的な態度が、それ以外のことを顧みない暴走的態度へと繋がっているのである。

そして重要な点は、こうした形で献身性がある人から冷静さと沈着さを奪うということは、我々にとって無縁なことではなく、ある程度、馴染みのあることだという点である。例えば、ある男は仕事に夢中になり、「何としてでも良い成果を上げなければ」という仕事への強い思い入れを抱く。その結果、妻の存在を、仕事の成果を上げるために家事全般を引き受けるような道具的資源と徐々に感じるようになり、妻や子供が家庭を顧みるように要求しても、それをはねつけるようになる。またある娘は母親が重い病を患ってしまった。そして、その娘は母親に対する深い愛着から、「何としてでも容態を改善させてやらなければ」と思い、なりふり構わない無理な要求を、医師や看護師、また周囲の家族に突きつけてしまう。こういった仕方で、ケアにおける献身性が暴走性と結びつくということは、存外頻繁に生じることであり、ケアをめぐるよくある話の類に入るのではないかと思われる。またコースガードのようにある一時点のみを切り出してケアを論じるのではなく、時間的な広がりをもつ過程として論じた場合——そして、これこそが本稿が採ることになる見方であるが——、他のことを顧みない態度をとってしまうような暴走的な局面がしばしば訪れることがあるのではないか。例えば、ある母親は、ある一時期、子供の将来のためを思って、子供を名門中学校に入れさせようと必死になるあまり、子供のニーズや訴えを顧みることなく強く押さえつけてしまった、というようなことが考えられるだろう。

確かに、親Aの行動に関して言えば、それはある一線を越えてしまったように思われるが、しかし、その異様さにだけに目を奪われてしまえば、献身性と暴走性（ないし暴走可能性）の緊密な結びつきが我々のケアにもまたしばしば見出されるという重要な事実を見落とすことになりかねない。献身性と暴走（可能）性の結びつきという点においては、我々のケアはAのケアと地続きであるとさえ言えるだろう。その結びつきを、ケアにとって非本質的な周縁的要素として切り捨ていいものかと言え、決してそうではあるまい。我々が目指すのは、単純明快なケア論を提示することではなく、ケアの複雑なあり方を考慮したケア論を提示することである。そして献身性と暴走可能性の結びつきは、我々のケアの複雑さを考えるときに

は無視できないものであろう。だとすれば、こういった危うさが除去可能であるかのように前提することによって、なぜそういった危うさがケアには抜きがたく含まれているのかを問えなくなってしまうことは、ケアの真相に迫ることを困難にするだろう。

とはいえ、コースガードの厳格な捉え方に全くポイントがないと言いたいわけではない。ケア対象が人の場合は、コースガードの純粹主義的傾向の強い主張は一定の説得力をもつかもしい。実際に、「我が子の命のために、他人の子を殺すような親は、我が子のことを本当はケアしていない」といった表現は、それなりに意味を成すものであり、ケアに関する一つの自然な主張でありうる。こういった厳密な意味でのケアを描くことは、「ケアの名に値するようなケアは何か」という仕方、あるべきケアの姿を指示するような規範的な役割がある。そして、まさに自分の子どものために見境なく振る舞ってしまった親に対して、「あなたのやっていることは本質的にはケアではないのだ」と語りたくなるのは、尤もなことである。

しかしながら、ケアの本質についての彼女の議論が、「ケアは実際どうあるか」というケアという事象に関する考察（ケアの事象論）を置き去りにして、「ケアはどうでなければならないか」というケアにおける規範についての考察（ケアの規範論）において展開している点に大きな問題がある。すなわち、コースガードは、「ケアは実際どうあるのか」を論じずに「ケアはどうでなければならないのか」ということに議論を集中させ、そういった「ケアのべき論」の内部で、ケアの本質（ケアの論理）について語りだす。しかも、それだけにとどまらない。さらにケアの規範論が、規範論に収まることなく、ケアの事象論を規定するようになっている。つまり普遍的価値へのコミットメントを伴うケアを「あるべきケアの姿」とした上で、さらに、ある対象をケアしているとき「その対象に普遍的価値……を現に認めているのだ」（*ibid.*, 76）という形で、実際のケアにもまた普遍的価値へのコミットメントが見いだされとも考えている。しかしこのように、ケアの規範についての考察を、ケアの事象についての考察に先行させ、さらその規範的考察において得られた洞察をケアの事象についての考察にまで拡張してしまうと、現実のケア事象の複雑なありようは覆い隠されることになる。実際、コースガードの議論に特徴的なことは、ケアに関する具体的な描写が欠落しているということであるように思える。この点は親Aの事例のコースガードの描き方においても顕著に表れている（*ibid.*, 73）。コースガードは、最愛の我が子を失うことになる母親の苦しい胸の内、その悲痛な叫び、また母親がどのようにして犯行へと追い込まれるに至ったのか、そういったディーテイルは全く描写せずに、単に、「我が子への愛着から、他の人の子を殺すことは、人間の尊厳を蔑ろにするから、人間であるところの我が子の尊厳をも蔑ろにしているのだ」という原理的考察に終始している。そしてそれは原理的考察であるから、彼女自身によって「ケアの論理（logic of care）」と名付け

られてもいる。確かに、「その対象の普遍的価値にコミットすることにケアの本質がある」という主張は、ある文脈において意味をもつかもしい。しかし、こういったケアの論理を、ケアのディテールにきちんと注目することなく適用することは、ケアの危うさを含めた多様なケアのありようを、考察対象から外すことになるから、ケア論にとって有益であるどころか有害でさえありうる。

また、コースガードの主張をケアに関する規範的主張として専ら解した場合でさえ、やはり問題がある。というのも議論の順序として、まず実際のケアの多彩なあり方——ケアの困難や危うさを含む——をきちんと見た上で、その後にケアについての規範が立てられるべきであって、コースガードのように、現実のケアの複雑な部分を削ぎ落としてしまうなら、その規範的主張も空疎なものになりかねないからだ。つまり、ケアに関する規範的主張をする場合も、その規範的主張はあくまでも現実におけるケア事象に迫りつつ、それを念頭に置く形でなされなければ、その有効性や妥当性は大きいに削がれることになる。例えば在宅介護が、状況によってはケアする家族にとって大きな負担となり過酷なものになる、という現実を考慮せず、「在宅ケアを採用すべきだ」と介護のあるべき姿を語る規範的主張は空疎であろう。また、ある職場が劣悪な労働条件であるにもかかわらず、そういった現状を度外視して、その職場で「仕事に献身的に関わるべき」という（仕事へのケアに関する）規範的主張を唱えても空疎かもしれない。同様に、現実のケアの複雑で多彩なあり方を踏まえ、「ケア対象には何らかの普遍的価値を見いだされなければならない」という、ケアに関する規範的主張をしても空疎でありうる。コースガードはケアの規範論をケアの事象論に一方的に先行させるが、逆にケアの事象論がケアの規範論に先行するという側面も備えていなければ、ケアの規範論は、現実には即さない実効力のないものになるだろう。すなわち、コースガードは現実のケアの複雑さを考慮した上で、もしくはその複雑さの只中で「ケアがどうでなければならないのか」を問うのではなく、そういった複雑な事情を非本質的で除去可能な要素であるかのように見なし、ケアに関する規範的主張をする。このような形でケアに関する規範的主張を天下り的に述べてしまえば、その主張は、現実のケア事象へのまなざしを曇らせる仕方で機能すると思われるのである。

むろんコースガードも親Aのケアを異様なものとして認めているのだから、ケアの危うさを実際に認めているのである。しかし、その危うさはケアの重要な特徴とは見なされないため、ケアの危うさがどのように形作られているのか、といった危うさの実態を読み解くような具体的考察はなされていない。ケアにはある種の危うさが抜きがたく含まれている、という発想はコースガードには希薄であり、それゆえ彼女は、ケアの理念的型（論理）にこだわるのであるが、そのこだわりは、そういった理念的型からはみ出ていくケア事象に関する踏み込んだ考察を妨げる可能性があり、それはケア論を充実させる上で、望ましいことではないように思え

る。ここに、コースガードのケアの厳格な解釈の難点がある。

さて、本稿ではケアの日常的解釈を採用すると述べた。そして、その日常的解釈に基づくならば、普遍性に関するコミットメントが欠如していても、そこに一定の関心が表現されていれば、正真正銘のケアでありうる。確かにケアの日常的解釈は、ケアの複雑さや危うさに関する考察を保証するものではないが、それでも、少なくとも、そういったものに関する考察をあらかじめ排除したりはしない。また、そういった日常的解釈に基づく「気にかかる／気にかける／大切に思う」の三つの様態もまた、普遍性へのコミットメントという意味での道徳性の制約に服さないものであるから、ケアの危うさを、ケアの一つの重要な局面、それも不可避な局面として考察する道を確認しているのである。

したがって親Aのケアに関しても、それがケアの理想的なあり方から大きく逸脱した異様なものであるにせよ、正真正銘のケアとして認めることができ、なぜケアは見境のなさといった危うい部分を多かれ少なかれ含まざるをえないのか、といったことを考察できる。例えば、ケアが献身的なものになればなるほど、その人の注意はその対象のみに集中し、他のことへの注意が疎かになる危険性がある。こうして視野狭窄に陥ったうえで、切迫した状況に直面すると冷静さや沈着さもまた失われるから、なりふり構わない行動をとってしまうことも十分ありうる、といったような仕方で説明できるだろう¹⁶。もちろんこれは要約的な説明にすぎないが、こういった説明をさらに詳細にしていく道も確保されているのである。そして、そうすることによって、ケアについて、そこに含まれる変動や起伏を含めて、より具体的に考察できるようになるのではないだろうか。

さて、以上の点を踏まえると、ケアを厳格に解釈するより、ケアを日常的に解釈した方が、ケアと行為者性について、その多様なあり方を考慮できることになり、それゆえより豊かな洞察を得ることができる可能性が高いと言えるだろう。

¹⁶ ケアを最初から「善い」ものであるはずだと考えてしまうと、ケアの危うさという負の側面に気づきにくくなってしまうように思える。例えばM・メイヤロフは、ケアを「他者の成長を助けるもの」として最初から定義するが (Mayeroff 1972, 12-15)、そうすると、我々の現実のケアがなぜ必ずしもそのようにうまくいかないのか、ということについての考察は難しくなってしまう。

第2章 動的なものとしてのケアと行為者性

前章では、ケアをどういうものとして捉えるのかに関して一定の明確化を図り、ケアの多彩なあり方についての考察を排除しないという点で、ケアの日常的解釈を擁護した。こういった前章の作業は、本稿の基本的枠組みを示すものであり、ケア・アプローチを展開するにあたっての「準備作業」のようなものであった。本章以降では、ケア・アプローチを本格的に展開することになる。

まず本章では、ケアが一定の時間的推移の中で、その細部を変化させていくという動的なケア観を提示するとともに、行為者性に関しても、スタティックな通時的構造ではなくダイナミックな通時的展開という観点から捉え直すことになる。そして、こうした形で、ケアと行為者性を動的に捉え直した場合、行為者性の問題を、主として能動性の領域に属する問題と見なす従来の行為論における行為者性の理解には難点があることを示す。そして、能動性と受動性が絡み合うような「能動性と受動性の混成体」として、行為者性が動的に捉えられるという考えを提示する。こういったケアと行為者性に関する動的な見方を提示していく上で、鍵となるのが、「気にかかる」という水準のケアである。そこで本章では「気にかかる」という様態について踏み込んだ考察をしていくことになる。

具体的には以下のように議論を進める。まず、「気にかかる」という様態がケア対象との関わりにおける受動的側面を含んでいる点を論じる（2. 1）。次に、「気にかかる」という受動的様態への着目が、他のケア・アプローチに見られない独自の特徴であることを踏まえ、そもそもなぜ従来のケア・アプローチが「気にかかる」という様態を軽視し、「大切に思う」という水準でのケアを重点的に考察してきたのか、という点を論じる。そして、従来のケア・アプローチは、行為者の継続的なあり方を分析するために、持続性を備えた「大切に思う」という水準のケアを重視した、ということを明らかにする（2. 2）。しかし、実のところ、そういった通時的な行為者のありようを変化に富んだ、より豊かなものとして捉え直すためには、主体を未知の局面に出会わせる「気にかかる」という様態の働きに着目することが、決定的に重要になってくるという点を示す（2. 3）。最後に、人間の行為者性には、受動性が入り混じっている点を指摘し、それゆえ、「気にかかる」という様態に注目することで、受動が能動にどのように結びつくのかを捉え直すことが重要になると論じる（2. 4）。

2. 1 「気にかかる」という受動的様態

本稿のケア・アプローチは、(2. 3でも見るように) 他のケア・アプローチと異なり、「(～が) 気にかかる」という様態を、(ケアの一区分を形作るほど) 重要な契機として捉える。「気にかかる」という様態は、ケア対象への関わりにおける受動的な様態を表現したものにはほかならない。そして本稿では、このように対象への関わりの受動的側面を「気にかかる」という言葉で特定し、ケアの一区分として明示化することで、対象との関係性における受動的側面について、単にそれを示唆したり指摘したりすることに留まらない、踏み込んだ考察をする道を確保しているのである。

「(～が) 気にかかる」が受動的様態である点は、「(～を) 気にかける」と対比させて考えると分かりやすいだろう。「Xを気にかける」は主体の側から、自発的にXに注意を向けることであろう。例えば太郎が、最近仕入れた商品の売り上げを気にかけているという場合、それは売り上げに進んで注意を向ける、ということであり、主体からの働きかけの側面が強調されている。そしてそこでは、多くの場合、自発的な行為が伴っている。太郎が商品の売り上げを気にかけている、ということは、自ら進んで、売上高をスタッフに尋ね、売り上げが伸びているか確かめる、といったような自発的な行為を伴っているのである。その意味で「気にかける」という様態は、能動的な様態だと言える。それにたいして「Xが気にかかる」は、主体の能動的な働きかけに先立って、Xによって、主体の注意が引きつけられ、とらわれているような様態であり、その意味で、受動的だと言えることができるのである。そこには主体の自発的な対応(行為)があるというよりは、非自発的な反応があると言った方がよいだろう。例えば、太郎は自分の仕事に対する周りからの評価が気にかかる、ということは、部下が自分の企画書について辛辣な批判を述べているのを、太郎が偶然耳にしたら、自ずと注意がそれに引き留められてしまうということである。そのとき、自らの意図とは無関係に、「企画書についての部下の発言」に非自発的に反応してしまっているのである。それゆえ、それは太郎が自ら進んで為した自発的な行為ではない。他にいくらかでも例を挙げることができるだろう。「隣人の出す騒音が気にかかる」「無礼な態度をとってしまったことが気にかかる」「夫／妻の不機嫌な様子が気にかかる」「長くの伸びた前髪が目にかかって気にかかる」「芸能記事が気にかかる」など、いずれも、こちらが進んで注意を向けるのに先んじて、主体はその対象によって注意を奪われ、非自発的な仕方に対象に反応してしまっている。その意味で、それは受動的な様態だと言えるだろう。

そして、「Xを気にかける」は自発的な行為を伴うような能動的様態なのに対し、「Xが気にかかる」は非自発的な反応から成るような受動的様態だからこそ、「Xを気にかける」に関しては、「Xを気にかけてよう」という意図の表現は意味あるも

のとして成立するのにたいし、「Xが気にかかる」に関しては、その意図の表現は存在しない（「気にかかろう」は意味を成さない）。こういった言語表現の内にも、「気にかかる」が、主体が導きうる様態ではなく、主体がそれへと導かれてしまう様態であるということが示されている。

さらに付言すれば、「気にかかる」はまさに自分から導くことができないような様態であるがゆえに、ちょっとしたことがきっかけになって、突如としてあることが気にかかってしまうという具合に、不意に訪れる場合が多い。例えば、部下の辛辣な批判が気にかかる、といった場合は、その辛辣な批判を偶然に耳にしたことから、突如として、それが気にかかる対象になったのである。また、読書をしようと思ったときに、これまで全く気にかからなかった隣人の騒音が突然、気にかかるようになる。上司の不機嫌な様子がきっかけになって、最近、上司に無礼な態度をとってしまったことが急に気にかかってしまう。こういった仕方で「気にかかる」ということは、主体があらかじめ予想していなかった仕方で、不意に訪れるものなのである。

以上のように「(～が) 気にかかる」と「(～を) 気にかける」とを対比させたからといって、両者は相互排他的であるわけではない。同じ対象Xに関して、「気にかける」と「気にかかる」の二つの様態が成立しているということもありうる。例えば、太郎は新商品の売り上げを進んで気にかけるときもあるし、それがどうしても気にかかってしまうこともある。しかしその場合も、上記の説明は何ら困難をもたらさない。太郎が会議で新商品の売り上げに積極的に注目し、それを議題として取りあげる場合は、そこには自発的行為が伴っており、「売り上げを（進んで）気にかけている」と表現した方が適切かもしれない。もしくは「売り上げが単に気にかかっているだけではなく、売り上げを（進んで）気にかけてもいる」と表現できるかもしれない。しかし、週末に子供と遊んでいる最中に、売り上げについてふと心配になって、それに注意がいつてしまう場合は、「売り上げが気にかかる」と表現した方が適切だろう。そして、ここでもやはり「(～を) 気にかける」は自発的に注意を向けることであり、「(～が) 気にかかる」は非自発的に注意が誘引され、とらわれることであろう。太郎に関して言えば、売り上げを自ら気にかけているし、自ずと気にかかってもいるのであり、どちらか一つの様態のみが太郎に当てはまるのだ、と考える必要はない¹⁷。

さて、「気にかかる」に注目し、ケア対象との関わりにおける受動的様態を重視

¹⁷ 2. 3では、「気にかかる」という様態と「気にかける」という様態は相互排他的どころか、むしろ密接に関連しているという点を見ていく。第一にXが「気にかかる」という様態からXを「気にかける」という様態へと進展していくことがある。第二に、たとえXを気にかけるようになっても、依然としてXに関連する様々なことが気にかかっているのである。

するという点は、本稿の特徴的な点であり、また本稿のケア・アプローチを従来のケア・アプローチから分かつ重要な点でもある。しかし、なぜ、そもそも従来のケア・アプローチと異なり、「気にかかる」という受動的様態を重く見る必要があるのか。まずは従来のケア・アプローチがどういう方向をとったのか、しばらくの間、見ていこう。

2. 2 従来のケア・アプローチ——「大切に思う」集中路線

人間の行為者性に関する分析に関してケア・アプローチをとる多くの論者たちは、第三区分「大切に思う」という水準をまず中心に据え、またそこから派生する第二区分「(～を) 気にかける」(能動的様態)という水準を視野に収めつつケアを論じてきた (e.g., Frankfurt 1988c; 1999; 2004; 2006; Jaworska 2007; Seidman 2009; 2010; Tappolet 2006)。しかし、第一区分「(～が) 気にかかる」(受動的様態)という水準に関しては、十分な注意が払われてきたとは言い難い。本稿で私もまた「大切に思う」という水準に注目していくことになるが、そのみならず「気にかかる」という水準に関しても考察を掘り下げていく必要があると考える。その意味で、「気にかかる」の考察をあまり行わず、「大切に思う」に議論を集中させる、従来のケア・アプローチとは一線を画することになる。以下ではこういった従来のケア・アプローチに見られる傾向を「大切に思う」集中路線と呼びたい。もちろん、一口に「大切に思う」集中路線と言っても、何に着目して「大切に思う」というあり方を分析するか、ということに関しては一致しているわけではない。フランクファートは動機づけの次元、J・ヤヴォフスカやC・タポレットは感情の次元に力点を置いている (Jaworska 2007, Tappolet 2006)。しかしこれらの論者は、そういった差異にもかかわらず、「気にかかる」という様態に関しては、たとえそれに言及していたとしても、それを主観的に考察するまでには至っていないという点で一致している。本稿もまた「大切に思う」を重視することには変わらないが、「気にかかる」という様態の考察を棚上げするようなことはしない。そこで以下では本稿の立場を三区分路線として、「大切に思う」集中路線から区別したい。

それでは、従来の「大切に思う」集中路線に対して、「気にかかる」という受動的様態もまた重視するような三区分路線で行く強みはどこにあるのか。まずこの節では、そもそもなぜ「大切に思う」集中路線を多くの者が採用しているのか、その狙いを明らかにすることによって、その路線についての理解を深める。その際、主として、「大切に思う」集中路線を最初に開拓し、その最も代表的論者でもある、フランクファートの議論を見ていくことになる。そして次節以降で「大切に思う」集中路線から予想される批判に答えることを通じて、「気にかかる」の主題化を伴

う三区分局線の利点を指摘したい。こうした段階を踏むことで、なぜケアの受動的様態である「気にかかる」を主題的に考察することが、強調すべき重要性をもつのかもよりよく理解できるようになると思われる。

さて、この節では、「大切に思う」集中路線の論者に共通して見られる一般的な狙いを見ることを主眼とするので、フランクファートの数ある見解の中でも、彼独自の洞察よりも、むしろ同じ路線をとる他の論者たちにも引き継がれ共有されているような洞察を中心にして見ていこう¹⁸。フランクファートによれば、ある対象Xをケアすることは、「Xを自分にとって大事と見なす (Frankfurt 1999e, 155)」ということであり、そこではXへと身を投じる (investment) ような献身的なあり方 (devotion) が伴うとされる¹⁹。フランクファートはその献身的性格を強調するために、ケアを愛 (love) と言い換えたりもする (Frankfurt 1988c; 1999; 2004)。こうして、ケアは単に「気にかかる」や「気にかける」ということではなく「大切に思う」ということだとされるのである。そしてケア・アプローチをとる他の多くの論者もまた、(愛という言葉は使わないまでも) ケアを「大切に思う」という水準で捉えることで、このフランクファートの路線を踏襲していくことになる (Jaworska 2007; Tappolet 2006; Seidman 2009; 2010)。

むろん、フランクファートをはじめとする論者が、「大切に思う」というあり方に注目するのは、それなりに尤もな理由があつてのことである。彼らは、「大切に思う」というあり方を考察することを通して、ある一時点の意図的行為のみを問題にする (それまでの) 行為論——アンスコムやデイヴィドソンの行為論——では光が当てられなかった、「行為者の継続的なあり方」を主題化することができると考

¹⁸ フランクファートが提示した独自の見解に関しては、第三章で扱うことになる。

¹⁹ フランクファートはケアを、その対象が自分にとって大事であること (importance to oneself) という概念との関連で押さえるが、自分にとって大事であるという性格は、一般的に重要だ、ということではなく、その人からすると大事だ、という個別性を帯びたものであり、それゆえ、日本語を用いて一言で表現すれば「大切」ということになるだろう (Frankfurt 1999e, 166)。ここでの「大切」という概念は「重要」という概念と区別されなければならない。「花子は重要だ (花子は重要人物だ)」という言明は多くの場合、何らかの役割をもったものとして「～のために花子は重要だ」「花子は～という点で重要だ」ということの省略形として理解できるかもしれない。このように、重要という概念が、どちらかと言えば、目的—手段連関の内部で機能する概念であるのに対し、大切という概念はそういった目的—手段連関とそこまで強く結びついていない。少なくとも、そういった側面が「大切」という概念にはあるように思われる。例えば「花子が大切だ」という言明を聞けば、我々は、そう述べる人物が花子に愛着を感じていることや、その人物にとって花子という存在が固有の重みをもつということを理解できるのである。フランクファートはケア対象が、それをケアする人にとって固有の重みがあるものだ、という点を強調するのである (Frankfurt 1999c, 108-110)。それゆえ、ここではケアを「大切に思う」と訳したい。

えた (Frankfurt 1999e, 155-160 Jaworska 2007, 552-560; Seidman 2009; 2010)。というのも、大切に思うこととしてのケアは、持続性をその基本的特徴とするからである。フランクファートによれば、

程度の差はあれ、一定の時間的な拮がりの中でのみ、人はあることを大切に思う。……欲求や信念は、本質的には何ら持続性を備えていない。すなわち、欲求することもしくは信じることの本性は、それらが持続しなければならぬことを要請しない。しかし、方向づけという観念、そしてそれゆえケアの観念は、振る舞いが特定の仕方で一貫しているということや安定しているということを含むのである。(Frankfurt 1988c, 84)

フランクファートの主張は次のように説明することができる。例えば、太郎は満員電車で隣の乗客に足を強く踏まれた結果、「足を踏んだ人は謝るべきだ」という信念と、(あまりに痛かったので)「足を踏んだ人に謝るように注意したい」という欲求をもったとしよう。しかし相手が「ごめんなさい」と申し訳なさそうに謝ってきたら、謝らせたいという欲求も、謝るべきだという信念も消え去るだろう。その意味で欲求と信念は瞬間的なものでありうる。他方で、ある人が「Xを大切に思う」という仕方でXをケアする場合、それは単なる一時的な状態ではなく、持続的なあり方なのである²⁰。太郎が、自分の仕事、例えば服屋の経営という仕事にやりがいを感じ、それを大切に思っているとしよう。その場合、彼はすぐにその仕事を投げだしたり放棄したりはしないだろう。もし太郎が、特段の事情なく、店の経営を中途半端に投げだし誰かに譲り渡すということになれば、その仕事を大切に思っていたのかどうか自体が疑われる。したがって「店の経営を大切に思う」と想定されている以上は、太郎の仕事への取り組みは、一時的なものではなく持続的なものだと考えられるのである²¹。

さらに、「ある対象を大切に思う人は、その対象に関連している事柄に自らを関

²⁰ もちろん、このことは「大切に思う」というあり方が、欲求や信念と無関係であるということではない。そうではなく、欲求・信念以上のものだ、ということなのである。

²¹ ここで「～を大切に思う」は信念として考えられていない点に注意を促したい。その意味で「～を大切に思う」は「～が(～は)大切だと思ふ」と区別されるべきである。細かい区別だが、「～を大切に思う」の場合は、態度そのものの一部を形成しているものとして「大切」という概念が入っている。他方「～が大切だと思ふ」は、態度の内容の一部として「大切」という概念が入っている。態度を傍点で強調すると、前者は〈花子〉を大切に思ふ、後者は〈花子が大切だ〉と思ふ、という形で捉えられる。それゆえ、後者「大切だと思ふ」は信念であるが、前者「大切に思ふ」は信念ではないと考えられる。

わらせる」(ibid., 83) というフランクファートの指摘を踏まえ、それを持続性という論点と結びつけるなら、Xを大切に思うということは、Xに関連する様々な事柄に、一度ならず繰り返し関与することだと解釈できるだろう。例えば太郎は、A社と商品Bの最終的な値段交渉をするといったような、単発の行為にだけ関与しているのではない。経営者としての仕事に関連する様々な業務、すなわち部下の教育や、仕入れる商品の検討、宣伝広告活動、客へのヒアリング、取引先との値段交渉などに繰り返し——多くの場合、誰かと共同で、また指示を出すという形で——関わっているのである。そういった一定の形で、彼は自分の振る舞いを通時的に方向づけるから、その振る舞いは一貫性も帯びることになるだろう。むろんケアの対象が人の場合も、この点は同様だろう。もし親が我が子を大切に思うなら、それはある一時点の行為——息子の運動会を見に行く——を実行することによってではなく、息子のことに関連する諸活動——息子と会話する・息子に食事を作る・息子と遊ぶ——を日々の生活の中で繰り返し行うことによって表現されている。やはり、こういったことの反復において、親は自らの振る舞いを、一貫性を伴う仕方で通時的に方向づけているのである。

なお、ここで本稿の三区分に即して言い直すと、Xを大切に思い、Xに関連する事柄を気にかけている（能動的様態）、という仕方で、フランクファートのここでの発想を捉えることができるだろう。フランクファートによれば、ケアする人は、「対象に関連する事柄に特定の注意を向け、自分の振る舞いをそれに基づき方向づける（Frankfurt 1988c, 83）」のである。フランクファートにおいては、注意が引きつけられるという受動的様態よりも、（こちらから）注意を向けるという主体の能動的様態が強調され、対象によって振る舞いを方向づけられるという点よりも、主体が自己の振る舞いを方向づけるという点が強調される（Frankfurt 1988c, 82, 87; 1999a, 87-88）。このことを考慮すると、太郎が仕事を大切に思うということは、対象に関連する事柄——部下の教育・仕入れる商品・宣伝広告活動——を進んで気にかけている、ということによって構成されている、と捉えることができる。実際、フランクファートの指摘に基づき明らかになったのは、大切に思うというあり方が、その対象に関連する行為を持続的に為すという傾向性をもたらすという点である。太郎は、経営者としての仕事に関連する様々な業務を、共同で行ったり、また指示をだすという形で間接的に行ったりするのだが、それらは全て自発的行為なのである。それゆえ、自発的行為を伴う注意傾向である「気にかける」という観点から、フランクファートのアイデアを「太郎は仕事を大切に思っている場合、仕事に関連する事柄を進んで気にかけている」という仕方で、記述することもできるのである。ただし、この「気にかける」は、「大切に思う」というあり方に特徴的な行為の反復性が入ってくるので、持続性を帯びた能動的な傾向性としての「気にかける」となる。こうして「大切に思う」というあり方は、「気にかける」とい

う能動的様態に持続性を伴わせることで、振る舞いを、一貫した仕方で通時的に方向づけている、と捉えることもできるだろう²²。

さて、以上で見てきた「大切に思う」に関する説明は極めて大まかな粗描にすぎないが、しかしそれでも、「大切に思う」というあり方が、ある対象に一定の期間にわたって一貫した仕方で関与するという点で、通時的な行為者性と強く結びついているということが分かるだろう。そして、この通時的な行為者性という点が、なぜフランクファートが、「大切に思う」という水準のケアにこだわるのか、という点を読み解く鍵になる。すなわちフランクファートは、大切に思うということが通時的な方向づけを含む点に着目して、人間の行為者が、(大切に思うという水準での) ケアを通して、自らの生き方を部分的に形作っていくという点を重視するのである。フランクファートによれば、「何をとりわけケアするかということは、生のありようや生の質に大きな影響を与える」(Frankfurt 2004, 17) のであり、「我々が実際に様々なことを大切に思っているという事実は、人間の生の性格にとって根本的な重要性を有している」(ibid., 16) のである。だからまた、「何を大切に思うか」という問題は、「どう生きるか」という問題と連なっているとも考えられているのである (ibid., 23-26)。

「ケアにおける行為者性(行為者のありよう)は、その人の生き方を形作っていくようなものだ」というフランクファートの論点を理解する上で重要なのは、生き方というもの、ある一時点の単発の行為によってではなく、行為の反復や継続によって部分的に形作られるという点であろう。そして今まで見てきたように、大切に思うというあり方は、このような反復と継続をまさに伴っているからこそ、その人の生き方を形作っていくものになるのである。仕事に対する太郎のケアの事例で言えば、A社と商品Bの最終的な値段交渉をするといったような、単発の行為に

²² なお、ここで留意すべきは、フランクファートにおいて「(～を) 気にかける」という能動的様態が強調されている一方で、「(～が) 気にかかる」という受動的様態が強調されていない、という点である。むしろ「大切に思う」集中路線をとる論者が「(～が) 気にかかる」という側面を全く無視しているかというところではない。特にフランクファートは、ある箇所では明確にその側面に言及している。すなわち「彼[ケアする主体]の注意は、その対象に集中的に向けられているのみならず、その対象によって固定化され、とらわれてもいるのである。いわばその対象はその人の心を虜にしているのである」(Frankfurt 1988c, 89) と述べている。しかしながら、フランクファートは、対象に注意が引き留められているような「気にかかる」の様態をこれほどの確に言い当てていながら、それについて後にも先にもこれ以上、言及することはなかった (Frankfurt 1999; 2004; 2006)。むしろ注意を引きつけ、とらえられる(気にかかる)よりも、注意をこちらから向ける(気にかける)ということにより着目し、主体の能動性を強調していくことになる。第三章で見るようにフランクファートは、自律や自己統御に人間の行為者性の重要な特徴を見てとっている。そのため能動性を重視するという方向性が打ち出されることにもなる。

よってではなく、経営者としての仕事に関連する様々な業務に繰り返し継続的に関わることに於いて、太郎の生のありようが部分的にはあるが、重要な仕方で形作られていくのである。

そして、「自己の生を形作る行為者のありよう」というフランクファートの洞察の根本的重要性は、意図的行為論という当初の行為論の枠組みを踏まえることで、いっそう明確になるだろう。なぜなら、こういった自らの生を形作っていくような行為者の通時的なあり方こそ、単発の意図的行為に関する分析を中心に据えた行為論、すなわちアンスコムやデイヴィッドソンなどの行為論においては取りこぼされていた当のものだからである。彼らの意図的行為分析は、ある一時点の振る舞い——太郎の事例に即すれば、A社と商品Bの最終的な値段交渉をする——を考察対象とし、その振る舞いが意図的行為の身分をもつのはいかなる条件を満たす場合かを説明することを主眼とする。

例えばアンスコムにおいては、値段交渉をするという太郎の振る舞いが意図的行為であることは、なぜ（何のため）その交渉をしているのかを太郎本人が行為時点で観察によらず知っているということ、すなわち実践知をもっていることによつて説明される（Anscombe 1963, 49-53）。つまり、「収益を確保するために」という仕方で、本人がいま為している自分の振る舞いの眼目や理由を自覚していること（実践知の成立）によつて、その値段交渉は、意図的行為としての身分をもつことになるのである。またデイヴィッドソンにおいては、太郎がもつ一組の欲求と信念、例えば「収益を確保したい」という欲求と「商品Bに関する値段交渉によつて仕入れ価格を下げれば、収益は確保できる」という信念が、行為の理由であると同時に原因であるということによつて説明される（Davidson 1980a, 3-20）。つまり、そういった欲求や信念に言及する実践的推論が行為に単に伴うということによつてではなく、その実践的推論が行為を実際に引き起こしたということによつて、意図的に為された行為としての性格が説明されるのである。

しかしここでは、ある一時点で為された単発の意図的行為が問題にされ、そして、その意図的行為が、アンスコムの場合はその一時点における（つまり行為している最中の）実践知によつて、デイヴィッドソンの場合は、行為に先立つある一時点の欲求や信念によつて説明される。問題になる行為もある一時点のものなら、その行為を説明する態度もある一時点のものなのである。それゆえ、そういった説明の枠組みによつては、行為者の継続的なあり方を主題化するだけの時間的な広がりを視野に収められない。他方「大切に思う」というあり方を考察することは、それが対象への持続的な関与を伴うがゆえに、自らの生を形作っていくような通時的な行為者のありようを明らかにすることにつながる。こういった仕方で「大切に思う」集中路線は、意図的行為の分析を中心に据える行為論を刷新するようなインパクトをもちうるがゆえに、ケア・アプローチをとる論者に採用されてきたと考えられ

る²³。

2. 3 行為者性の通時的構造から通時的展開へ

本稿もまた、行為者性が、時間的な広がりを持ち、その人なりの生き方に結びついていくという点を重く受け止める。そして、単発の意図的行為における時間断片的な行為者性よりも、むしろ複数の時点にまたがる通時的な行為者性を論じる²⁴。それゆえ「大切に思う」というあり方についての考察を決しておろそかにしたりはしない。それどころか、従来のケア・アプローチがもたらした成果に部分的に依拠しつつも、「大切に思う」の分析をいっそう充実させたいとも考えている。それゆえに本稿の立場は、「大切に思う」という水準でのケアも視野に収めた三区分路線なのであり、「大切に思う」という水準が人間の行為者性の解明にとって二次的だとは決して考えない。

しかし、このように本稿で主題となるのも通時的な行為者のあり方だとすると、ここで次のような疑問が生じるだろう。「複数の時点にまたがる通時的な行為者性が、「大切に思う」というあり方に特徴的なならば、それに議論を集中させていけば、十分ではないか。なぜ通時的な行為者性を分析するにあたって、「気にかかる」といった受動的様態をわざわざ突き詰めて考察する必要があるのか」。こういった論者からすれば、「気にかかる」という区分を設けることによって受動的様態に関する主題的考察への道を開くということが、なぜそもそも、強調すべきポイントたりうるのか、それが疑問に感じられるだろう。そこで本節と次節では、「大切に思う」集中路線を支持する論者から予想される、こういった疑問にもう少し明確な輪郭を与えて、「気にかかる」の重要性を疑問視する二つの議論を構成したい。そして、その二つの議論に答えることを通して、本稿の立場がもつ眼目を浮き彫りにしたいと思う。「気にかかる」という受動的様態の重要性を疑問視する一つ目の議論は、持続性に関するものであり、二つ目の議論は、行為者性に関するものである。まず

²³ アンスコムやデイヴィドソンに限らず、意図的行為論は、普段の何気ない行為を取りあげて分析するという方向性で展開した。例えば「タクシーを止める」「電気をつける」「窓を開ける」といった行為が主題になったのである。しかし、そのことによって、我々にとって重大な関心事となるような、生き方の問題や自己の問題から行為の問題は切り離される結果にもなった。フランクファートは、こういった行為論がやせ細っていく傾向に対して、ケアという概念を導入することで、極めて印象的な仕方で異議申し立てをしたと解釈できる。

²⁴ ブラットマンもまた自身の計画理論を拡張することによって、この方向性を追求するが、本稿のアプローチがブラットマンのアプローチに対して、どういう立場をとるのかは第四章で明らかにする。

一つ目の議論から取り組み（2. 3. 1 および 2. 3. 2）、二つ目の議論は次節（2. 4）で扱おう。

2. 3. 1 「気にかかる」の重要性（1）

「気にかかる」の重要性を疑問視する第一の議論は、「気にかかる」という様態は、持続性を備えているわけではないので、その様態について考察したところで通時的な行為者性の解明には役に立たない、というものである。例えば、ショーウィンドウに並べられた、おいしそうなケーキが太郎の注意を引きつける。太郎は、そのケーキが気にかかりショーウィンドウの前で数分、立ち止まる。しかし花子と待ち合わせをしているので、しばらくするとその場を立ち去る。ケーキのことはそれきりになり、太郎は、花子と何の映画を見るか考えながら待ち合わせ場所に向かう。こういった仕方では「気にかかる」という様態は何ら持続性を伴わない一過性のものである場合も多いだろう。「気にかかる」という水準でケアを捉えたとしても、通時的な方向づけというせつかく手にした重要な論点を取り逃がすことになるだけで、通時的な行為者性の実態に迫るところか、それから遠ざかってしまうかもしれない。このような懸念が生じる。それゆえにフランクファートは一時的でありうるようなケアはケアの名に値しないと考えているように思える。

……たった一時しか、あることをケアしないということがありうると想定すれば、その人は、衝動によって突き動かされている人と区別されないことになってしまうだろう。彼は如何なる固有の意味でも自分自身を方向づけている、またはある方向へ導いているとは言えなくなる。(Frankfurt 1988c, 84)

こうして、たった一時のものでもありうるような「気にかかる」という様態を主題的に考察することは、あまり価値のないことのように思えてくる。「気にかかる」ということについて踏み込んだ考察をしても、通時的な行為者性の解明に寄与するような、労力に見合った成果が得られる可能性が低いならば、「気にかかる」の分析は棚上げにして、「大切に思う」集中路線に徹する方が、より賢い選択だろう。おそらく「大切に思う」集中路線の論者が、「気にかかる」に関する本格的な考察に着手しないのは、このような疑念が背景にあってのことだと思われる。

「気にかかる」の主題的考察がもつ意義を疑問視する第一の議論に対して、どう答えることができるだろうか。応答に際して、まず決定的に重要なのは次の点である。すなわち、本稿が通時的な行為者性ということで問題にしたいのは、行為者性の静的な通時的構造よりも、時間的推移の中で変動をはらみつつ生成し展開するような行為者性の動的な通時的展開であるという点である。そしてこれこそが、本

稿が従来のケア・アプローチと似ていながらも、微妙に、しかし重要な仕方で異なっているところなのである。フランクファートが、自らの考察を「[行為者の] 来歴に関するものであるよりは、主として構造に関するものだ」(Frankfurt 1988, viii) と言っているように、フランクファートはじめ従来のケア・アプローチはたとえ持続性を強調していても、そこで主に考察されているのは、行為者が備えているどのような態度(構造)が、持続性を保証したり、構成したりするか、という問題である。つまりどのような態度を備えれば、人間の行為者性に特徴的な持続性は保証できるのか、といった問題であり、その分析は、基本的に静態的なものである。後に見るように、そこでは最初から構造として大切に思うという態度が、行為者に備わっているかのように扱われ、その態度が、ケア対象との触れ合いの中で段階的に発現していくという点には注意が及んでいないのである。

付言すれば、(世界の諸対象との関わりよりも) 行為者に備わっている態度(構造)を重視する傾向性は、従来のケア・アプローチのみならず、行為論の論者に広く認められるように思われる。現代行為論は当初、意図的行為を構成するための理論的道具立てを問題にしてきた。例えば、欲求と信念の組によって意図的行為を構成できるか、それとも、欲求と区別されるような独自の状態としての意図を持ちだす必要はあるか、という仕方で、人間の行為を意図的な行為として構成するのにどのような態度を備え付ければよいか、ということが問題になったのである(e.g., Davidson 1980a, 1-23)。そして、行為者としての自由をどう説明するかということが、行為論で問題になったときも、また、やはり、どのような態度を装備していれば、そういった自由なあり方が構成できるかが問題になった。例えば初期のフランクファートによれば、行為者としての自由なあり方は、欲求に対する二階の意欲という態度をもっているときに重要な仕方で構成される(Frankfurt 1988a, 11-25)。またワトソンによれば価値判断によって、さらに(第四章で見るように)ブラットマンによればある欲求に対する二階の方針によって、行為者としての自由は重要な仕方で構成されるのである(Bratman 2007a, 21-46; Watson 1975, 205-220)

²⁵。

しかし、本稿は、このような、行為論全体に認められる方向性に一定の重要性を認めつつも、それに満足することをよしとしない。というのは、時間的に幅のある行為者性を解き明かすにあたっては、その通時的構造を明らかにするだけでは不

²⁵ こういった静態的分析の方向性が最も顕著に現れているのはブラットマン(Bratman 2007)である。(ちなみに彼の論文集のタイトルは *Structures of Agency* であり、行為者性の構造が彼の中心的関心事だということが窺えるタイトルになっている)。そこでは、どのような態度を備え付けることによって、人間の行為者性を構成することができるか、という問題が中心的である。ブラットマンの行為論に関するこういった傾向性に関しては河島一郎氏の口頭での指摘に負っている。

十分で、一定の時間的な拡がりの中で変化していく行為者のありよう（通時的な展開）にも目を向けるべきだ、と考えるからだ²⁶。というのもケアが持続的になった場合はなおさら、その時間的な推移の中でそのケアのありようは凝り固まることなく、その細部を変容させていくと考えられるからである。

そして、この時間的な推移の中での生成展開という点を踏まえるならば、「気にかかる」という様態を軽視することはできないと思われる。それは主として二つの理由からである。第一に、ケアは、ある対象や、その対象に関連する様々な事柄が気にかかるというところから多くの場合²⁷、始動するからである。つまり、当然ではあるが、ケア関係は、その対象を大切に思うという段階からいきなり始まるのではない。むしろ、それはある対象が「気にかかる」というところから動き出し、場合によっては次第にこちらからその対象を「気にかける」ようになってところまで進み、稀にはあるが、その対象を「大切に思う」までに至る、こういった仕方で進行するだろう。例えば、故郷の被災地の様子が気にかかり、（場合によっては）実際に被災地へとボランティアするために足を運び、そこで暮らす人たちのことを気にかけるようになり、（ごく稀にはあるが）親しくなった被災者を大切に思って、様子見のためにたびたび訪問するまでになる。また仕事の場合であっても、ある職に就いている人が生き生きと働いているところを見て、その職業が気にかかる（興味を引く）ようになった、という仕方で、やはり、「気にかかる」というところから仕事へのケアが始まるように思える。このようにケアを始動させるものとして、「気にかかる」という水準が不可欠である点を踏まえれば、通時的展開という点から行為者性を考察するにあたっては、「気にかかる」という受動的様態を棚上げにすることはできないのである。

もちろん、このことはある対象Xが気にかかれば、必ずXを進んで気かけ、さらには大切に思えるようになる、という単純なストーリーを支持しているのではない。その点は先にケーキの事例で「気にかかる」がその場限りのものでありうることを見たので、明らかであろう。あるときに気にかかった対象は、その後、気かけられることなく、また大切に思われることなく、忘れ去られるかもしれない。またある対象は頻繁に気にかかるものであっても、なお大切に思えるようにはならない。例えば長時間の単純作業を安い賃金で強いられるような過酷な労働状況

²⁶ 私は以前の論文（早川 2008）ではこの生成展開という論点の重要性にはそれほど気づいていなかった。この論点の重要性に注意を促していただいた松永澄夫氏に感謝する。

²⁷ 「常に」かどうかは分からない。例えば、「入社まもない社員のことを気にかける」という場合、職務上、こちらから進んでその社員を（はじめから）気にかけるのであり、「気にかかる」という様態に先立って「気にかける」という様態が成立していると言えるかもしれない。こういった点に注意を促していただいた一ノ瀬正樹氏に感謝する。

にいる場合、生活費の心配をするという仕方で、その仕事のことが気にかかっているかもしれないが、仕事上の任務を進んで気かけたり、それに献身的に関わったりはしていない（大切に思ったりはしていない）かもしれない。それゆえ、気にかかった対象のほんの一部が、大切に思う対象にもなっていくのであって、気にかかる全ての対象が、大切に思う対象になっていくわけではない。しかし、それでも「（～が）気にかかる」という様態が単にそれ自身では完結しえないものだという¹ことを見落としてはならない。つまり、「気にかかる」という様態を、「大切に思う」というあり方へと進展する可能性を秘めた様態として考えることができるのである。多くの「気にかかる」が、その場で終わってしまうような性格をもつとしてもなお、「大切に思う」の萌芽的形態としての「気にかかる」というものがありうる、という点は、行為者性の通時的展開を究明するにあたって、決して看過することができない事実である。

なお、補足的な論点ではあるが、ここで「気にかかる」という様態を単独で切り出していないという点に注意を促しておきたい。先に見たように、もしケアの他の様態との繋がりを切断して、「気にかかる」それのみを取りあげてしまえば、そこではその瞬間その瞬間の状態が問題になり、行為者の持続的なあり方も消滅してしまうだろう。確かに、その場その場の行き当たりばったりのあり方も、人間の行為者の一つの側面ではあるが、それに尽きているわけではない。そこで、「大切に思う」というあり方までも視野に収めた、ケアの一連の過程の中で「気にかかる」という様態を考察することで、「行為者性が時間的な拡がりをもつ」というアイデアを手放すことなく、ケアにおける行為者のありように注目できるのである。

2. 3. 2 「気にかかる」の重要性（2）

一定の時間的推移における行為者のあり方の展開（通時的な展開）という点から考えた場合、「気にかかる」という受動的様態がなぜ無視できない重要性をもつか、その第二の理由を明らかにしよう。まず押さえておきたいのは、ケアが「大切に思う」という水準にまで達し、さらに展開していく中でも、なお「気にかかる」という様態は決して消え失せることなく、その都度、いつでも姿を現すという点である。それゆえ、ケアが「気にかかる」から「気にかける」へ、さらに「気にかける」から「大切に思う」へと進行するとしても——もちろんこの進行は単線的なものではありえないし、そのように進行しない場合の方が多いが——、その進行は、より先行した様態が後続する様態に完全にとって代わるという形での進行ではない。むしろ先行する様態は後続する様態の中に不斷に入り込み保持されている。例えば太郎が花子を進んで気にかける段階や、さらに大切に思う段階に至ったときもなお、花子のこと（もしくは、花子に関連する様々な事柄）が気にかかっているだろう。花子の浮かない表情や花子の疲れた様子が、太郎の注意を引きつけ、とら

えているのである。また太郎が、自分の任務にやりがいを感じ、仕事を大切に思える段階に到達していても、その仕事に関連する様々なこと、例えば部下から嫌われていないかなどが気にかかるのである。

こうしてケアにおいては「気にかかる」という受動的様態が、ケアがどれだけ進行しているかとは無関係に、常に保持されている。そして肝心な点は、大切に思うという段階にあってもなお、気にかかるという様態が、ケアに新たな動き、しかも、ケア対象（またそれを取り巻く人たち）との関わり方を新たに考え直すことを主体に対して促すような、重大な動きをもたらす点である。例えば太郎の注意をとらえた、部下からの辛辣な批判は、太郎の事業の意外な盲点をついているかもしれないし、太郎のやり方に対する部下たちの不安や葛藤を反映しているのかもしれない。いずれせよ、気にかかる事柄（辛辣な批判）は、自信をもって仕事に取り組んできた太郎にとって、慣れ親しんだものであるよりは、すぐには呑み込めない異物のようなものであるだろう。それは、「この事業は多くの社員にとってもやりがいがあるはずだ」という事業に関する太郎の確信に綻びを生じさせうる。しかし、こういった仕方で気にかかるという様態が、現時点では必ずしも全容が定かではないような異質なものに、主体を出会わせているという点が重要である。たしかに、気にかかる事柄は、まさに現時点ではその全容が把握されていないものでありうるから、主体は動揺したり当惑したりすることもあるのだが、しかし同時に、自らの仕事への関わり方（また仕事を取り巻く人たちへの関わり方）を再考することへと、太郎を促しもするのである。例えば「これまで他の社員たちの考えに十分に耳を傾けてきたか」といったように、である。こうして「気にかかる」という様態は、ケアを新たな局面へともたらす重大な契機となりうるものなのである。（ここで「再考することへと促す」という表現を用いているが、その理由は、こういった状況においては、「太郎は考える」というより、「太郎は考えるように促される」「太郎は考えさせられる」と表現した方が適切であろうからである。辛辣なコメントを述べる部下という、自分のやり方に首をかしげる者との出会いによって、太郎の確信は揺らぎ、太郎は考えさせられることになる。ここでの「再考」は、自己内発的なものであるよりも、自己ならざるものに促されてである、という点を踏まえ、「再考を促される」と表現したい²⁸）。

²⁸ さて、こういった「考えさせられる」ということを、実践的推論や熟慮といった言葉で表現することはできるのだろうか。行為論において、行為に関わる思考は「実践的推論」や「熟慮」といった用語で表現されてきた。私は、ここでの再考を、そういった言葉で表現することは間違いとまでは言えないにせよ、少なくともミスリーディングではないか、と思っている。というのも、実践的推論や熟慮といった用語は、主体が何らかの目的に向けて自ら進んで考える場合に、用いられてきたからである。つまり、「考えさせられる」という状況で使われてきた用語ではないように思える。それゆえ、そういった歴史的な負荷がかかる概念をここで適用する

次の花子の事例においても、同様に考えることができるだろう。太郎は、仕事が繁忙期に突入したため、休日も返上で働く状況が続いたとしよう。そして太郎は子育てに参加できなくなったため、これまで以上に、妻の花子に幼い子たちの世話の負担がかかったとする。その場合、太郎は忙しくて心の余裕がないため、花子の様子に進んで注意を向ける（気にかける）ことはできなくなっている。むしろ花子の困憊した様子は、自分に助けを訴えるように太郎には感じられ、仕事に専念することを妨げるから、花子の様子から目を背けたい気持ち、すなわち花子のことを気にかけずに仕事に集中したいという気持ちが太郎に生じることになるかもしれない。しかし、それでも花子の発する「疲れた」という言葉やくたびれた表情が、否応なく太郎の注意をとらえ、花子の苦境へと彼の関心を引きよせる（気にかかる）。ここでは、「仕事が忙しいときは、花子が家事を全てしてくれるだろう」という太郎のこれまでの理解は揺さぶられ、仕事に集中するという彼の固い決心にも綻びが生じるだろう。休日もろくに休めず、気分転換もできない花子の複雑な思いが、彼女の訴えや表情から感じとられ、自分の考えが浅はかだったということを太郎は思い知らされるかもしれない。こうして「気にかかる」という受動的様態は、花子への関わり方を考え直すことへと太郎を向かわせもするのである。

ここにおいては「気にかかる」は、ケアを始動させるのとは別の仕方で、ケアの進展を促す動的な契機になっていることが明らかになる。つまり、「気にかかる」という受動的様態は、主体の理解をはみでる事柄に主体を繋ぎ止める働きをする。その働きによって、主体をしばしば動揺させるような未知の局面に出会わせ、対象との関わり方を再考するよう主体に促す。「気にかかる」という様態が常にそういった働きをするわけではないが、そういった働きをしばしばしうる、という点が重要なのである。むしろ、ここでの主体の動揺が、ケアをより望ましい方向へと進展させるといった保証はない。こういった一筋縄でいかないありようを強調しておくことは、ケア事象の単純化に抗うために是非とも必要なことである。むしろ、気にかかるという様態を通じて、主体は思いがけない事柄に直面して動揺したとき、その動揺状態からいち早く脱出しようと対象への態度を硬化させるべく再考することもあるのだ。しかし、ケアが改善されるにせよ改悪されるにせよ、気にかかるという様態が、主体の動揺や、動揺からの再考を誘起することで、（大切に思うというあり方を含めた）ケアに変化と起伏をもたらし、ケアを異なる局面へと進展させるような動的契機にもなりうるという点が、肝要である。

このように「気にかかる」を通してケアを動的に捉え直すことによって、そこに現れている行為者性もまた動的に捉え直すことができるようになる。フランクファートは、「ある対象を大切に思う〔ケアする〕人は、その対象に関連している事

のは控えたい。

柄に自らを関わらせる」(Frankfurt 1988c, 83) という仕方で大雑把に捉えるのみで、対象に関連する活動を営む行為者の変化に富んだありようには注目していなかった。しかし、以上のように、「気にかかる」という受動的様態が主体にとって未知の要素に出会わせ、主体—対象の関係に変動をもたらすならば、その変動は、対象に関連する活動をどう行っていくかという行為に関する変化に波及していくだろう。仕事の事例であれば、太郎は、それまで押し通していたワンマンな仕事のやり方を部分的に修正する形で行うようになるかもしれない。より具体的には、部下の考えが事業にも反映されるように、日頃から頻繁に部下に声をかけて意見を聞いておく。また社内をより打ち解けた雰囲気にするように部下を頻繁に昼食に誘うようにする。こういった仕方で仕事に関連する様々な活動や行為にも変化が波及していく。

むろん、先に触れたように、部下からの辛辣な批判は、太郎を動揺させるものだから、仕事に関する様々なことに対して、太郎の態度を硬化させる効果もまたもちうる。そして硬化した態度は対象に関連する行為もまた頑ななものにする。例えば、太郎はこの部下の発言にひどく憤慨し、その部下を昼食にしばらくの間誘わないという行為や、重要な仕事を彼に与えるのを控えるという行為をとるかもしれない。こういった頑なな行為傾向は花子の事例でも同様に想定可能だろう。例えば「疲れた」とばかり口にする花子に苛立つようになり、花子に対して、いっそう非協力的な行為をとるかもしれない。しかし、このような場合でさえ、「気にかかる」という受動的様態を通じてもたらされた、主体—対象の関係性の変動が、対象に関連する活動をどう行っていくか、という行為に関する変化と結びついているという点は変わらない。なぜなら、態度の硬化もまた、その対象に対する行為が頑なになるという、行為のある種の変化に結びついていることには相違ないからである。そこでもまた「対象に関連する活動」というものが、気にかかるという様態を通じて、以前とは異なる仕方で了解されるようになるのであり——例えば、この部下はプロジェクトの中心メンバーから外されるべきだ、また、花子は文句を言わず家事に献身的になるべきだ、といったように——、また以前とは異なる仕方で主体の行為者性が行使されているのである。

むろん、以上の議論を認めたからといって、フランクファートの「ある対象を大切に思う人は、その対象に関連している事柄に自らを関わらせる」(ibid., 83) という論点や、「対象に関連する事柄に特定の注意を向け、自分の振る舞いをそれに基づき方向づける」(ibid.) という論点が、否定されるわけではない。それらの論点は相変わらず正しい。やはり、仕事や花子への関わり方や行為のあり方が変化しても、太郎がケア対象(仕事や花子)に関連していることに自らを関わらせ、振る舞いを方向づけている点は認められるからである。しかし問題は、フランクファートのような大雑把な記述にとどまってしまうと、ケアおよびケアにおける行為者

性の動的性格、すなわち、一定の時間的な推移の中で変容していく行為者のありようが、きちんと反映されないままになってしまう、ということだ。そして、私の考えでは、ケアがはらむ動的な性格こそが、ケアという観点が備えている本来の利点なのであり、その利点を活かさないで、人間の行為者性をケアの観点から考察してしまえば、ケアという概念を行為論に導入すること自体の意味が疑われることになりかねない。私は第四章で、ケアを、計画・方針といった行為論における従来の概念との対比で論じることになるが、そのとき、ケアが計画・方針といったものと深く関連しつつも、ケアがはらむ特有の動的性格において、ケア概念が他の諸概念に還元されないような独自性をもつと論じるつもりである。

上で論じてきたケアの動的性格と関連する点として、「大切に思う」というあり方と「気にかかる」という様態の関係について、次の点を注意しておきたい。すなわち、「X（仕事）を大切に思う」ということの内実が、あらかじめ細部まで確定したものとして成立しており、その先行した確定部分から導き出されるようなものとして、「Xに関連する事柄（部下の辛辣な批判）が気にかかる」という様態があるのだ、とは捉えられないという点である。以上でみたように、「大切に思う」というあり方は、「気にかかる」という様態を通じて、その細部を変化に富んだものにしながら、状況の推移とともに刻々と作られていくものなのであり、すでに出て上がってしまった完成品のようなものではない。つまり、「大切に思う」の具体的内実、生起してしまった完了的なものではなく、さらに変動しつつ生起していく移行的なものなのである。それは大雑把な記述の下で考えると、様々な時点での変化にかかわらず、同じ「仕事を大切に思う」という記述を与えられるから、その内実が確定しているかのような印象を与えるが、実際はそうではない。部下の辛辣な批判の例でも花子の訴えの例でも、「気にかかる」という様態を通じて太郎が動揺するとき、大切に思う対象（仕事や花子）についての理解、もしくは対象に関連する事柄についての理解が、（部分的には）揺らいでいる。部下の辛辣な批判は、「この事業は多くの社員にとってもやりがいがあるはずだ」という、事業に関する太郎の理解を揺さぶる。また花子の訴えは、「仕事が繁忙期のときは家のことは妻の花子に全部任せてよい」という花子に関する太郎の理解を揺るがす。こういった理解の揺れ動きは、それまでの「大切に思う」というあり方から導き出されたような類のものではないだろう。また、そういった理解の変容に結びついた行為の変容に関しても、そのような仕方で導き出されたものではない、と言えるだろう。

以上のような仕方で「気にかかる」という様態が通時的展開の動的な契機になっていることを踏まえれば、ケアというものを、その動的な実態に迫る仕方で分析し、そこに現れる行為者性の通時的展開の真相を明らかにするためには、「気にかかる」という様態に関するさらなる考察を怠ってはならないように思われる。そして、仕事へのケアの事例や花子へのケアの事例で示したように、「大切に思う」集中路線

が注目している「大切に思う」というあり方に関してもまた、その起伏に富んだ細部に迫るには、「気にかかる」という受動的様態の分析が不可欠になってくるのである。

2. 4 能動性と受動性の混成体としての行為者性

前節では、「気にかかる」という様態を鍵にして、ケアおよびケアにおいて現れる行為者性の動的性格を見てきた。こうした前節の考察によって「気にかかる」という受動的様態の重要性に対する疑念は和らいだものと思われる。しかしながら、「気にかかる」という受動的様態を重視する本稿の立場に関しては、未だなお、それを疑問視するような第二の議論も予想されるだろう。すなわち、「行為者性とは、能動性に関する事柄であり、受動性に関する事柄ではないから、気にかかるという様態において問題になるような受動的側面の考察は行為者性の考察にとってそれほど重要性をもたないのではないか」。実際、こういった受動性軽視の考え方こそ、現代行為論において行為者性の問題が論じられる際に、自明視されている暗黙の前提であるように思える。この考えによれば、主体の身に起こったことや主体が被ったことといった受動的な要素は、人間の行為者性に関する考察にとって非本質的で取るに足らないものか、せいぜい二次的なものだとされる。多くの論者は、「受動性は行為者性の問題にとって二次的なものだ」と表立って主張しているわけではないが、しかし、そのように表立って主張しないのは、彼らが「受動性の問題が二次的なものだ」という見解を拒否しているからではなく、その見解を敢えて主張することにポイントがないほど、正しいものとして当然視しているからだと思われる。「受動性の問題が二次的なものだ」という見解に対する反対意見がない場合は、その見解を表立って主張する必要性はないだろう。そして、そのように表立って主張されなくても、これまでの行為論において、行為者性の受動的側面がほとんど主題的には論じられてこなかったということが、受動的側面が瑣末な要素と見なされてきたということを示しているように思えるのである²⁹。

むろん、行為論の多くの論者は、行為が受動的な側面をもつということ、すなわち世界からの影響を受けるということを認めるだろう。また、実際そういった受動的側面を示唆したり、指摘したりすることがある。例えばブラットマンは、計画や方針によって振舞いを統制・管理する、行為者の能動的側面を強調するが、それでも行為者のあり方がその都度、状況から影響を受けると認めているのである

²⁹ 例えば行為論のアンソロジー（Mele 1996; Gaynesford 2011; Hyman and Steward 2004）などを参照。

(Bratman 1987, 30)。また、欲求・信念モデルの支持者ならば、次のように言うだろう。「信念は、世界からの因果的影響を受けて形成される。また欲求も部分的には信念に基づいて形成されるから、世界の影響を受けている」と。しかし、問題は、受動的側面へそういった仕方と言及していても、その実態に関する踏み込んだ考察が欠落しているという点なのである³⁰。

こうした欠落傾向が、行為論が一九五〇年代後半に一つの分野として確立されて以来、今日に至るまで続いているという事実は、受動性の問題を多くの論者がどう見なしてきたかについて重要なことを告げている。すなわち、その欠落傾向は、「受動性(被る)の重要性を認めるが、論じる順番としてはまずは能動性から論じ、それから受動性について論じる」といった、受動性を論じる順番の劣位性ゆえではない。もし、行為論の論者の多くが、「受動的側面の重要性を認めた上で、順番としては後で受動的側面を論じる」というスタンスをとっているだけであったなら、現代行為論が確立されてから半世紀以上が経っているのだから、受動的側面についての主題的考察がもっと頻繁になされてもよかったはずである。しかし現状は異なっているのである。そして、それゆえに、受動性の問題は、その重要性を認識されながら後回しにされた(だけ)と解釈するよりも、そもそもその重要性がきちんと認識されてこなかったと解釈する方が妥当なのではないだろうか。そして、「受動的側面はそれほど重要性をもたない」という、広く受け入れられている暗黙の前提こそ、本稿が拒否するものにほかならない。

この根強い前提は、現代行為論において頻繁に登場するお馴染みの図式と強固に結びついている。それは「その人が為すこと」と「その人が被ること(その人の身に起こった出来事、その人の身に降りかかった出来事)」の二項図式、または「為す者(actor)」と「被る者(victim)」の二項図式である(e.g., Davidson 1980b, 43-44; Moya 1991, 9-17; Moran 2000, 100-148; Velleman 2000, 123-143)。もちろん

³⁰ 欲求・信念モデルによる行為の説明は、その行為が関連するような、特定の欲求と信念の組がそろった時点から行為の説明を始める。その欲求や信念が、世界内の対象によってどのように影響を受けて(被って)形成されたか、という話は、行為説明が無限後退に陥るという危険性と関連づけられて、切り捨てられる傾向にある。その傾向は、欲求・信念モデルが説明したいのは、行為というよりも行為の意図性であるということに関係している。このモデルをとる論者は、意図性を構成する上で決定的に重要になるのは、主体の「心的状態」であるという考えから、その心的状態である欲求・信念に専ら着目し、さらに遡って説明しようとはしない(e.g., Davidson 1980a)。だから、その心的状態が、世界からどのような影響を受けて形成されたかという受動的契機は、十分に光が当てられていないのである。確かに行為の意図性を説明するという文脈で考えれば、このような心的状態を重視する方向性は説得力をもつし、必ずしも誤っていないだろう。しかし、行為の説明というものを普段の日常的な文脈で考えるならば、そこには多様な説明の仕方があるのであり、世界からどのような影響を受けたかという要素は、行為の日常的説明の不可欠な部分でさえあるように思える。

この二項図式は当然なされるべき区別を示したものであって、それ自体誤っているわけではない。たしかに「為すこと」（例えば足を踏むこと）は、「被ること」（足を踏まれること）とは同一視できないし、為す者（足を踏んだ者）であるということは、被る者（足を踏まれた者）であるということと同一視できない。それは当たり前である。だから、この二項図式それ自体はしかるべき区別をしているのであって批判されるべきものではない。その二項図式を即座に退けることもまた、浅薄というものだろう。しかし、「為すこと」と「被ること」を隔てる区切りが揺るぎないものとして固定化され、その二項が相反するものとして対立的に捉えられるに至ると、大きな問題が生ずる。というのも、そのように為すことが被ることとは対極的に位置づけられた場合、為すことは被ることから分断され純化されるため、為すことの内に被ることが入り込んでいるという発想や、為す者が同時に被る者としての側面をはらむという発想はとりにくくなるだろうからである。その一つの自然な帰結は、人間の行為者性の考察において、受動性は過小評価され、能動性の純度が高い自己統御性、自律性が注目されることにもなるというものであろう。実際にこれこそが、現代行為論が辿った道の一つであり（e.g., Bratman 2007; Korsgaard 1996; Taylor 2005; Wallace 2006）、その傾向性は現代行為論の代表的論者であるブラットマンにおいて顕著である。我々は第四章で実際その点をより詳しく見ていくことになる。

しかし、本稿は、「気にかかる」という水準でのケアに注目し、それを動的性格（ケアと行為者のありようが変容しつつ展開していくさま）と関連づけることで、受動性というものをより豊かなものとして捉え直す。それは受動性軽視の行為論の大きな流れに対して異議申し立てを行うものでもある。我々は、人間の行為者性というものを、能動性という単一の次元に強く引きつけて捉えるよりは、能動性と受動性が深く絡み合う、より入り組んだものとして捉える必要がある。

M・ウォーカーはこういった本稿の方向性に対して重要な示唆を与えてくれる。彼女は、人間の行為者性を、受動性という不純物が入り混じった行為者性（*impure agency*）として捉える（Walker 2003, 21-34）。彼女がこの議論を展開したのは道徳的責任を負う行為者のあり方を論じる文脈においてであったが、受動性が入り混じった行為者性という発想は本稿の考察を深めていく際に鍵となるものである。ウォーカーは、自己の統制下でない帰結や、選択していない事柄に関しても、状況に応じた適切な仕方で道徳的責任を引き受けることを、「受動性が入り混じった行為者の徳（*virtue of impure agency*）」として捉え、道徳的に賞賛されるべきだと考える（*ibid.*, 25-28）。こうした立場をとることによって、ウォーカーは、「行為者の道徳的責任が及ぶ範囲は、自己の統制下にある帰結や、選択した状況に限定される」という道徳的責任に関する議論に対して、異議申し立てをしているのである（*ibid.*, 21-34）。こういった道徳的責任に関わるウォーカーの指摘が最終的に擁護

可能かどうかは慎重な検討が必要だろう。しかし私は、統制下にはない要素の混入という論点は、行為者性全般に関わる広い射程をもつものだと考える。そして、「気にかかる」という受動的様態について踏み込んだ分析をし、ケアが生成し展開する一連の文脈において行為者性を考察することで、彼女の道徳的責任に関する議論で前提になっている「受動性の混入した行為者性」というものの真相に迫ることができると考える。

ここで強調すべきは、人間の行為者性を、能動性と受動性が深く絡み合うものとして捉える必要性は、行為者性を時間的な広がりを持ち、通時的に展開するものとして考えたときには、いっそう差し迫ったものとなる、ということだ。というのも、行為者性を時間的な推移の中で展開するものとして捉えたとき、ある時点での受動は、次の時点では能動へと結びついていく可能性を秘めているからである。例えばそれは先の太郎のケースからも明らかだろう。自分の企画書に関する部下の辛辣なコメントが、太郎の耳に入ったということは、太郎の身に起こった出来事であり、太郎が為したことではない。それゆえ、従来の二分法的カテゴリーに基づけば、被ったことに分類される。しかし、それでも、その被ったことは辛辣な批判が太郎の注意を引きつけ、とらえるといった「気にかかる」の受動的様態を通して、次の段階では何らかの行為へと繋がっていく可能性をもつ。確かに「気にかかる」ということが直ちに行為に結びつくと考えるのは早計であろう。しかしながら、それは、一定の時間を経て行為へつながっていく傾向性をもつのである。例えば部下の辛辣な批判を聞いた時点では、その部下に直接、話を聞いてみる、という考えは思い浮かばなかった。しかし、その批判を無視したい気持ちがあるにもかかわらず、それがどうしても気にかかってしまい、その部下と直接会って話をする、といったことが想定できるだろう。また花子の事例でも、「疲れた」という花子の訴えは、先の二分法に従えば、太郎が被ったこと、太郎の身に起こった出来事として分類される。しかし、その訴えは、太郎の注意を引き留めることによって、日曜日くらいは子供たちの面倒を見るといった行為に結びつく可能性をもつのである。

ここで2. 1での特徴づけを踏まえるなら、「(～が) 気にかかる」が受動的様態であるのに対し、自発的な行為をそれ自体に伴わせるような「(～を) 気にかける」は能動的様態であった。それゆえ、「気にかかる」という受動的様態を端緒とする（自発的行為を伴う）能動性への展開を、あることが気にかかる（受動的様態）を通じて、そのことに関連する事柄を進んで気にかけるようになる（能動的様態）という形でも捉えることができるだろう。部下の辛辣なコメントが気にかかった（受動的様態）ので、彼と話を直接して（自発的行為）、部下の意見も進んで気にかけるようになる（能動的様態）。花子の疲れた様子が気にかかった（受動的様態）ので、週末は少しだけでも子供たちと外出し花子を休ませる（自発的行為）などして、花子の状態を気にかけるようになる（能動的様態）。かくして、「気にかかる」とい

う受動的様態が自発的行為（能動）へと展開するという論点は、「気にかかる」という受動的様態が「気にかける」という能動的様態にどう展開していくかという形で捉えられ、両者の様態の関係について部分的な解明を与える論点としても注目できるだろう。

いずれにせよ、このように、一定の時間的な推移の中で、その主体の身に起きたこと、被ったこともまた、それは単なる出来事（mere happening）にとどまることなく、気にかかるという受動的様態を通じて、しばしば行為へと結びついていくのである。だとすれば、為すことには被ることが混入しているし、為す者としてのあり方にも被る者としてのあり方が混入していることにもなるだろう。人間の行為者性は、働きかけられつつ働きかける、ということを常態とするものであって、働きかけられるという文脈を無視して、働きかけるという部分のみを純粹に切り出してくることはできないと思われる。それゆえ考察の出発点として、為すこと（為す者）と被ること（被る者）をさしあたり区別するのはよいとしても、被ること（被る者）と分断された意味での為すこと（為す者）に関してのみ重点を置いてしまえば、知らず知らずのうちに能動性を過大に見積もった形で人間の行為者性を提示することになりかねない³¹。

繰り返し強調してきたように、本稿においては受動性の混入という事態は手短な論じ方で済ませるべき瑣末な論点ではなく、もっと掘り下げ究明されるべき中心的論点としてある。そしてそれは、前節で見たように、現実 に即した、動的なケア観と行為者観を描き出す上で、気にかかるという受動的様態が決定的に重要になるからである。この動的性格をさらにどう掘り下げていくか、ということが本論考の主要な課題であり、従来の行為論に対するどれだけ重大な貢献ができるかどうか、この点にかかっていると言える。だから「受動性の混入」といった単なるスローガンのレベルにとどめるのではなく、「気にかかる」という受動的様態を、現実 に即した動的な行為者観の提示という文脈にしっかり根付かせて考察することが肝要なのである。

ここで、このような動的アプローチが、ケアにおける主体—対象関係の考察、また主体とその対象を取り巻く人たちとの関係の考察といった、関係的次元の考察に由来していることを強調しておきたい。まず留意すべきは、主体が対象（および

³¹ むろん「被る」という受動性全般が、「気にかかる」という受動的様態を考察することによって明らかになるわけではない。つまり、気にかかるという受動的様態を論じたとしても、受動的契機全般を論じたことにはならない。その意味で、行為に関わる受動的契機全般を網羅的に本稿で扱うことはできない。しかし現時点でも少なくとも言えるのは、「気にかかる」という受動的契機は、前節や本節で見たような仕方で行為へと結びついていくものである以上、行為者性を考察する上で無視できない重要性をもつのではないか、という点である。

対象を取り巻く人たち)に働きかけるという能動の側面と、対象(および対象を取り巻く人たち)によって主体が働きかけられるという受動の側面との両面を併せもって、初めて主体と対象の「関係」ということが実質をもつという点だ。行為者性と能動性との結びつきのみに着目して、主体から対象(対象を取り巻く人たち)への一方的な働きかけのみに重点を置いた場合、それは主体の関与を念頭に置いた行為者性の考察になりえても、主体-対象の関係性を念頭に置いた行為者性の考察にはなりえない。例えば、太郎の行為者性を関係的次元において考察するということは、太郎の側が花子にどう関わろうとしているかのみならず、逆に花子の側は太郎にどう関わろうとしているのか、そして、花子への太郎の関わり方は、そういった花子の態度や行為によってどう影響を被るのか、という仕方で能動・受動の双方向性を考慮しつつ、太郎の行為者性を考察することだろう。また仕事の事例に関して、関係的次元において考察するということは次のようになるだろう。すなわち、太郎と仕事、また仕事を取り巻く人たちとの関係性を念頭に置き、単に太郎がその仕事にどう関与したいか、仕事を取り巻く人たち(上司・同僚・部下)にどう仕事をするように仕向けたり要望を出したりするか、といった太郎の働きかけの面のみならず、逆に、その仕事に関わる人たちが太郎や太郎が目論んでいる事業に何を期待し、どのような要望をもつか、またそういった周りの者の期待や要望によって、太郎がどう影響を受けるのか、という受動の側面をも踏まえた上で、太郎の行為者性について論じることである。太郎の一方的な働きかけのみを重視してしまえば、関係性を重く受け止めた上での考察とは言えないだろう。こうして、関係的次元の重視は、対象へ影響を与える面のみならず、対象から影響を被る面についての考察をも要求する。それは、ケアされる側である対象が、ケアの実践(ケア対象に関連する活動)にどう貢献していくのかという点についての考察を不可避のものとする、ということでもある(Noddings 1984, 59-74)³²。そしてここで重要な点は、本稿では、単に能動的側面の考察のみならず、「気にかかる」という受動的様態を鍵とすることで、後者の被る面についての考察もまた充実させることができるという点であり、またそれゆえに、動的アプローチを、関係的なアプローチとして展開することもできるという点である。つまり、先の動的性格も、主体-対象関係という観点から捉えられるのである。

³² ケアの倫理の代表的論者であるノディングズは他者へのケアを論じている文脈で、ケアがうまくいくときにはケアされる側の貢献があると述べている(Noddings 1984, 59-74)。私は、この論点はケアの対象が(第一義的に)物事である場合にもまた多かれ少なかれ当てはまるのではないかと考える。我々はある物事(例えば仕事)のケアを通して、様々な人たちと出会うのであり、その人たちをケアしたり(気にかけて)、またその人たちにケアされたりする(気かけられたりする)関係の中で、その物事(仕事)への関わり(ケア)が進展するのである。

なお、ここで記述上の注意点に関して述べるならば、ケアにおける関係的次元を、主体—対象関係と記述するのは、誤解を招きやすいかもしれない。そのように記述すると、主体と対象の二項関係のように思われてしまうからである。しかしこの関係的次元を、二項関係として単純に捉えることは決してできない。このことは1、2で触れた点に関係する。すなわち、ある対象Xへのケアという仕方で単一対象へのケアとして記述されたとしても、XへのケアはX以外の他の様々な対象へのケアと結びついているのだった。仕事の場合であれば、仕事へのケア（関心）は、仕事を通して出会う人たちへのケア（配慮）をはらみつつ展開する。だから太郎と仕事との関係とは、太郎と、仕事を取り巻く人たちとの関係でもあり、それを二項関係として捉えるのは誤っているのである。以下では主体—対象関係を、主体がその対象をケアすることを通じて出会う人たちとの関係を含むような豊かなものとして捉え、その上で、便宜上「主体—対象の関係性」と記述することがある。

こういった注意点を踏まえた上で、行為者性の動的性格が、実のところ、ケアの関係的次元を拠り所としている点を指摘しておきたい。すなわち、ケアや（ケアにおいて現れる）行為者の変化に富むあり方というものの自体が、能動と受動の交錯を前提にする主体—対象の関係性なしにはそもそも成立しえない。仕事への取り組み方や、花子への関わり方に変化がもたらされたのは、太郎が「気にかかる」という回路を通じて、部下の辛辣なコメントや、花子の訴えの影響を被ったからであり、この影響を被らなければ、太郎の行為における変化は現にある仕方ではもたらされなかったはずである。つまり太郎は、それまでと何ら変わらぬ仕方で、仕事に突き進み、また家庭では花子に負担をかけ続ける。したがって、行為者性の考察において、主体—対象の関係性をきちんと考慮せず、主体の能動性のみを重視した場合は、その分析から、主体—対象間（また、主体と対象を取り巻く人たちとの間）のやりとりにおいて現れるような動的な性格は抜け落ちてしまうと考えられる。主体—対象関係を重く受け止めたときにはじめて、主体の動的な性格をきちんと考察できるようになる。したがって我々は、ケアとそこに現れてくる行為者性の動的性格についての考察を、あくまでもケアの関係的次元——主体と対象の関係性、また主体と対象を取り巻く人たちとの関係性——を念頭に置く形で、掘り下げていく必要がある。そこで、第三章では、ケアにおける意欲の次元（欲求に関わる動機づけの次元）を重視するフランクファートの議論を、ケアにおける関係性の次元を重視する本稿の立場から批判的に検討していくことにしよう。

第3章 フランクファートのケア論の批判的検討

行為者性に関するケア・アプローチの歴史は浅く、現代行為論において未だ萌芽的なものにとどまっているが、それでもフランクファートがケア・アプローチを確立して以来、何人かのケア論者たち（ケア・アプローチを採用する論者たち）によって、彼の議論は批判的に検討・継承されていくことになる（Jaworska 2007; Shoemaker 2003; Seidman 2009; 2010; Tappolet 2006）。とりわけケア論者たちにとって、自らのケア論の強みを明確にする上でフランクファートの議論の検討は避けられないものになっていると言える。そこで、それらのケア論者たちに倣い、本章では、本稿のケアの関係的一動的アプローチが、フランクファートのケア論に対してどういう立場をとるのかを明確にする。それと同時に、ケアにおける関係的次元を重視する本稿のアプローチによって、フランクファートのケア・アプローチの不備がどう補完されるのかも明らかにしたい。

なお、フランクファートの議論は、第二章（2. 2）でも簡単に触れたが、その際は、フランクファートの見解の中でも、「大切に思う」集中路線の論者たちに共有されている見解を概観するにとどまり、フランクファート自身が独自に展開した洞察にまでは踏み込まなかった。そこで本章では、そういった洞察も含めて、本格的にフランクファートの中心的なアイデアを見ていくことになる。具体的には、フランクファートの分析が、ケアにおける複雑な動機づけに注目している点で極めて重要なものでありつつも、葛藤から自由になった動機づけのレベルでの統合性——意欲の統合性——を重視し、それを分析するためにケアという概念が参照されるため、ケアという観点の利点が未だ十分に活かされていないことを見る。そういった意欲の統合性の強調がもたらすのは、葛藤を抱えるということに対する、否定的な意味づけである。まさにこれこそがフランクファートのケア論を批判するとき重要なポイントになる。

具体的には以下のように議論を進めることになる。まず、フランクファートが、ケアの核となる要素を、意欲というものに見てとっている点を確認する。その上で、意欲というものが、ケアに関連する欲求の効力を持続させるような二階の態度として捉えられていることを明らかにする（3. 1）。次に、意欲の必然性という考えを導入することで、二階の態度同士の衝突から自由になった意欲の統合的なあり方が重視されていく点を見る。そして、その背景には、そういった統合性の内に、その人を当の人物たらしめるような「その人らしさ」が見いだされる、というフランクファートの基本的な考えがあることを指摘する（3. 2）。こうしてフランクファートの洞察を踏まえた上で批判的検討に入る。とりわけ、フランクファートが

意欲の統合性を重視するあまり、葛藤を否定的に扱っている点を批判的に取りあげ、「気にかかる」という様態に注目することによって、ケアの関係的次元を尊重する仕方、葛藤というものを捉え直すことになる（3. 3）。最後に、「その人らしさ」というものが意欲の統合性において見いだされる、というフランクファートの考えを批判する。我々は、「その人らしさ」というものもまた、ケア対象やケアを通して出会う人たちとの関係性の（変化の）内で捉え直す。そして葛藤から自由になった統合的なあり方ではなく、まさに葛藤し動揺している只中においてこそ、その人らしさが表現されるという可能性を追究する（3. 4）。

3. 1 フランクファートのケア論の骨子（1）——階層的モデル

さて2. 2では、「大切に思う」集中路線を扱ったときに、フランクファートの立場を簡単に概説した。つまりフランクファートはケアでも、とりわけ「大切に思う」という水準のケアに着目し、その水準におけるケアが、複数の時点にまたがる一定の期間にわたって、その人の振る舞いを方向づけるという点を明らかにしたのであった。そして、フランクファートの「大切に思う」集中路線を受け継ぐ論者たちも、この通時的な方向づけという点を重視したのである。

こうした共通点がありながらも、フランクファートにおいて特徴的なことは、この通時的な方向づけに関する考察を、ケアにおける意欲の次元に着目することによって深めていくという点なのである。ここでの意欲の次元とは、動機づけ（欲求）のありよう、とりわけ行為を導くような欲求に関わる次元であり、より具体的には、自分自身を特定の行為へと向かわせるような動機づけの次元である（Frankfurt 1988c, 84-86）。そして、こういった意欲の次元の重視こそフランクファートのケアの議論を読み解く際に鍵となるものである。それゆえ、フランクファートの議論を批判的に検討するためにも、意欲と呼ばれているものがいかに捉えられているのかをきちんと押さえておく必要がある。とりわけ確認したい点は、フランクファートが、この意欲の次元を（i）（ケア対象に関する）欲求への関与的態度、（ii）意欲の必然性（volitional necessity）の二つの方向から捉えることによって、自律的な行為者像を提示しているという点である。この節では欲求の関与的態度についての議論を扱い、次節では、意欲の必然性に関する議論を扱う。

まず、ケア（大切に思う）の中心的要素を意欲に見いだすフランクファート独特のケア観を確認しよう。フランクファートによれば、

大切に思うということは本質的に意欲に関するもの、すなわち意志に関す

るものなのである。(Frankfurt 1999c, 110) ³³

また彼は、「大切に思う」という水準のケアに関して、その核となるものを次のようにも述べている。

その核となるのは、情動的なものでも認知的なものでもなく、意欲に関するものである。何らかの対象を大切に思うということや、愛するということは、その対象によってどういう感情をもつのか、ということや、その対象についてどういう見解をもつのか、ということにはそれほど関係していない。むしろ、その人の選好を形作り、振る舞いを方向づけ制約するような、(おおよそ) 安定した動機づけの構造といっそう関係しているのである。(Frankfurt 1999d, 129)

ケア(大切に思う)に特徴的な意欲の次元を理解する上で、ここで言及されている「安定した動機づけの構造」というものが重要になってくる。フランクファートによれば、動機づけの構造が安定しているというのは、単にある一時点のみならず長い期間にわたって、主体が特定の欲求に一貫して動機づけられる、ということを目指している。ここで重要な点は、フランクファートが、振る舞いの持続性よりも、むしろ、それを背後で支えている動機づけの持続性にいっそう注目している、という点である。そして、この動機づけの性格が、特定の欲求に対する関与的態度という論点と関係してくる。すなわちフランクファートはこの持続的な動機づけの構造を、欲求への二階の態度、より具体的には、ケアに関連する欲求に肩入れする二階の関与的態度——欲求は一階の態度であり、ここでの関与的態度はその一階の欲求に対する態度とされるので二階となる——として取り出すのである³⁴。

³³ フランクファートの「意志」という言葉の用法は一貫しているわけではないが、ここで「意志」という言葉は、意欲と置換可能な仕方で用いられている。つまり、自分自身を特定の行為へと向かわせるような再帰的なあり方のことを意味しているのである。

³⁴ そもそもケアを意欲の次元で捉えるという彼の方向性は、突如として彼に生じてきたものというより、「意欲の構造」を最重視して人間の行為者性を解明する、という彼のそれまでの方向性の延長線上に徐々に姿を現してきたものである。それは、現代行為論の記念碑的論文「意志の自由と人格という概念」(Frankfurt 1988a, 11-25)において論じられた二階の意欲(second-order volition)のアイデアを引き継いでいる。二階の意欲とは「ある欲求に従って行為したい」という、自分をもつ欲求に対する欲求であり、フランクファートは、そういった二階の意欲に、人間の行為者——彼は「人格」と呼んだりもする——の核となる特徴を見いだすのである。

ある対象を大切に思っているかどうかという問題が直接に関連するのは、……その対象に対する欲求に彼がどのような〔二階の〕態度を向けているかということなのである。つまり、ある対象を大切に思っているかどうかという問題は、彼がその対象に対する欲求に肩入れしているかどうか……に本質的に関係しているのである。(Frankfurt 1998, 6 [大括弧内の補足は引用者])

かくして、意欲の次元として、ケア対象への関与（一階の関与）ではなく、ケア対象への欲求に対する関与ないし肩入れ（二階の関与）が話題になり、それがケアの核となる要素として特徴づけられていくことになる。我々は第二章（2. 2）で、ケアすることにおいて、主体は「その対象に関連する事柄に特定の注意を向け、振る舞いを方向づける」(Frankfurt 1988c, 83) というフランクファートの見解を見た。そこでフランクファートの念頭にあったのは対象への関与のレベルであったが、ケアの分析を発展させていく段階で、フランクファートは、対象に対する関与（一階の関与）よりも、むしろ対象に対する欲求への関与（二階の関与）という点をより強調し、その二階の関与にケアの核となる特徴を見いだすようになる。フランクファートによれば、「人がある対象を大切に思うとき、彼は進んで、その対象への欲求に肩入れしている」(Frankfurt 2004, 16) のであり、「大切に思う」という水準のケアは、その対象に対する欲求に肩入れするような二階の関与が伴って、はじめてケアたりうる、とされる³⁵。では、ここでいう欲求への二階の関与はどういう働きをするのか。またどうして「大切に思う」というあり方には、こういった二階の関与が要求されるのか。次の箇所が参考になる。

あることを大切に思う人は、[大切に思う対象に関わる] 欲求の持続を確かなものにするため、必要とあらば、介入的に関わる準備がある。もし、その欲求の勢いが衰えたり弱まったりすれば、彼は、その欲求の力を蘇らせたり、また、自分の態度や行動がどのくらい、その欲求によって影響されるのがよいのかに応じて、欲求の影響力を強化したりする。

それゆえ、欲求の対象を同時に大切に思っている人は、その欲求を充足することを欲しているのみならず、その欲求が維持されることもまた欲して

³⁵ またフランクファートは次のようにも述べる——「人は、自分がもつ欲求の中でも、ある欲求に関しては、その欲求が持続することを欲する。しかし別の欲求に関しては、その欲求に無関心か、もしくはその欲求に能動的に抗う。ある欲求に肩入れするのか、それとも肩入れしないのか、その二つの可能性のどちらになるかによって、ケアしていることとケアしていないことの相違は規定されている」(Frankfurt 1998, 21)。

いるのである。(ibid. [大括弧内の補足は引用者])

より具体的にフランクファートの論点を説明しよう。ケアは、ケアに結びついている様々な欲求を含んでいる。例えば太郎は、仕事を大切に思っている以上、仕事を形作っている様々な活動へと動機づけられている点で仕事に対する様々な「欲求」をもっている。そして太郎が、企画書の締め切りが迫っているため、「今週は深夜まで仕事だけに集中したい」という欲求をもっていると想定しよう。しかし、そういった仕事への欲求のみならず、その実現を妨げるような欲求、すなわち「自宅に帰ったら新作のゲームがしたい」「十分に睡眠をとりたい」といった欲求も同時に太郎はもっているかもしれない。そして、仕事の進行を妨げるそれらの欲求に流されそうになるかもしれない。しかしフランクファートによれば、そのような場合は、仕事を大切に思っている以上、それらの欲求に抵抗し、「仕事に深夜まで集中したい」という仕事への欲求に導かれるように試みるのでなければならない。

仕事を妨げるような欲求に対する介入的措置として、次のようなものが考えられるだろう³⁶。「自宅に帰ったらゲームをしたい」という欲求が強い場合は、ゲーム機を目にしたら、ゲームに誘惑されてしまうので、遅くまで職場に残って仕事をする。また「十分に睡眠をとりたい」という欲求が強い場合、夜にコーヒーを飲み、あらかじめ眠くならないようにしておく。こうして対立する欲求を弱めるような行為をすることで、「仕事に深夜まで集中したい」という欲求の効力を相対的に強めることが可能だろう。また仕事に関する欲求の効力を強めることで、対立する欲求を相対的に弱めるという方法もあるだろう。例えば、やる気が出るように、ちょっとした気分転換を図る、といったことがそれにあたるだろう。いずれにせよ、そういった介入的行為をとることによって、対立する欲求が行為を導くのを阻止し、仕事に集中したいという欲求に従うように自らを仕向けるのである。そのとき、その主体は、ケア対象に関連する欲求、すなわち「今週は夜遅くまで仕事に集中したい」という欲求に肩入れするような二階の関与的態度をもっている、と言える。そして、このように自らを仕事へと仕向けるような介入的な構えがあるからこそ、「太郎は仕事を大切に思っている」と考えることができる。

むろん、ときにはケアを妨げる欲求に何ら抵抗することなく身を任せてしまうかもしれない³⁷。しかし、それでも、そのようなことが頻繁にあるのなら、その

³⁶ フランクファートは、ここで話題になっている対立する欲求への介入的措置がどのようなものであるかについて、その具体的説明を省略している。もしかしたら「欲求への関与」という表現は、欲求に対する主体の心的作用であるかのような印象を与えるかもしれない。しかし、ここでの欲求への関与をそのように神秘化する必要はない。むしろ、こういった欲求への関与を、対立する欲求を弱めるような行為の傾向性として捉えることが可能である。

³⁷ おそらく、これは「意志の弱さ」という問題に関わっている。その点を踏まえ

対象を大切に思いケアしているとは認め難いというのが、おそらくフランクファートの論点であろう。実際、仕事を妨げる欲求に抵抗することが全くないならば、仕事を大切に思っていることが疑われてしまうだろう。例えば煩瑣な作業や面倒な作業に直面したときに、作業の手を抜きたい、という欲求が生じるかもしれないが、そういった欲求に、易々と身を任せてばかりいるのなら、その仕事を大切に思っているということが疑われてしまうだろう。だとすればフランクファートの言うように、仕事を大切に思いケアしている人は、相反する欲求に流されそうになったときには、仕事への欲求に導かれるように努めること、すなわち欲求に対する二階の関与的態度が要請されることになるだろう。そして、このようにケアの一階の関与を妨げる欲求が力をもったときに、二階の関与が働くおかげで、対象への関与を促す動機づけが維持されることになり、単に振る舞いのレベルのみではなく、動機づけのレベルで通時的な安定性が保証される、というのがフランクファートの論点なのである。

ケアとは異なる方向ではあるが、フランクファートの動機づけの階層モデルを受け継ぐブラットマンは、フランクファートが行為論にもたらしめた階層性のアイデアについて次のように述べ、それを強力に擁護している。

動機づけにおいて作用する力の中には、自分の基礎的な実践的コミットメントに反するようなものがある。その最も分かりやすいケースは、身体的衝動、怒り、逆上、卑下、嫉妬、憤慨、憤り、悲しみといったものが特定の形をとった場合であろう。こういった基礎的コミットメントに反するような動機づけが、我々の心の一部を成しているということ、また人間の行為者は、基礎的コミットメントと衝突する可能性があるこの種の動機づけに対処すべく、自己管理のシステムを必要とすること、これらのことは人間の行為者についての重要な事実なのである（そして、実際、我々は自らのことをそういった仕方で常識的に理解しているだろう）。このような自己管理なくしては、自らの基礎的なコミットメントによって方向づけられるという人間の行為者のあり方は、大いに損なわれてしまうだろう。（Bratman 2007c, 217-218）

ここでブラットマンが「基礎的コミットメント」と表現するものは、フランクファートの言葉で言えばケア（大切に思う）ということになるだろう。つまりフランクファートによれば、「大切に思う」というあり方に反するような様々な動機づけ（欲

ると、フランクファートは、意志の弱さの問題を、欲求への高階の態度という点から考察しているとも言えるかもしれない。

求)を我々はもっており、そういった意に沿わない欲求に対処する自己管理の様式として、二階の関与的態度が必要だということになるのである。

とはいえ、「大切に思う」ということには、必ず、欲求への関与的態度が伴うのか、といえ、その点はあまり定かではない。例えばある対象が自分にとって非常に魅力的である場合、その対象に関連する活動をすべく駆り立てられ、自然とその活動にいつも着手してしまうかもしれない。例えば1.5で話題にした美食家は、美味しいものを食べることを生きがいにして大切に思っているが、彼は美味しいものを食べたいという欲求に、いつも自然と動機づけられるので、それを妨げる欲求に対する介入的措置は何ら必要ないかもしれない。彼は、高級食材を活かした評判の店に頻繁に足を運んだり、グルメ雑誌を熱心に読んだり、贅沢な美味を楽しむレストランをブログで紹介したりする。しかし、そういった活動へと彼は自ずと動機づけられるのである。それゆえ、確かにフランクファートの主張は強すぎるかもしれない。

この問題を考えるにあたって、ケアにおける意欲の次元よりも感情の次元を重視する、ヤヴォフスカの議論が参考になる。ヤヴォフスカは、アルツハイマー型認知症を患っている老婦の事例を挙げて、ケアする（大切に思う）ということの核となるのは、感情の継続的パターンであるという点、さらには、ケアには二階の関与的態度が必ずしも伴う必要がないという点を指摘している（Jaworska 2007, 549-565）。ある老婦は、アルツハイマー型認知症を患っており見当識障害も進行しているが、料理を作ることに對して熱心に取り組んでいて、どういう調理や味付けが食欲をそそるか、どういう食材のペアが魅力的か、どの産地の野菜がおいしいか、といったことにこだわりつつ食事をつくる。彼女は手伝いの家政婦が代わりに料理を作ろうとすると怒って、自分が作ると言い張る。彼女にとって食事を作るという活動は、かけがえのないものであり、彼女は料理を作るということに深い歓びを感じているのである。美味しい料理ができたときは誇らしく感じ、料理がうまいかなかったら不満に感じたり残念な気持ちになったりする。料理をふるまった客から美味しいと誉められればとても嬉しい気持ちになる。ヤヴォフスカによれば、こういった一定の感情のパターンがある一時点ではなく、複数の時点でまたがって見いだされるような継続的なものであるなら、料理をすることはその人が大切に思う対象だと言える。ここでヤヴォフスカが強調する重要な論点は、このような一定の感情のパターンがこの老婦に継続的に見いだされるとしても、「(今日は疲れたので) 食事を作りたくない」という対立する欲求が生じたときに、「食事を作りたい」という気持ちを高めるような高階の動機づけシステムは、この老婦に見いだされないかもしれない、という点である (ibid., 535)。しかし、それでもなお、上記のような感情のパターンが一定の期間にわたって同様に見いだされるなら、その老婦は料理を作るという活動を大切に思っているものであり、料理に対する彼

女の思いは切実なものなのである、と考えることができる。こういったヤヴォフスカの議論は、高階の動機づけ機能を失った場合もなお「大切に思う」という水準でのケアが成立していることを明らかにしており、その点で重要なものであるように思える³⁸。

この反論に対して、フランクファートの立場から応答するとどうなるのだろうか。確かに、ケアにおける一定の感情パターンの継続という指摘は、フランクファートが見落としたケアの基本的な特徴に光を当てており、その指摘は貴重なものである。しかし何らかの対象を大切に思い関わろうとするとき、我々がある誘惑や欲求にさらされ葛藤に陥るということは、案外ありふれているのではないだろうか。そして大切に思う対象に関わるときには、そういった誘惑や欲求に対して、ケア対象への自分の気持ちを高めて対処するというのは、たとえ常にそうだとは言えなくても、我々の一つの典型的なあり方だと思われるのである。先に話題にした美食家の場合でさえ、例えば、他のことで多忙になり、これまで長く続けてきた美味紹介のブログ活動を断念したいという誘惑に駆られたとき、その「断念したい」という気持ちに流されないように、そのブログ活動で培ってきた交友関係の豊かさを思い浮かべ、「ブログを続けたい」という気持ちを高める（二階の関与）、というようなことがあるかもしれない。むろん、それでも、アルツハイマー型認知症を患った老婦のケースに見られるように、大切に思うというあり方に、こういった二階の関与が必ずしも伴うわけではないから、その点でヤヴォフスカの指摘は正しいことには変わりがない。しかし互いに衝突するような多種多様な欲求を我々がしばしばもつという点を踏まえれば、大切に思うというあり方には、大切に思う対象に関わる欲求を相対的に強め、それを妨害する欲求を相対的に弱めるような介入的な措置がしばしば必要とされる、と考えられるのである。そういった仕方、ヤヴォフスカの指摘を正しいと認めた上で、フランクファートの主張もまた、弱められた形ではあるが、支持することができる。

実際フランクファートが、このように二階の関与を重視するのは、我々が様々な

³⁸ 同じくケアにおける感情の次元を重視する論者としてD・シューメイカーを挙げることができる。しかしながらシューメイカーとヤヴォフスカの間には相違もまたある。シューメイカーも感情のパターンを重視してはいる。例えば自分が大切に思う存在が、望ましい状態になったときは喜びや満足を感じ、望ましくない状態に陥ったときは悲しみや苦しみを感ずる、といったようにシューメイカーは捉える(Shoemaker 2003, 91-95)。しかしながら彼は「大切に思う」ということに特徴的な、関心の持続性をどう捉えるか、という点に関しては明確な答えを提出していない。他方、ヤヴォフスカは、こういった同様の感情のパターンが一定の期間において繰り返し現れるという、感情のパターンの通時的性格に訴えて、高階の態度に訴えることなく、「大切に思う」に特徴的な持続性を捉えているのである(Jaworska 2007, 549-565)。

誘惑や衝動に絶えずさらされるという事実を深刻に受け止めているからなのである。そして、こういった事実を重く受け止めながらも、フランクファートが強調するのは、我々が単にそういった力に対して「受動的な傍観者 (passive bystander) なのではない」(Frankfurt 2004, 20) という点である。ケアが含む二階の関与は、様々な誘惑や衝動によって、多様な方向へ分散しそうな動機づけのあり方を、一定の仕方でまとめ上げていくような統合化の働きをするものとして重視されているのである。こうして、振る舞いの通時的な方向づけという第二章(2. 2)で見たフランクファートの論点は、意欲(動機づけ)の通時的統合性という論点として、より発展していくことになる。フランクファートによれば、大切に思うというあり方が含む二階の関与の働きによって、「意欲が特定の事柄に関して持続性をもつ」(Frankfurt 2006, 19) ようになり、「自己が複数の時点にまたがる仕方で統合化されるのである」(ibid.)。そして、実のところ、こうした複数の時点にまたがった意欲の統合的なあり方こそ、フランクファートがケアという観点を通して光を当てたいことなのである。この通時的統合性という論点は、意欲の必然性というアイデアによってさらに徹底されることになる。今度はこの点を見ていきたい。

3. 2 フランクファートのケア論の骨子(2) ——意欲の必然性

前節で見たように、フランクファートは二階の関与的態度によって意欲の通時的統合性を捉えようとした。しかし、二階の関与は意欲の通時的統合性を保証するのに十分であろうか。フランクファートの(二階の態度に訴える)階層的なモデルには、よく知られた批判がある。それは高階の無限後退という批判である。一階の動機づけの統合性を保証するために、二階の関与的態度が導入された。確かにケアに結びつく欲求を支持する二階の関与を伴うことで、対立する欲求の効力は低減され、動機づけのレベルで通時的統合性が生まれるのである。しかし二階の関与的態度同士が衝突することはないか。この点は、ワトソンが階層的なモデルに対して以前から批判している点である(Watson 1975, 205-220)。フランクファート自身もまた、この点を認める。そういった二階の関与間の衝突は、例えば「仕事への献身的態度や、ある人物への献身的態度をもちながらも、それを阻むような別の献身的態度をもつ」(Frankfurt 1999b, 99)場合に、生じうるとされるのである。

とはいってもフランクファートは具体例を挙げていないので、2. 3で論じた太郎の事例を多少アレンジし、フランクファートが用いている概念に基づいて記述し直すことにする。太郎は、様々な誘惑に対処しつつ、仕事に懸命に身を投じている。それゆえ、仕事に対する欲求への関与(二階の関与)をもっている。彼は夜遅くまで仕事に没頭するのだが、他方で、妻の花子が幼い子供たちの面倒を一挙に背

負うことになり、週末もろくに休めなくなった花子は、「仕事、仕事ってもういい加減にしてほしい」と太郎に訴える。さて、ここで太郎は、仕事を大切に思う気持ち以外にも、妻を大切に思う気持ちをもっている。だから仕事を進めたいという欲求に肩入れする二階の関与のみならず、花子のためになりたいという欲求に肩入れする二階の関与ももっている。例えば、家事や育児の手を抜きたいといった誘惑に駆られたときは、その誘惑に対処するような二階の関与をもっているのである。そして太郎は、花子の訴えに直面し、この二つの二階の関与的態度——仕事に没頭したいという気持ちに従おうとする態度と、花子のためになりたいという気持ちに従おうとする態度——が衝突すると、深い葛藤を感じざるをえなくなる。こうして仕事が忙しくなる 때가 頻繁にあるため、太郎はこういった葛藤をたびたび感じてしまうのである。フランクファートは、こういった二階の関与的態度における非統合的な状況を、「意欲の分裂 (volitional division)」といった言葉や「両価的葛藤 (ambivalence)」といった言葉で表し、それを問題視することになる (ibid.)。

そこで二階の関与的態度における統合性を保証するものとして導入されるのが、意欲の必然性というアイデアである。意欲の必然性とは、ケアが特定の形をとったものであり、それは、ケアを妨げるような行為へと自分を仕向けることができない、ということに関連する (Frankfurt 1988c, 85-88)。つまり大切に思う対象に離反するような行為へと、自分を仕向けるようなことはできず、特定のケアに結びついている (諸) 欲求に従わざるをえない、という意味で、意欲は必然性を帯びているのである。むろんケアに伴う意欲の中には、必然性を帯びたものと、帯びていないものがあるが、必然性を伴う意欲にフランクファートはとりわけ注目するのである。そして意欲が必然性を帯びるとき、「その進路の代わりになりうるような、いかなる選択肢も実行可能には思えない」 (ibid., 86) のである。そしてもう一つフランクファートが強調する点は、その必然性に服している主体は、「そのような自分の必然的傾向性を変化させることに関心がない」という点である。むしろそういったあり方を変えることは、彼にとって不本意なのである (ibid., 87)。だから当然、意欲が特定の仕方、複数の時点にまたがって固定化されることになる。

フランクファートはこういった意欲の必然性を、マルティン・ルターに言及して説明している。フランクファートによれば、ウォルムス喚問で自説を撤回するか尋ねられたとき、ルターが述べたとされる言葉「我、ここに立つ、他のいかなることも為しえず」の内には、意欲の必然性を見てとることができる (ibid., 86-87)。ルターにとって、信仰活動は、教会の権威ではなく、聖書の言葉そのものを拠り所としなければならないものであった。それゆえ聖書の言葉に忠実に展開された自説を撤回することは、聖書の言葉 (大切に思う対象) に離反することを意味していた。もしかしたらルターは、教会から「自説を撤回しなければ破門する」と脅されたとき、「破門されないように自説を撤回したい」という誘惑をもったかもしれない。

しかし、それでも撤回という行為へと自分を仕向けることはできなかったのである。むしろ「聖書の言葉を重んじたい」という欲求への肩入れ（二階の関与）はルターにとって決定的であり、その二階の関与のレベルにおいて何ら迷いや躊躇いもないのである。そして、このような自分の態度を変更することはできないし、これからもずっと変更しないということ、すなわち、これまでの意欲のあり方が変わらず続くということこそが、ルターにとって本望なのである。

むろん、意欲の必然性は、ルターという歴史に名を残す大人物に限られたことではなく、人間に幅広く認められるものだと言フランクファートは考えている。例えば、ある親は、子供を単に大切に思うのみならず、子供をどんなときも大切に思わざるをえないのである。彼／彼女は、子供のことを蔑ろにするような行為へと、自分自身を仕向けることができない。むろん、ここでも何らかの誘惑にさらされることがあるかもしれない。例えば、その親は、子供が全然言うことを聞かないときに、「その子供を叩きたい」という衝動に駆られるかもしれない。しかし、そのときは、「子供のためになることをしたい」という気持ちを後押しするような二階の関与が形成される。そして、この二階の関与においては、その親は、何ら迷いや葛藤はなく、それに衝突するような別の二階の関与をもたないのである。またその親は、そのような子供への関与を変えようとも思わないし、むしろそのように変えることは自らの意に沿わないことだと考えているのである。

ここで重要な点は、このように意欲の必然性を伴う仕方である対象を大切に思うとき、二階の関与もまた統合化されるということである。フランクファートにとっての問題は、たとえ、二階の関与的態度を導入することで一階の欲求に統合性をもたせようとしても、今度は二階の関与的態度同士が衝突してしまい、統合化が妨げられる、という点にあった。つまり両価的葛藤が常に生じうるのである。そこで、フランクファートは、意欲の必然性というものに着目し、それによって両価的葛藤が回避できると考えるのである。というのも、ケアに意欲の必然性が伴うことによって、ある対象へのケアが、他の対象へのケアよりも、不動の優越性をもつことになるからである。フランクファートによれば

彼〔意欲の必然性に服している人〕は、〔意欲の必然性と結びついている〕そのケア対象が、他のどのケア対象よりも大切に扱われるようにするために、その対象〔前者の対象〕へのコミットメントがもつ安定性や効力と一貫しないと見なす、いかなる動機または欲求をも抑制し、それらの動機・欲求から自分自身を分離させる（Frankfurt 1988c, 87〔大括弧内の補足は引用者〕）。

ケアに意欲の必然性が伴うことで、二階の関与的態度の衝突である両価的葛藤が

解消される、という点を見るために、ルターの事例を少々仮想的にアレンジしよう。ルターの父親は、ルターがローマ・カトリック教会に挑むのは無謀だと考え、ルターのやり方に激しく反対する。そしてルターのどんな説明にも父親は一切耳を貸さず、「教会に挑戦するようなことがあったら絶縁だ」とルターに言い放つ。そう想像してみよう。この場合、ルターが父親を大切に思っており（父親へのケア）、「父親を憤慨させるようなことをしたくない」という気持ちを後押しするような二階の関与をもっていたとしても、「聖書の言葉を守りたい」という気持ちを後押しするような二階の関与が優先されるため、父親に関する二階の関与は阻却されることになる。つまりルターが、たとえ「父親を憤慨させるようなことをしたくない」という父親への欲求をもっていたとしても、その欲求は、聖書を大切に思う気持ち（聖書へのケア）の安定性と効力と一貫しないと見なされるので、父親への欲求は抑制され、さらに父親への欲求の効力を高める二階の関与も作動しなくなるのである。こうして二階の関与的態度同士の分裂は解消され、聖書に関する二階の関与が一方的に優先されるという形で、意欲の強い統合性がもたらされることになる。

そして重要な点は、フランクファートが、このような意欲の必然性において確立される二階の動機づけの統合性を「専一性（wholeheartedness）」と呼び、そのような専一性が持続することの内に、その人を当の人物たらしめているような「その人らしさ」や「その人自身の本性」を見てとる、という点である。フランクファートによれば「意欲の必然性によって我々が背くことができなくなるのは、自分自身なのである」（Frankfurt 1988c, 91）。つまり、意欲の必然性において、専一的なあり方が持続することの内にこそ、「その人らしさ」ないし「その人自身の本性」が表現されているのである（Frankfurt 1999c, 108-116）。それでは、なぜその人らしさというものを捉える際に、専一性を伴う通時的（持続的）な統合性が最重視されるのか。

フランクファートが強調することは、このようにケアにおいて意欲が固定されることで、自分はいかに生きるべきかという問題に関して、理に適った決定ができるようになるという点である。我々は2. 2で、「ケア（大切に思う）が、自らの生を形作っていくような通時的な行為者のありようと結びついている」というフランクファートの論点を見たが、その論点は、意欲の次元に関する議論を経て、より明確化されていくのである。「もしある人の意欲に関する性格が固定されていないのならば、……彼は自分がいかに生きるべきかについて、いかなる合理的な仕方でも、その決定へと歩みを進めることができなくなるだろう」（Frankfurt 1999a, 94）。

そして、この意欲の固定化がもっとも十分に成し遂げられるのは、ケア（大切に思う）が意欲の必然性を帯びたときなのである。すなわち、意欲の必然性を伴う形

で、ある対象を大切に思うとき、二階の関与を伴う様々なケアの中で、どのケアを優先すべきか、ということについて答えが確定する。その結果、二階の関与のレベルでの葛藤や衝突も解消され、いっそう、その人の動機づけのあり方は固定化されることになる。そして、このように意欲が固定化されることで、いかに生きるべきか、ということが定まってくる。ルターの場合であれば、聖書の言葉を第一にして生きるべきである、ということになるし、子供へのケアに意欲の必然性が伴うような親であれば、子供のことを第一にして生きるべきだということになるだろう。もちろん、意欲の必然性は、個々の場面での選択内容を、あらかじめ完全に規定するようなものではない。しかし、どう生きるべきかの指針があるからこそ、何を選択したり、どう選択したりすればよいか、ということについて確信がもてるようになる。ルターの例で言えば、聖書の言葉を大切に思うというあり方は、意欲の必然性を伴っているからこそ、たとえ教会から破門されようと、聖書の言葉を抛り所にする自説を撤回しない、という選択がなされたのであるし、そういった選択にルターは確信をもてたのである。

フランクファートは、こういった意欲の必然性の重要性を示すため、その必然性という制約が失われた場合どうなるかということ論じる。

選択に対する制約が、あまりにも弱められると、人は方向性を失い、何を選択すればよいのか、またどう選択すればよいのか、確信をもてなくなる。そして選択肢の大規模な増大は自分自身が何者であるかについての把握を蝕むだろう。そのようにして数が増大してしまった選択肢を評価し、順位づけするという作業に彼が直面したとき、何が関心事であり優先事項かに関する彼のこれまでの理解は、以前より確固としたものではなくなり、決定的なものでもなくなる。自分自身が何を望むかということに関する確信は、彼に開かれている選択肢が減少し慣れ親しんだものであるとき、より強く得られるのだが、そういった確信は、選択肢の大規模な増大によって掘り崩されるだろう。すなわち、そこでは自分自身が何者であるかについての明瞭さや確信がかき乱される、という事態が生じることになるだろう。(Frankfurt 1988e, 177)

ここには、自由な選択肢の増大ないし選択可能性の拡大という点から人間の行為者性を捉えようとする立場に対する、フランクファートの根本的な疑念が表明されている。極めて素朴な考え方によると、我々は選択肢が増大することによって、様々な軛から自由になり、より自分らしい生き方を手に入れることができる、とされる。しかしフランクファートはむしろ反対に考える。その人にとって考えられる選択肢が多いということは、どう生きるべきか、ということや、自分は何者である

か、ということについて、その人があまり確信をもっていないということを意味するのである³⁹。ある理に適った選択ができるのは、意欲の不可避の制約の下なのであり、その制約を取り払ってしまえば、どのような選択をすればいいのか、分からなくなる。そこでフランクファートは、我々が何事かを既に大切に思っている、ということから始める。そして大切に思っている対象の中には、意欲の必然性と関係してくるようなものがあり、それが中心になって、その人が何者であるかを定義すると考えるのである。

こういった側面は、行為の理由という観点からも捉えられている（Frankfurt 2006, 33）。すなわち、意欲の必然性を伴う「大切に思う」こそが、行為の理由を決定的な仕方で見出すのである。単に、「大切に思う」というあり方のみであれば、二階の関与の衝突のところで見たように、あるケアと結びついた欲求と他のケアと結びついた欲求が衝突するということが考えられる。その結果、何をするのが理に適っているか——理由によって決定的に支持されるのはどのような行為か——ということについての最終的な解答は得られない。他方で、意欲の必然性を伴うような仕方では、ある対象を大切に思うときは、ある二階の関与と別の二階の関与が衝突するということが考えられないから、何をするのが理に適っているか、ということがより決定的な仕方では確定化することになるのである⁴⁰。

そしてフランクファートは、どう生きるべきかについての指針を与える点において、意欲の必然性が、自律という人間の行為者特有のあり方につながっている、ということを強調する（Frankfurt 1999d, 129-141）。フランクファートは、自らのありように強い確信（自己確信）をもって生き方を形作っていくということをして「自律」という言葉に託す。そして彼によれば、意欲の必然性こそ、このような自律的なあり方を可能にするものにほかならないのである。というのも意欲の必然

³⁹ 選択を第一義的なものと見なす考えに対する反論は例えばC・テイラーによっても為されている。テイラーは、選択に先立って重要性の地平が存在していると考え。そして重要性の地平なくしては、選択は価値をもたない。しかし選択を第一義的なものとする論者——テイラーによればサルトル——は、ある特定の事を選択すること自体が、その選択に価値または重要性を与えると逆方向に考える。テイラーは次のように批判する——「ところが……選択それ自体の肯定へとすべり落ちてしまうことがあります。どの選択肢も等しく価値がある。それはどの選択肢も自由に選択されるからだ。つまり価値を授けるのは選択それ自体なのだ、というわけです。……この原理は選択に先立って重要性の地平が存在していることを暗黙の内に否定します。最初に重要性の地平があって、価値あるものとそれほど価値はないもの、さらにまったく価値のないものが区別され、それから選択がおこなわれるにもかかわらず、……重要性の地平がまえもって存在することを否定します。」（テイラー〔田中訳〕 2004, 53）

⁴⁰ ケアと行為の理由との関係に関してはザイドマンも論じている。ザイドマンによれば、ある対象Xをケアすることは、Xに関連する特定の要件を行為の理由と見なすことに結びついているのである（Seidman 2009, 285-286）。

性は迷いや両価的葛藤を消滅させ、確信をもって生に臨むことを可能にしているからである。だから、意欲の必然性が重視され、専一性を伴う通時的統合性をもったものとしての「その人らしさ」が重視される背景には、人間の行為者性の本性を、「自分のあり方に強い確信をもって行為する」という意味での自律性に見てとる、フランクファートの根本的な洞察がある。こうしてフランクファートのケア論を次のように解釈することができるだろう。自律的行為者観（「自分のあり方に強い確信をもって行為する」という意味での自律性）に結びつくかたちで「その人らしさ」が解釈され、さらにそういった「その人らしさ」を構成し、保証するものとして意欲の必然性を伴うケアが重視されるに至っている。

3. 3 フランクファートのケア論の問題点

さて、では以上のようなフランクファートの議論をどう評価すべきだろうか。フランクファートが、それまで行為論であり論じられてこなかった葛藤という側面に注目し、その葛藤を考慮した複雑な動機づけの構造を解き明かそうとした点は高く評価されなければならない。そしてケアの動機づけに関しても、そういった複雑さをもたせている点は重要だと考える。しかし私は、葛藤というものに着目し論じたフランクファートのケア論の意義を認めつつも、ある点においてフランクファートと立場を異にする。それは（両価的葛藤を含めた）葛藤を、人間の行為者性の考察において、どのようなものとして位置づけるかという点に関わる。（3.2で見たように、両価的葛藤とは、「大切に思う」という水準のケアに伴う、二階の関与の態度が衝突して起こる葛藤であった。私が「葛藤」というときは、こういった両価的葛藤のみならず、一階の欲求や心的傾向性における葛藤をも含めて考えている。）

フランクファートによる葛藤の扱いに関してまず注目すべきは、彼が葛藤を望ましくないものとして否定的に考えている点である。すなわち、葛藤を、専一的統合性の妨げになる有害なものとして見る。葛藤がなければ、それに越したことはない、というのがフランクファートの基本的な見方なのである（Frankfurt 1999b, 106）。フランクファートにおいては、自律性重視の考えから、葛藤に対する極めて否定的な見方が帰結する、という点を我々は見逃すわけにはいかない。結局、葛藤状態にあるということは、何をすればよいか分からない様態、どっちつかずの迷いのある様態、踏ん切りがつかない様態、躊躇いがある様態、割り切ることができない様態であり、そこでは自分のあり方に対する自信も揺らいでいる。それは、自らのありように強い確信（自己確信）をもって、人生を形作っていく、という自律的なあり方に亀裂を生じさせるものなのである。このように自律的な行為者性を妨

げるものであるから、フランクファートは両価的葛藤を含めた様々な葛藤を攪乱因子として危険視するのである。しかし、葛藤はそれ程までに否定的に見なされるべきものなのだろうか。こういった疑問は、葛藤の有無と結びついている、自律性に関する問いも喚起するだろう。フランクファートの意味で自律的であること、すなわち専一性（wholeheartedness）を備えた自律性をそれ程までに重視すべきなのであろうか。

とはいえ、このように疑問を投げかけることで、統合性というものが重要ではない、と私は言いたいのではない。もし統合性を完全に失えば、我々は様々な方向性に偶発的に流されるだけの支離滅裂な存在になってしまう。そうなれば我々の中では様々な刺激や欲求が無秩序にひしめきあうことになり、その都度の我々の振る舞いも散逸的になってしまうだろう。そういった点を踏まえれば、一定の統合性を備えてはじめて、我々は通時的な行為者としての体を成すと言える。しかし、それでもフランクファートが意欲の必然性に訴えて、意欲の統合性の純度を高めようとするとき、それは通時的な行為者性を捉える上では行き過ぎていたのではないか。つまり、振る舞いを一定の仕方で行く方向づけるということに結びつくような統合性は重要であるにしても、果たして専一的な統合性を備えた自律性は、それ程重視されるべきなのか、という問題が生じるのである⁴¹。フランクファートはこの問いに対してイエスと答える。彼は自律性を特徴づけている専一性（両価的葛藤の不在）について次のように述べる。

誰も両価的葛藤をそれ自体としては望まない。それゆえ、我々が専一的であることを専一的に望むということは、我々についての必然的真理なのである。（Frankfurt 1999b, 106）

しかし本当に「我々が専一的であることを専一的に望むということは、我々についての必然的真理」なのであろうか。S・ウルフの次の指摘は示唆に富んでいる。

フランクファートによれば、「我々が専一的であることを専一的に望むということは、我々についての必然的な真理である」とされる。だが、私自身[ウルフ]に関して言えば、専一的であることに對してどっちつかずの気持ち

⁴¹ 自律という概念は、これまで歴史上、様々な仕方で行われてきた概念であり、現在でもその捉え方は一様ではない（e.g., Christman & Anderson 2005）。本章であくまでも問題視するのは、フランクファートが支持する自律的なあり方、すなわち専一性と結びついた自律性である。こういった専一的な自律性は、自らの生き方を強い確信をもって形作るような、主体の決然としたあり方を指し示す。それゆえ、本節が反対するのは、こういった決然たる主体性を強調して人間の行為者を捉える立場なのである。

(ambivalence)を抱いていると言いたくなる(また、そのことに対応して、専一性の反対である状態、両価的葛藤に関しても、どっちつかずの気持ちを抱いていると言いたくなる)。というのも、ある価値観、関心、愛などに関して専一的であるということが意味するのは、それらのことに完全な形で、何の動揺もなく、肩入れしているということであり、そこではいかなる疑念も抱かれていないということだからである。また、そういった価値観・関心・愛への献身を継続すべきかどうかということに関しても、何ら疑ったり、疑おうとしたりしないことになってしまう。しかし人は、自分の価値観にもしかしたら誤りがあるかもしれないと思ったり、あることを(そこまで)大切に思うことは、ひょっとすると誤っているかもしれないと思ったりする以上、人には一定の両価的葛藤、もしくは両価的葛藤への開かれたあり方が要求されると、私には思えるのである。(Wolf 2002, 239 [大括弧内の補足は引用者])

私は、このウルフの直観を支持したいと思う。つまり、ウルフによれば、我々は、割りきれない気持ち、躊躇い、動揺、迷い、逡巡といったものが取り除かれているような、専一性の様態になることを、何の迷いもなく欲しているのではないのだ。むしろ、我々はある場面では専一的であることに対して、躊躇ったりするのであって、フランクファートが思っているほど、我々は単純明快であるわけではない、というのがウルフの論点なのである。もちろん、そのように専一性に対して一途な気持ちになれないからといって、両価的葛藤を何の躊躇いもなく全面的に肯定するかと言えば、そういうわけでもない。すなわち、やはり「両価的葛藤の状態に陥っていることに関しても、どっちつかずの気持ちを抱いているのである」(ibid.)。

ただし、ウルフはこういった直観を支持するような議論を積極的に展開するまでには至っていない。それゆえウルフの直観を直観のままに留めるのではなく、よりきちんとした議論に仕立て上げることが必要とされるだろう。またウルフの論点は、両価的葛藤に関するものに限定されているが、しかし一階の葛藤に関しても——例えば「彼女に優しい声をかけるべきだろうか、それとも毅然とした態度をとるべきだろうか」に関しても——、ウルフの観点は同様に当てはまるだろう。(通常、両価的葛藤(ambivalence)は一階の心的傾向性が衝突している場面において用いられるが、本章ではフランクファートの用法に従い、二階の関与的態度が衝突している場面において用いる。)それゆえ、ここではフランクファートへの反論を徹底するために、そういった葛藤に関しても、ウルフの観点が拡張できることを示す必要がある。そして、こうした点を示すことは、本稿が採用した関係的一動的アプローチにとっては、それほど難しいことではない。

というのも、我々が2. 3と2. 4で見てきた「気にかかる」というケアの様態

は、主体を未知の要素に出会わせることで、主体に動揺や当惑をもたらすものであったが、そこでは、葛藤的要素は必ずしも否定的なものではなかったからだ。すなわち、「気にかかる」という様態を通じてもたらされた動揺や当惑といった、主体の葛藤的なあり方（両価的葛藤も含む）は、ケアと行為者のありようが時間的推移とともに展開する中で、積極的な意義をもつものであった。これはフランクファートのケアの議論を批判するときに決定的に重要な点になるので、きちんと見ていこう。

2. 3で取りあげた、仕事に対する太郎のケアの事例、すなわち、自分の企画書について部下が述べた辛辣なコメントが気にかかる、という事例に多少手を加えながら考えてみたい。そこで太郎の注意をとらえた、部下からの辛辣な批判（気にかかった対象）は、自信をもって仕事に取り組んできた太郎にとって、慣れ親しんだものであるよりは、すぐには呑み込めない異物のようなものであった。そしてそれは、「この事業は多くの社員にとってもやりがいがあるはずだ」という事業に関する太郎の確信に、綻びを生じさせる。そして、それによって太郎は、これまでの事業のやり方を貫き通したいという気持ちと、改めたいという気持ちの両方をもつようになり、葛藤状態に陥る。しかし、こういった仕方で気にかかるという様態が、現時点では必ずしも全容が定かではないような異質なものに、太郎を出会わせているという点が重要であった。確かに、気にかかるという様態を介して、主体には葛藤がもたらされるのだが、それが同時に、自らの仕事への関わり方（また仕事を取り巻く人たちへの関わり方）を再考することへと、太郎を促しもするのであった。例えば、太郎は数日たって冷静になったとき、「これまで他の社員たちの考えに十分に耳を傾けてきたか」といったように問い直すかもしれない。それは後の太郎の行為の変化につながっていく可能性をもつ。このようにケアにおける行為者のありようを時間的推移の中で展開するものとして捉えたとき、葛藤を望ましくないものとして否定的に考えるフランクファートの見解はあまり妥当性をもたないように思えるのである。「気にかかる」という様態を通じてもたらされた、動揺や葛藤はケアを新たな局面——しかも、それはときには、より望ましい局面でもありうる——へともたらす重大な契機になっている。ここでもし、「気にかかる」を通して生じた葛藤が欠如していれば、太郎は従来のやり方を押し通すだけに終わり、仕事への取り組みは望ましい仕方で変化しなかったであろう。むろん、だからといって、ここでも「葛藤は望ましいものだ」といった一般的な議論が通用するわけではない。しかし、以上のように、あくまでも、ケア対象との関わりや、ケア対象を取り巻く人たちとの通時的な関わり観点から葛藤を考えることによって、「葛藤に関して望ましいとも望ましくないとも言えず、どっちつかずのところがある」という、両義的な態度（ウルフの直観）が部分的には支持されるだろう。

また、上記の事例（仕事への太郎のケアにおける葛藤の事例）は、一階の葛藤に

関するものであるが、二階の関与における葛藤である両価的葛藤に関しても、それが望ましくないとは言いきれない、と考えることができる。2. 3 で取りあげた花子に対する太郎のケアの事例を少しアレンジして考えてみよう。そこでは太郎にとって不意に訪れたような花子の訴えが、太郎に葛藤をもたらすが、それでも、その葛藤が同時に太郎の花子に対する理解や、花子に対する行為のあり方を変化させていた。この点を確認しよう。太郎は仕事の締め切りが迫っており、それゆえ仕事に集中したいという気持ちを後押しするような二階の関与をもっている。すなわち「他のことをしたい気持ちを抑えて（二階の関与）、仕事をどうにかしなければ」という思いを抱いている。しかし、花子の発した「仕事、仕事っていい加減にして」という訴えが、否応なく太郎の注意をとらえる（気にかかる）のであった。ここでは、「仕事が忙しいときは、花子が家事を全てしてくれるだろう」という太郎のこれまでの理解は揺さぶられ、仕事に集中するという彼の固い決心にも綻びが生じる。そして「気にかかる」という様態を通じて花子の訴えに直面することで、花子を大切に思う気持ちが活性化されて、花子のためになりたい気持ちを後押しするような二階の関与もまた形成される。例えば「仕事をしたいという気持ちを抑えて（二階の関与）、花子のために何かしなければ」という思いが生じるのである。ここで「他のことをしたい気持ちを抑えて（二階の関与）、仕事をどうにかしなければ」という前から抱いている仕事への思いと、「仕事をしたいという気持ちを抑えて（二階の関与）、花子のために何かしなければ」という新たに生じた花子への思いが衝突して両価的葛藤がもたらされるのである。そして休日もろくに休めず、気分転換もできない花子の複雑な気持ちが、彼女の訴えや表情から鮮明に感じとられると、「仕事をしたいという気持ちを抑えて（二階の関与）、花子のために何かしなければ」という思いの方がより強くなり、太郎は仕事に割いている時間の一部だけでも、花子を楽しむために使えないか、考えるようになるかもしれない。このように「気にかかる」ということを端緒にして生じた両価的葛藤が、花子の状況への新たな理解と花子に対する新たな行為を促す面を踏まえると、両価的葛藤を単に否定的なものとして捉えることはできないように思われる。花子の様子が気にかかることによって両価的葛藤が生まれるが、しかし同時にそのような葛藤を抱えているからこそ——仕事に対する意欲の統合性が崩れているからこそ——、太郎は花子に対して何かできることはないかを考えることもできるのである。もし、この両価的葛藤がなければ、花子に対する関わり方の変容はもたらされることはなかっただろう。それゆえ、ここでも、葛藤は望ましくないと単純に考えることはできないのである。

ここで次のような反論があるかもしれない。葛藤がより深刻なものになった場合はどうか。そのときは、葛藤は望ましくないと言えるのではないか。この反論に応答するため次のような事例を考えよう。（この事例は、B・ウィリアムズが道徳

的運の議論で取りあげている、トラック運転手の事例（Williams 1981, 28）をケアという視点から大きくアレンジしたものである。）

ある母親——幸子と名づけよう——は、運転中、不意に飛び出してきた子供を轢いて命を奪ってしまった。しかし幸子自身には何ら過失があったわけではなく、その子供が一方的に飛び込んできたのだった。だが、それでも彼女は、取り返しのつかない重大なことをしてしまったことを深く悔い、得体のしれない罪の重さに押しつぶされてしまう。被害者の両親がどんなにやりきれない気持ちか、母親である彼女には痛いほどよく分かってしまうのである。このように幸子は罪悪感に苛まれることで、すっかりやつれ、完全にふさぎこんでしまう。しかし彼女には幼い子供達がいる。そして、いつまでも彼女の弱り切った姿を子供に見せることは、子供たちをひどく不安にさせてしまう。そこで「どうにかして元気を取り戻したい」という気持ちが幸子に生じてくる。しかし、他方で、亡くなった子や、絶望のどん底にいる遺族のことがどうしても気にかかり、自分はいっと苦しくて償うべきだ、という思いにも襲われる。こうして、一方での自分の子供へのケアと、他方で亡くなった子やその遺族へのケアが激しく対立し、深刻な葛藤に陥るのである。

このような葛藤もまた、望ましくないのだろうか。そう単純には言いきれないように思える。ここでウィリアムズの指摘が参考になる。ウィリアムズによれば、こういった場合、幸子に対する我々の反応は、

人々は、その運転手が後悔している状態から抜け出せるように、すなわち現在にいる状態から傍観者により近い立場に立てるように、慰めるだろう。きっとそうするだろうし、そうすることは正しい。しかし、重要なのは、そうした慰めがその人に対して必要であると思えず一方で、その人があまりにたやすく、そして動揺することなく、傍観者の立場へと移行してしまうのなら、われわれはその人に何らかの不信感を抱くことになるだろうということなのである。（ibid.）⁴²

我々は幸子に対して、慰めのために「避けられない、仕方がないことだったんだ」と声をかけるかもしれない。しかし、我々は、幸子が葛藤すべきでない、と全面的に考えているわけではないし、幸子が葛藤すべきだ、と全面的に考えているわけでもない。我々は、こういった事件に対して、割りきれない複雑な思いに駆られるの

⁴² ここでのウィリアムズの議論の詳細に関しては古田（2010）が参考になる。

である。一方で、過失がなかったにもかかわらず、幸子が今後もずっと罪悪感に深く苛まれることや、そういった幸子の苦しむ姿を見て育つ子たちのことを考えると、居たたまれない気持ちになる。しかし他方で、亡くなった子の命の尊さや、また愛する我が子の命を奪われた親のやりきれない無念さ、やり場のない憤りといったものを想像すると、胸が締め付けられる。だから、幸子の葛藤が極めて深刻なものであっても、幸子が事件のことを忘れて早く元気になってくれればいい、とも言いきれない。つまり、そういった葛藤は望ましくないものだと、単純には考えられないのである（もちろん、その葛藤の深刻さを考慮すれば、その葛藤が望ましいものだと単純には考えられない）。

葛藤に関するフランクファートの考察において特徴的なのは、葛藤を、その具体的状況の文脈から切り離し、それ自体として取り出そうとする点である。実際、先のウルフの反論に対してフランクファートは次のように答えるのである。すなわち、両価的葛藤は、その文脈を別にしてそれ自体として厳格に考えるならば望ましくないので、「[それ自体としては]、両価的葛藤と専一性のどちらが望ましいのか、に関して、どっちつかずである、ということはあるえない」（Frankfurt 2002, 251 [大括弧内の補足は引用者]；cf. 1999b, 102）。つまりフランクファートによれば、両価的葛藤はそれ自体、望ましくないものであり、専一性はそれ自体、望ましいのである⁴³。

しかしこのフランクファートの応答には欠陥がある。そもそも、両価的葛藤を、その具体的文脈から分離し、それ自体として取り出すことはできないからだ。当たり前だが、行為はあくまでも一定の文脈において行為たりうる。そして葛藤に関してもまた、その点は何ら変わらない。実のところ、そういった文脈を削ぎ落としていけば、両価的葛藤と呼ばれた状態は、個体を感じる単なる不快にまで切り詰められ、そもそも両価的葛藤としてさえ特徴づけられなくなるだろう。つまり、それは単なる胸が締め付けられるような不快といった、文脈なしにでも成立するようなものにならざるをえないが、そういった不快は、一定の文脈の中で捉えられなければ、両価的葛藤にはなりえないのである。それゆえ、フランクファートがその有意義性を信じている「厳密にそれ自体として捉えられた、両価的葛藤（ambivalence strictly in themselves）」（Frankfurt 2002, 251）は、現実的にはありえない概念的虚構であり、実のところ意味をなさないように思われる。両価的葛藤は一定の文

⁴³ フランクファートは人間の行為者性を、自らの生き方を形作るということとの関連において捉えるが、フランクファートによれば、「どう生きるべきか」の問題を考えるときに特に重視されるべき要素は、「自分自身に居心地の良さを感じる」（Frankfurt 2004, 5）という心の安寧なのである。おそらく、このような心の安寧に重点をおく考えと、心的葛藤をそれ自体で望ましくないものとする考えは深く結びついているだろう。

脈においてこそ、はじめて両価的葛藤でありうるのである。そして本稿が採用しているケアの関係的一動的アプローチは、(今見てきたように) ケア対象との具体的関係、ケア対象を取り巻く人たちとの具体的関係、また時間的推移における、そういった具体的関係の変化等を踏まえた、文脈に根ざした考察を旨とするものである。それゆえ、以上の事例で見てきたように、葛藤がケアにおける行為者のありようにとってどのような意味をもつのか、に関しても、「葛藤はそれ自体、望ましくない」といった単純な見方を提示したりはしないのである。

さて、葛藤に関するフランクファートの文脈捨象的な考えは、葛藤への対処の仕方に関する彼の考察にも影響を及ぼしている。フランクファートは、一階の葛藤に対処する方法として、二階の関与的態度によって対立する欲求の力を押さえこむか、もしくはケアに結びついている欲求の力を増大させるか(すなわち、やる気をもっと出すよう自らに仕向ける)という方法にしか言及していない。しかし、それ以外にも様々な対処のあり方があることに注意をしなければならない⁴⁴。その一つは、一見、対立する欲求同士の内容を、編み合わせることによって葛藤を解消するという対処の仕方である。仕事へのケアの事例で考えよう。太郎は、部下に辛辣に批判されて、これまでのやり方を貫き通したいという気持ちと、改めたいという気持ちの両方が生まれ、葛藤状態に陥る。しかし、部下の辛辣なコメントがあまりにも気にかかるので、その部下に思い切って意見を聞いてみるという行動に出るかもしれない。そして、基本的には自分の発想を通しつつも、部下の指摘によってもたらされた新たな視点を受け入れることで、企画したい内容自体が変容し、葛藤が解消される、ということもあるだろう。もちろん太郎は、企画を今から改めるコストだけに注目することによって、「自分のやり方を改めたい」という気持ちを抑え込む形で、葛藤に対処するかもしれない。しかし葛藤に対処するにあたって、そういった二階の関与が行使されるという必然性はない。関係的一動的アプローチは、主体と対象の関係性、またケア対象を取り巻く人たちとの関係性の展開におい

⁴⁴ D・ヴェルマンもまた、対立する欲求の力を抑制することで葛藤に対処するというフランクファートの考え方を批判している。ヴェルマンはここでの葛藤を、感情の対立というレベルで捉え、ある感情(愛情)と対立する感情(憎しみ)があったときに、高階の態度によってどちらかを一方的に抑え込むことは望ましい対処の仕方ではないと論じている。というのも、このような抑え込みによって、本人はそういった両価的な感情にかえって向き合えなくなり、一方の感情が他方の感情と混ざり合うことがなくなるため、あるときは激しい愛着を感じ、次の瞬間には激しい憎悪を感じる、という仕方で感情が両方の極へと激しくぶれてしまうからである。かくしてヴェルマンは、葛藤に対する対処方法として、二階の関与的態度という欲求制御システムのみしか取りあげていないフランクファートの議論を、我々の複雑な心理的なメカニズムを無視したものとして厳しく批判するのである。ヴェルマンは、こういったフランクファートの二階の関与を、フロイトの「抑圧」概念と関係づけてもいる (Velleman 2002, 97-105)。

て、葛藤というものを考えることができる。それゆえ、ここでは仕事を取り巻く人
たちとの関係性の中で——例えば話し合いの場を設けるなどして——、その欲求
の内容を変化させることで葛藤が解消される、という点にも着目できる。他方、動
機づけにおける欲求の効力に焦点を定める、フランクファートの意欲重視のアプ
ローチでは、欲求の内容の変化という点が見落とされ、欲求の力（動機づけにおけ
る効力）のみが着目されている。そこでは、世界と接点をもつ、欲求の内容を固定
化した上で、主体内部の欲求の力を変化させることが問題になるのである。

なぜ欲求の力ばかりにフランクファートは注目するのか。おそらく、それは、彼
が文脈捨象的な考えをとってしまったため、葛藤が生じる場面が、ケア対象との相
互的な関わりの中、またケア対象を取り巻く人たちとの相互的な関わりの中にあ
る、という点を見落としているからである。ケアが、主体—対象関係や主体と対象
を取り巻く人たちとの関係によって展開していく、という点を過小評価している
ために、葛藤の対処の方法として欲求の力を変化させる、ということにばかり注目
してしまうのではないか。葛藤を専ら意欲の問題として捉えると、葛藤は内面化さ
れる。そして、その葛藤をそもそも形作っているもの——すなわち対象（および対
象を取り巻く人たち）との具体的な関わり——についての考察が抜け落ちてしま
うのである。

本稿の关系的アプローチとの対比で述べれば、こうも言えるだろう。关系的アプ
ローチには、単にどの欲求に動機づけられて行為するかではなく、そのような欲求
にそもそも動機づけられたのは、対象（また対象を取り巻く人たち）からどのよう
な影響を受けたからか、ということにも言及する。例えば太郎は、「部下の辛辣な
批判」に影響を受けて、また「花子からの切実な訴え」に影響を受けて、行為へと
動機づけられる。ここではケア対象である相手（花子）からの訴えや、ケア対象を
取り巻く人たち（部下や遺族）からの異議申し立てがあり、気にかかるという様態
を通じて、そういった他者からの要求に直面することによって、葛藤が生じている
のである。しかし、フランクファートの意欲という観点からのアプローチにおいて
は、この「対象（対象を取り巻く人たち）からどのような影響を受けて」の部分が
抜け落ちているように思われる。葛藤の説明においてフランクファートがもって
くるのは、そういった关系的な出来事ではなく、主体の動機づけという内部状態な
のである。そして、それ以上にフランクファートの叙述は遡らないのである。実際、
彼が挙げた、不本意な麻薬中毒者の事例の場合においても、葛藤についての描写が、
麻薬を摂取したいという欲求と、麻薬を控えたいという欲求が対立している、とい
った動機づけのレベルからはじまる。そして、葛藤に対処する場面では、「麻薬を
控えたい」という欲求に肩入れする二階の意欲（二階の関与的態度）の重要性が強
調され、「二階の意欲に支持されたその欲求が、行為に結びつくべきだ」とされる
（Frankfurt 1988a, 11-25）。つまり終始、動機づけのレベルで葛藤の考察が進行

する。そこでは、その中毒者が依存症を断ちたい背景には、彼が新たに育みたい、どのような人間関係があるのかといったことについての描写や、それでも麻薬を摂取して束の間の救済を得たくなる背景には、どのような苦しい現実があるのかといったことについての描写は全くない⁴⁵。つまり、どのような文脈で、その葛藤がもたらされることになったのか、ということへの言及がないのである。

このような関係的次元の軽視は、ケアに専一性を見てとろうとするフランクファートのケア観に由来している。そこではケアは、意欲の必然性を伴うことで、「強い確信をもって決然として振る舞う」という自律的なあり方を可能ならしめるものとして、注目されている。しかし、このようにケアと専一性の強い結びつきを前提にしてしまえば、専一性をむしろ突き崩すようなケアの重要な側面には十分に注目できない。すなわち、「気にかかる」というケアの様態を通じて、主体が意のままにならない対象（対象を取り巻く人たち）と出会うことで葛藤し、専一性を揺さぶられるという一連の過程を、考察できないままになっている。むしろ、フランクファートもある対象を大切に思う気持ちが、別の対象を大切に思う気持ちと衝突し、両面的葛藤が生じる可能性があるという点に関しては、極めて自覚的である。そして、そのような両面的葛藤を問題視するから、それを解決するような、意欲の必然性を伴うケアを重視するのである。しかしながら、やはり、ケア対象や、ケア対象を取り巻く人たちとの関係から葛藤がどう生成しているか、すなわち葛藤がどのような文脈でもたらされるのかについては言及しないのだ。その意味においては、葛藤といったものを正面から扱っているとは言えないのである。すなわち、フランクファートは既に生じてしまった葛藤を動機づけのレベル（欲求と二階の関与的態度）でのみ扱い、どのようにして、そのような葛藤がもたらされたのか、すなわち、どのようにして意欲の統合性が揺さぶられるに至ったのか、という葛藤の生成のありようを論じていないのである。その意味でフランクファートは、葛藤というものを断片的にしか扱っていないと言える。

それにたいして、関係的アプローチは、葛藤の生成に関して次のような筋で説明できる。すなわち、我々は「気にかかる」という様態を通じて、相手——我々のやり方に納得してくれない相手——からの異議申し立て（訴え）に直面することになり、それによって動揺し葛藤することになる。おそらく、子供を轢いてしまった幸子の事例は、その印象的な事例であろう。「子供を轢いて死亡させる」という幸子の行為は、自発的なものや意図的なものでなかった。また、幸子自身の不注意や過失によって、その事故が引き起こされたのでもなかった。しかし、幸子は、その事故が得体のしれない重大性をもっていることに戦慄を覚え、恐れおののいている。

⁴⁵ 依存症自体が、束の間の不安から逃れるための自己コントロールであるという点は信田によって指摘されている（信田 2000, 156-162）。また依存症が人間関係の不全と結びついている点はメロディー（Mellody 1992, 6-9）を参照。

その事故で命を落とした子供のこと、子を失った両親のことが彼女の注意を強烈な仕方にとらせ、頭から片時も離れないような仕方で気にかかっているのである。憔悴しきってしまった幸子は、我が子のためにもどうにか元気を取り戻さなければならぬと思うが、「気にかかる」という様態を通じて、亡き子の両親の厳しい告発に直面することで、自分はもっと苦しむべきだ、と思い直し、深い葛藤に苦しむことになる。すなわち、ここでも「気にかかる」という様態を介して、幸子は、相手から突き付けられた厳しい要求に直面し、深く葛藤することになる。だが重要な点は、こういった悲劇的な事例でなくとも、日常的なレベルで「気にかかる」という様態が、意のままにならない要素に我々を直面させることで、我々を葛藤へと導いている、ということなのである。この点を示しているのは、花子の訴えが気にかかるという事例や、部下の辛辣な批判が気にかかるという事例なのである。もちろん、このような説明が全ての葛藤の生成について当てはまるというわけではないだろう。しかし、ケアを通じて出会う他者の要求（遺族からの告発・花子の訴え・部下の批判）が気にかかってしまい——そもそも全く気にかからなければ葛藤は生じえないだろう——、葛藤に陥るというのは、一つの典型的な葛藤の生成のパターンであるように思えるのである。

こうして「気にかかる」という受動的様態は、主体に予知不能な仕方でしばしば訪れ、意のままにならない要求に主体を直面させることで、主体の決然としたあり方、専一的なあり方に揺さぶりをかける。それゆえ専一性を確保したいフランクファートにおいては、「気にかかる」という様態は、軽視されることになるのではない。

確かにフランクファートのように、自律的な行為者性や専一性を提示するためにケア概念を参照するというのは、ケアという概念に関する一つの活用の仕方ではある。しかし、ケアという新たな観点を導入したにもかかわらず、そこでは、あらかじめ、彼が信奉する専一性を備えた行為者像の型に合うように、ケアの概念が切り取られている。そして、そういった切り取られた部分、すなわち意欲というものに、ケアの核があるとフランクファートは主張するのであるが（Frankfurt 1999d, 129）、それは、かなり偏ったケア観ではないだろうか。確かに意欲というものも、ケアという事象の一部を成すものである。しかし本節で見てきたように、意欲（平たく言えば動機づけ）の統合性や意欲の分裂をそれのみで切り出してきて主題化するフランクファートの方向性には大きな問題があるのだ。そのような意欲に関する事態も、それ単独ではなく、ケアにおいて出会う諸対象との関わり（関係性）において生成するものである。その意味で、ケアにおいて出会う諸対象との関わりこそが第一義的なものではないだろうか。しかしフランクファートにおいては、ケアの関係的次元が蔑ろにされ、ケアにおいて出会う諸対象との関係の変化によってケアが揺れ動きつつ進行する、というケアの展開のありよ

うもまた見落とされているのである⁴⁶。

3. 4 ケアとその人らしさ

本節では「その人らしさ (subject's own nature)」(Frankfurt 1988b, 53) ないし「その人自身の本性 (a nature that is genuinely his)」(Frankfurt 1988e, 178) というものに関するフランクファートの捉え方を問題にし、本稿のケア・アプローチによって、フランクファートとは異なる仕方で、「その人らしさ」を捉え直したい。フランクファートは、その人らしさやその人自身の本性を自律性と結びつけて捉えており、それゆえに専一的な統合性において、その人自身のあり方が紛れもなく表現されている (authentic expressions of oneself) とされるのである (Frankfurt 2006, 8)。フランクファートからすれば、両価的葛藤から自由になってこそ、その人自身の本性 (その人らしさ) が成立しうるものであり、両価的葛藤は自己の本性からの逸脱にほかならない。「我々が大切に思う様々な事柄が未解決のまま折り合わず、衝突することによって、……自分自身と不和な状態に置かれることになる」(Frankfurt 2004, 50) のである。そして、このような両価的葛藤の状態は、「自己からの離反 (self-betrayal) をもたらし」(Frankfurt 1999b, 99)、また「自己からの離反を含意する」(Frankfurt 1999d, 139, n9)。ここには、あくまでも意欲における専一的な統合性においてこそ、自己の本性——ある人をその当の人物たらしめているもの——が見いだされる、というフランクファートの基本的な考えが表現されているのである。

しかしながらこのような自己の本性 (その人らしさ) についての考えはどれほど妥当性をもっているのだろうか。私は、フランクファートの考えに反して、自己の本性が、専一的な統合性と結びつく必要はないと考える。それでは、その人らしさといった自己に関わる問題は、本稿の関係的一動的なケア・アプローチではどのように捉え直されるのか。

私は、その人らしさの問題を、意欲の専一的な統合性 (両価的葛藤の不在) と切り離して論じるべきだと考える。ケアにおいて、その人らしさが見てとられるという点には賛同しつつも、ケアの意欲の次元においてよりも、むしろケアの関係的次

⁴⁶ 我々は、2. 2で、フランクファートが「大切に思う」という水準でのケアに議論を集中させている点を見た。さらに、彼は、「大切に思う」という仕方で限定されたケアに関して、その核となる特徴を意欲に見だし、その意欲の階層的構造に、ケアの本質を見てとる。ブラットマンが的確に指摘しているように、こうしてフランクファートのケア論は、基本的には「欲求の階層的構造としてのケアのモデル」(Bratman 2006, 85) に至ったと言える。

元において、その人らしさが見てとられるという考え方を支持したいと思う。確かにケアに意欲の必然性が伴うことにおいて、その人らしさが見てとられるという側面（ルターの事例）もあるだろう。しかし、自分がケアしている相手や、ケアにおいて出会う人たちから、何らかの重大な要求を突きつけられたときに動揺する、ということにおいて、その人らしさが見てとられるという方向でも考えられるのではないか。これこそがフランクファートが否定している可能性、また見落とししている可能性なのである。

まずは幸子の事例を考察することによって、その人らしさというものが、専一性と結びつく必要はないという点を確認したい。幸子は（他の親の）子供を轢き死亡させてしまい、加害者として果たすべき役割と、母親として自分の幼い子たちに対して果たすべき役割との間で深い葛藤に陥る。ここでは、葛藤についてのフランクファートの記述に従い、両価的葛藤を特徴づける二階の関与的態度における葛藤を構成することもできる。すなわち、亡くなった子や、絶望のどん底にある親の気持ちを忘れそうになったときは、自分の犯してしまった罪の重さを自覚すべきだという気持ちを維持させるような二階の関与的態度があるだろう。また他方で、自分の子供たちを不安にさせないように、元気な姿を見せたいという気持ちを高めるような二階の関与的態度もあるだろう。自分の罪を自覚し、自責の念に苛まれることは、幸子を憔悴させるから、やはり子供たちの世話に影響をもたらさずにはおかない。そのため、亡くなった子や遺族へのケアと、我が子へのケアの間で揺れ動き両価的葛藤が引き起こされる。しかしながら、ここでは、このような葛藤を抱えているということ自体が、幸子がどのような人物であるか、ということに関して重大な事実を告げており、幸子という人物の自己の表現になっている可能性があるのではないだろうか。そうだとすれば幸子は両価的葛藤という状態において、自己から離反しているのだと考える必要はない。むしろまさに、「子供を轢いて死亡させてしまう」という深刻な事態を招き、亡き子の両親から激しい非難を受けているとき、そのような葛藤に陥るということ自体が、幸子にとって自然であり、幸子らしいあり方を紛れもなく表現していると理解することもできるだろう。

もう少し丁寧に、この可能性を見ていこう。幸子は自責の念に苛まれることで生気を失い、ひどくやつれてしまうかもしれない。その姿を見れば、「幸子はすっかり変わってしまった」と思うかもしれない。しかしながら、幸子をよく知る人なら、誰にでも思い遣りがあった彼女のこれまでのあり方（来歴）を思い出し、将来のある幼い子供の命を奪ってしまったということに、計り知れないショックを受けるのは、彼女にとって自然なこと（彼女らしいこと）であると考えられるかもしれない。また、親としての役割を立派に果たしてきた、という彼女のこれまでのあり方を思い出し、子供たちに不安を与えないように元気な姿を見せたいと思うのは、彼女にとって自然なことだと理解するだろう。幸子に対するそういった理解からすれば、

加害者として果たすべき役割と、親として幼い子たちに対して果たすべき役割の間で揺れ動き葛藤に陥るということは、彼女のこれまでのあり方の延長線上に理解できることであり、それゆえ極めて彼女らしいことだと認めることができる。またその葛藤においてこそ、彼女らしさは維持されている、とも言えるのではないだろうか。

専一的な統合性においてではなく葛藤において、彼女らしさが維持されうるという点は、このような重大な事故を起こしておきながら、彼女が全く葛藤に陥らず、事故以前と同様に、我が子へのケアに集中するという場合を仮定してみれば、明確になるだろう。幸子は、自分がもたらした重大な事態にそぐわない形で、これまでと変わらず（自分の）子供たちのケアへと専一的に関わる。子供たちを幼稚園に元気に送り出し、子供たちが帰ってくると、一緒に公園に遊びに出かけたり、その後、夕食の買い物を楽しんだりする。また週末には家族で子供の好きなところに遊びに行行って楽しいひと時を送る。このように、「子供を轢き、死亡させた」という深刻な事態が全く気にかからない様子で、以前通りに幼い子供たちに明るく、そして陽気に振る舞うとすれば、「これだけのことをしておきながら、全く意に介さないとは、幸子はどうかしてしまった。幸子はすっかり変わってしまった」と、彼女をよく知る人たちは考えるだろう。幸子は誰にでも思い遣りのある人物であったことを踏まえると、命を落とした子の無念さや、奈落の底に落とされた両親からの告発にも動じず、全く平然としているという事態の方が、幸子が自己を見失っている状態だと言えるのではないだろうか。フランクファートは意欲の統合性（専一性）の内に真正の自己を見てとるのだが、幸子の事例のように、意欲の統合性は、その人らしさを保証しない。むしろ場合によってはその人らしさを掘り崩すのである。

こういった点は、何も幸子のように葛藤が深いケースのみならず、太郎の事例のような日常的葛藤に関してもまた当てはまることであろう。太郎は仕事が繁忙期に突入し、必ず期限（納期）を守らなければならない仕事ができてしまった。そこで、休日も返上で仕事漬けにならない限りその期限には間に合いそうもない。太郎は仕事に関するそういった状況の変化——期限が迫っている——に応じて、より仕事に没頭するように促される。しかし、また他方で、花子がそのしわ寄せで厳しい状況に置かれるようになった——例えば、下の子の夜泣きもひどいの、ろくに休めず幸子は疲れ果ててしまった——という状況の変化に応じて、花子の過労を和らげるような何らかの対処をするようにも促される。こうして、仕事を大切に思う気持ちと、花子を大切に思う気持ちの間で揺れ動き、太郎は葛藤に苦しむ。しかし、仕事に関わる状況と花子に関わる状況が、ともに厳しくなってしまった、という状況の変化を踏まえれば、まさに葛藤に苦しむあり方は、それまでの太郎のあり方、すなわち仕事と花子の両方を同等に大切に思うというあり方の延長線上に、理解できるだろう。それゆえ、その葛藤的なあり方を、太郎らしいあり方や太郎と

いう人物の自己の表現として理解することもできるのである。

こういった事例を踏まえて確認できる重要な点は、その人らしさ——ある人を当の人物たらしめている事柄——というものは、単にその人の意欲的態度の同一性の内ではなく、状況の変化に連動したその人の態度の揺れ動きの内にも見てとることができる、という点である。幸子のケースで言えば、(他の親の)子を轢くという行為によって状況が大きく変化したのであり、その重大な変化を感知する仕方では幸子は変容したのである。そしてその変容は、幸子にとって自然な、彼女らしい仕方での変容なのである。それゆえ幸子のあり方の変化(深い葛藤)においてこそ、幸子という人物の自己の本性は表現されていると考えることもできる。

それにたいして、フランクファートが、その人らしさということに関して重視するのは、あくまでも意欲のレベル(動機づけのレベル)での統合性である。3. 1で見たように彼は、一階の欲求に統合性をもたせるために、二階の関与的態度を導入する。しかし、二階の関与を導入して一階の欲求に統合性をもたせようとしても、今度は二階の関与的態度同士——例えば、仕事に没頭したいという気持ちに従おうとする態度と、家事をきちんとこなしたいという欲求に従おうとする態度——が衝突してしまい、統合化が妨げられる。そこでさらに二階の関与的態度における衝突(意欲の分裂)を回避するために、「そうするように自分を仕向けざるをえない」という意欲の必然性によって、意欲の統合的状态に至らなければならない、と考えたのであった(3. 2)。しかしながら、意欲の必然性によってもたらされる統合性は、状況が変化してもその変化に抗い維持される様態であるとされる。そのため、意欲の必然性に重点をおくと、状況が変動する中での主体の変化の内に、その人らしさを見いだすという発想は希薄なものになってしまう。こういった意欲の統合性を最重視する方向性は、葛藤をその文脈から切り離して意欲の次元で専ら考えるという、前節で見た彼の方向性と表裏一体である。

だが我々は、その人らしさというものに関しても、ケアにおける意欲の次元より、むしろケアにおける関係的次元に注目して考える必要があるだろう。というのも、ケア対象との具体的関係、ケア対象を取り巻く人たちとの具体的関係、また時間的推移におけるそういった具体的関係の変化等を考慮することで、主体が置かれている具体的文脈をあくまでも踏まえて、その人らしいあり方を捉えることができるからである。それゆえケアの関係的・動的アプローチは、(具体的文脈をあまり重視しない)意欲重視のアプローチより、その人らしさということについてより多くのことを教えてくれると期待できるのである。この点を見ていこう。

幸子の事例で再び考えよう。フランクファートのように幸子のあり方を意欲のレベルで見るならば、そこには遺族へのケアに結びついた意欲が生じ、家族へのケアと結びついた意欲と衝突する。そしてフランクファートの考えに従えば、意欲の統合性が不成立のため、その人らしさやその人自身の本性もまた成立していな

いということになる。しかしながら、我々は、ケアの関係的一動的アプローチによって、その人らしさを、その主体の意欲（欲求に關与する動機づけ）として解するのではなく、その主体が関わっている対象、またその対象を取り巻く人たちとの関係性の（変化の）内で、理解することができる。それゆえ、ケアを通して出会う人たちの呼び求めや訴えに直面し関係に変動が生じたとき、主体の態度が変容するのは、その人自身にとって一つの当然の成り行きとして理解することもできるのである。つまり部下からの辛辣な批判（「あなたの企画は社員のやる気を削いでいる」）、妻からの切実な訴え（「仕事、仕事っていい加減にしてほしい」）、遺族からの厳しい非難（「お前のせいで私たちは絶望のどん底にいる」）、こういったものに直面し意欲の統合性が崩れるのは、その人にとってごく自然なこと、その人らしいことだと解釈することもできる⁴⁷。

また、このようなケアの関係的次元から見ていく際、当然でありながらも極めて重要なのは、ケアされる対象が人の場合、それは同時にケアする主体でもある、という点である。つまり太郎によってケアされる花子自身も、ケアする主体なのであり、幸子によってケアされる遺族もまた彼ら自身、ケアする主体なのである。もち

⁴⁷ 我々が、ある人物のその人らしさを理解するのは、単にその人の意欲的態度によって、というよりは、その人がどういう状況において、どういう態度をもっていたかということによってである。具体的文脈に言及することなく、専ら意欲に言及しても、その人らしさや、その人がどういう人物であるか、その内実はあまり理解できない。単に「仕事に没頭し続けている」ということだけでは、その人の自己の本性（その人らしさ）はそれ程、明らかではないだろう。ルターの事例のように意欲が固定化している場合も、どのような具体的文脈——ケア対象との具体的関係、ケア対象を取り巻く人たちとの具体的関係、また時間的推移における、そういった具体的関係の変化等を含む——において、その意欲が固定化されているかを踏まえないければ、ルターらしさというのは、よく分からないものになってしまうだろう。

そもそも意欲の必然性自体が、ケア対象との関係性や、それを取り巻く様々な人たちとの関係性の中で、徐々に発現していくものであり、最初からその人に備わっていたものではない。例えばルターの事例で考えるならば、父親の期待に依って、大学の法学部に入学して、法律を学んでいるときのルターには、聖書に書かれている言葉を解き明かし、その教えを民衆に説くということは、必然性を伴ったものとして自覚されていないだろう。それはあくまでも聖書との関わり（関係）を深くしていく過程で、育まれていくものにほかならない。例えば、修道院での学問の鍛錬、修道院指導者としての活動、説教活動を通じての民衆たちとの生きた交流、こういったことを通して、「人々の魂の救いのために、自分が求められていることは何か」ということについての理解や、「また贖宥状（免罪符）を用いて誤った仕方で民衆を導く教会のやり方に対して、どう自分は立ち向かっていくのか」ということについての理解がもたらされる。こうした具体的なプロセスを経て、ルターは「聖書を忠実に読み、伝える」ということに決意を固めていくのである。だから意欲の必然性それ自体よりも、それに至る具体的なプロセスにおいてこそ、ルターその人らしさが、発現し表現されているとも考えられる。（なおルターに関する歴史的記述に関しては徳善（2012）に負う。）

ろん、仕事へのケアにおいて太郎が気にかかっている部下もまた、ケアする主体である。それゆえ、私が相手をケアするのみならず、相手もまた私をケアする、というケアの相互的な行き交いがあるだろう⁴⁸。

このケアの相互性を考慮することで、我々は状況の変動というもののより複雑な様相に着目できる。おそらく幸子が遺族からの訴えに真摯に向き合い、その謝罪が誠実に幾度となく為されたなら、幸子に対する遺族側の対応も異なってくるだろう。例えば遺族の側が幸子の窮状をも気にかける（ケアする）余裕ができたなら——それは遺族にとって容易ならざることだが——、幸子の葛藤は幾分和らぎ、以前より幸子は自分の子供たちのケアへと身が入るようになるだろう。また太郎が、花子の過労を気かけ、花子に休んでもらうように手はずを整えたなら、花子の方にもいくらか心の余裕がでてくる。そうすると今度は花子が太郎を気にかけることができるようになる。例えば花子は、太郎の仕事の大変さや緊急性を理解し、何らかの工夫をして、太郎がより仕事に没頭できるような環境作りをするかもしれない。そうして太郎の葛藤は和らぎ、仕事にもより没頭できるようになる。こういったケアの相互的なやりとりの中で、変容していく主体の一連のあり方において、その人らしさというものを考えることもできるだろう。「意欲の同一性 (volitional identity)」(Frankfurt 1999d, 137) のみに着目すると、こういった相互的なケアの行き交いによって、主体の意欲や動機づけが変容していく一連のプロセスに注目できないだけでなく、そういった変容のプロセスにおいてこそ、その人らしさが表現されるという当然の事実注目できなくなってしまうだろう。それにたいして本稿のケアの関係的一動的アプローチはまさにこの当然の事実を尊重することができ、時間的推移の中でケアが展開することによって、その人らしさというものが、さらなるエピソードとともに新たなニュアンスを纏っていくことに注目できるのである。そうして我々は、ケア対象との関係の変化や、ケア対象を取り巻く人たちとの関係の変化に連動する、起伏のあるものとして、その人物自身の本性（そ

⁴⁸ 幸子は亡き子の方が気にかかる（ケア）としても、幸子と亡き子との間には相互的なケアは成立していないように思える。しかし他方で、亡き子とその両親との間の場合はどうだろうか。両親が墓前で亡き子に優しく話しかけると、そこには亡き子へのケアが表現されているだろう。しかし、そこにケアの相互性は成り立つのだろうか。これは難しい問題である。一方で、もはや亡き子との相互的なやりとり（また相互的なケア）が成り立ちえないということこそが、この両親の深い悲しみを重要な仕方で形作っているように思える。しかし他方で、ふとしたときに、亡き子から話しかけられたり励まされていたりする感じがして、その親は、「亡き子から気かけられている（ケアされている）」という感じをもつかもしいない。こうした点を踏まえると、いかなる種類の相互性も成り立っていない、とも言い切れないように思えるのである。しかし、その擬似的な相互性の正体は何なのか、私にはよく分からない。こういった死者へのケアという問題の重要性を指摘していただいた一ノ瀬正樹氏に感謝する。

の人らしさ)を捉えることもできるのである。

こういった考察を踏まえて明らかになるのは、その人らしさというものは、新たなエピソードとともに再解釈されていく移行的なものだという点である。それゆえ、今後、何を・どのように・どのくらいケアするようになるのか(またケアしなくなるのか)という、のちの展開において、その人らしさは全く別の仕方では解釈されていくということも想定可能なのである。例えば幸子が遺族からの訴えを全く気にかけることなく、その訴えと真摯に向き合うことを回避し続けるならどうだろうか。その場合は、誰にも思い遣りがあったように見えた幸子の以前の印象は弱まり、「結局は幸子とは、そういった無反省な人物なのであり、それこそが幸子自身の紛れもない本性なのだ」ということになるかもしれないのである。

ここで注意すべき点として、「その人らしさ」は、「自己アイデンティティ」と直結するわけでない、という点を指摘しておきたい。自己アイデンティティは、自分がどういう人物であるかに関する本人の理解に関わる事柄である。それに対応してアイデンティティ・クライシスという状態は、自分がどういう人物か本人が分からなくなるということであり、そこでは、本人の自己理解や自己像が危機に瀕しているのである。しかし、これまで述べてきたことからすれば、そういった自己理解(自己像)の揺らぎや危機において、まさにその人らしさを見てとることができるのである。例えば太郎が、妻の花子に「あなたは妻思いのつもりでいるけれど、いつも大変になったときに何も助けてくれない。本当に自分勝手な人だ」と言われたなら、「自分はとても妻思いで家庭的な人間だ」という、太郎の自己理解や自己像は揺らぐことになる。花子は太郎のことを一番よく知っているとすれば、なおさら太郎は「もしかしたら俺は本当に自分勝手なのかもしれない」と、自信をなくすかもしれない。しかし、そういった状況で、自分のことが分からなくなるということも、太郎らしさの現れであり、それゆえ自己に対する太郎の確信(自己アイデンティティ)が揺らいでも、太郎らしさが揺らいでいるわけではないのである。むしろ、そのような花子からの異議申し立てによってアイデンティティ・クライシスに陥るということにおいてこそ、太郎らしさ——太郎という人物の自己の本性——が紛れもなく表現されていると考えることができるのである。

最後に、ここでの私の立場をいっそう明確にするために、「その人らしさ」の問題もまたケアにおける感情の次元から解き明かそうとする、ヤヴォフスカの議論に言及しておこう。先に触れたように、ヤヴォフスカは、同様の感情のパターンが継続することによって、ケアというものを捉える。すなわち、「ケアの対象が望ましい状態にあるときは、喜んだり、満足感を覚えたりする。ケアの対象が災難に見舞われたときはストレスを感じ、そのような災難をもたらした者に対して怒りを覚える。ケアがうまくいっているときには誇りに感じ、うまくいかないときには残念な気持ちになる」(Jaworska 2007, 560)。こういった感情のパターンが、短期間

ではなく一定の長い期間において同様に成立していることにおいて、ケア（大切に思う）を捉えることができるとヤヴォフスカは考える。さらに加えて彼女は、「その人らしさ」もまた、そのような同様の感情のパターンの継続において表現されていると考えるのである。

こういったヤヴォフスカの洞察は、フランクファートが専ら意欲の次元で扱っていた「その人らしさ」の問題を、感情の次元に注目することで別の角度から解明しようとした点で極めて重要なものである。しかし、同様の感情のパターンの継続性に訴えるだけでは、例えば幸子の事例における、その人らしさは捉えきれないように思える。幸子の事例で言えば、まさに全く同様の感情のパターンが見いだされることによって、「その人らしさ」が掘り崩されている、と考えることもできるからである。例えば、他の子供を轢いて死亡させたという深刻な事態を引き起こしたにもかかわらず、子供のケアに対して全く同様の気持ち（感情）でいられるということの方が、幸子らしさを掘り崩すのである。例えば幸子が子供と一緒に遊んでいるときに依然と全く同じように――何事もなかったかのように――陽気な気持ち、楽しい気持ち（感情）でいられるとしたら、どうだろうか。そこに、何ら後ろめたい感じや、「自分のせいで遺族はこのように子どもと楽しい時間を過ごせない」という自責の念からくる）胸がつかえるような苦しみが、全く入りこまなかったらどうだろうか。幸子をよく知る人は「（他の親の）子の命を奪っておきながら、全く平然として、以前と何ら変わらず子育てを楽しい気持ち（感情）でやっているとは、幸子は変わってしまったようだ」と思うかもしれないのである。

重要な点は、同様の感情のパターンの継続性に訴えてしまうと、時間的推移における、ケア対象やケア対象を取り巻く人々の関係性の変化という文脈の中で起こる感情のパターンの変化において、「その人らしさ」というものを見てとることができなくなってしまう点にある。この論点を補強するために、辛辣な批判を述べた部下に対する、太郎の感情の変化を考えよう。太郎は、部下に辛辣な批判を言われる前は、その部下の仕事がうまくいけば心から喜び、うまくいかなかった場合は残念に感じる、といったような感情のパターンを長期間にわたってもっており、その部下を大切に思っていた。しかし、その部下が辛辣な批判を陰でしていたことを知って以降、太郎は、その部下の成功に対して素直に喜べなくなり、また部下が失敗すると、ひそかな喜びを感じるようになったとしよう。ヤヴォフスカのアプローチでは、その部下に関する同様の感情のパターンが見られなくなるので、太郎らしさは（部分的に）失われていることになる。しかし、ケアの関係的次元を重視する本稿のアプローチによれば、まさにそのような感情のパターンが変化してく一連のありようにおいて、太郎らしさが表現されている、という可能性も考慮できるのである。例えば、太郎はこれまでその部下のことを大事に育ててきたが、それにもかかわらず、太郎に対する部下の批判は極めて身勝手なものであり、太郎を貶める内

容であったとする。そのような場合、部下に対する感情のパターンが複雑なものに変化するというのは、太郎にとって自然なことであり、太郎らしいことである、と考えることもできるだろう。つまり、関係的一動的アプローチは、太郎と部下との関係性の変化に着目するので、両者の間に起こった重大な出来事（部下から太郎への辛辣な批判）を踏まえた上で、太郎の来歴を考慮しつつ、部下に対する太郎の感情の変化が太郎らしいかどうかを考えることができる。こうして太郎の感情のパターンの変化を、太郎の辛辣な批判によって生じたケア対象（部下）との関係的な変化の文脈に位置づけ直すことによって、「関係性が変化したのだから、それを感知する仕方でも感情のパターンも変化するのだから当然だ」という形で、そこにも太郎らしさを見いだすことを可能にするのである⁴⁹。

⁴⁹ 感情の次元に注目して、「その人らしさ」の問題に取り組んでいる他の論者としてタポレットを挙げることができる。しかし、感情が変化していく一連の行為者のありように「その人らしさ」が表現されうる、という発想は、タポレットにも見られない（Tappolet 2006, 45-59）。

第4章 ケア・計画・方針

第三章では、関係的一動的なケア・アプローチの立場から、フランクファートの考察を批判的に検討することを通して、フランクファートとは異なる仕方で、葛藤や「その人らしさ」というものを捉え直した。本章では、本稿の（行為者性に関する）「ケアの観点からのアプローチ」が、行為論の主流である「意図の観点からのアプローチ」に対してどのような重要な意義をもっているのかを考えたいと思う。その際、意図・アプローチを最も強力に推進しているブラットマンの議論を念頭に置くことになる。

とりわけ私が取り組みたい問題は、行為者性に関わる事象——行為者の実際のありよう——をどう捉え記述するか、という行為者性の「記述的な面」(Bratman 1987, 15, 18) に関する問題である。ケア・アプローチは、行為者性の記述的側面（行為者性をどう記述するか）に関して、意図・アプローチの不備を補完することができるのではないかと私は考えるのである。すなわち、行為者性に関わる事象を記述する上で、計画や方針の観点は極めて重要であるものの、そのみではなお不十分であり、さらにケアの観点を導入することによって、その事象をよりよく記述できる。むしろ、ケア・アプローチによって行為者性に関する記述が万全になる、ということではない。また計画や方針といった行為論における主概念の重要性が二次的だ、ということでもない。ケア・アプローチと意図・アプローチを対立させてその優越を論じるよりは、意図・アプローチの重要な成果を取り入れる形で、ケア・アプローチを発展させることの方が望ましいだろう。そこで、これまでの意図・アプローチによって豊かに捉えられた「記述的な側面」を踏まえつつ、ケアの観点に訴えることで、さらにそれを充実させることができることを示したい。その基本的な発想は、ケアという文脈の中で、計画・方針といったものを位置づけた方が、より現実に即した行為者像を提示できるのではないか、というものである。こうした発想の下、ケアというものが、現代行為論において重視されている未来指向的意図——「計画」や「方針」——とどう関連し、また結びつくのか、という問題を考察したい。このようにケア・アプローチを発展させることで、ケアの考察の内に意図・アプローチの成果を取り入れつつ、同時に意図・アプローチとは異なる仕方で、通時的な行為者性の記述的側面に関して考察を前進させることができると思う。

具体的には以下のように議論を進める。まず、「我々は計画や方針をもつことにおいて時間幅をもつ行為者性を有する」というブラットマンの根本的な洞察を踏まえる。とりわけ、計画・方針の眼目が、複雑な活動を遂行するために前もって見通しをよくする点にあるがゆえに、計画・方針には再考慮や再検討に抵抗する傾向

性があるということに注目する（4. 1）。次に、ケアが含む「気にかかる」という受動的契機が、再考慮や再検討を促すということを一つの基本的特徴とするため、再考慮や再検討に抵抗する働きをする計画・方針からケアは区別されなければならないことを示す。その上で、ケアの関係的一動的な観点から、「ケアが含む「気にかかる」ということを端緒にして、予めの計画・方針がどのように考え直され、新たな計画・方針が生成していくのか」ということを分析する（4. 2）⁵⁰。

4. 1 計画・方針

ケアの文脈に計画・方針がどう位置づけられるか、という問題を考察するためにも、そもそも計画・方針といったものがどのように捉えられているか、ということが問題になる。ここでは意図・アプローチを最も強力に推し進めたブラットマンの議論を踏まえることで、計画・方針の基本的特徴を押さえよう。ブラットマンは方針よりも計画をいっそう基本的なものとし、計画を拡張したものとして方針を捉えるので（Bratman 1989, 451-466）、計画の性格から押さえることにしたい。

まず注目すべきは、計画をもつこと（未来指向的意図）が、計画されている事柄を実行することへのコミットメント、すなわち実行へのコミットメントを含むという点である⁵¹。ただしブラットマンが注意深く述べるように、ここでの実行へのコミットメントは、計画をもてば、必ずその主体はその計画を実行に移そうとする、といった強い意味でのコミットメントではない。計画を考え直したり、計画を思いとどまったりすることもありうるものであり、計画は変更可能なものである。しかし、それでも計画は、特別な事情がない限りは、その実行を考え直すこと（再考慮）や思いとどまることに抵抗し、それを実行に移そうとするような実行へのコミットメントを伴うのである（Bratman 1987, 15-18）。

ブラットマンはこの点を欲求との対比で説明している。例えば次郎が「論文を書きたい」と思っていて、その機会があると分かっているにもかかわらず、彼は論文を書かないか

⁵⁰ もちろん、2. 2で見たように「我々は時間幅をもつ行為者性を有する」という洞察はフランクファートにおいても同様に見いだされるものである。

⁵¹ ここで「実行へのコミットメント」と言っているものは、ブラットマンの用語では正確には「意欲におけるコミットメント」（volitional commitment）だが、フランクファートの「意欲」という用語との混同を避けるため、単に「実行へのコミットメント」と呼びたい。ブラットマンによれば、ここでの意欲におけるコミットメントとは、「意図と行為の関係に関するもの」（Bratman 1987, 15）である。それゆえ、少なくともこの場面ではフランクファートのように欲求への関与的態度を問題にしているのではない。その点を踏まえても「実行へのコミットメント」と表す方が誤解を招かないと判断した。

もしれない。その人は、「しばらく休養したい」と思ってもいて、それと比較考量することで、論文を書くことを控えるということもあるからである。つまり論文を書きたいと思っても論文を書こうという決断までは下してないかもしれない。したがって特別な事情のあるなしにかかわらず、ある欲求をもったからといって、その人がそれを実行する構えをもっているとはかぎらないのである。それにたいして、「論文を書こう」という計画を形成している場合は、その人は論文を書くことに決めているのであり、出来事が通常の経過をたどれば、その意図を実行に移すこと（もしくは移そうと試みること）になる。その意味で計画をもつことは実行へのコミットメントを含むのに対し、（単なる）欲求は実行へのコミットメントを含まないのである（*ibid.*, 15-20）。

計画が実行へのコミットメントを含むという論点に関連する重要な点として、我々は相反する計画を基本的にもつことができない、という点が挙げられる。欲求に関しては、二つの欲求が相反することが本人に明らかな場合でも、衝突するそれら二つの欲求を同時にもつことができる。他方で、計画に関しては、二つの計画が相反することを本人が分かっている場合は、その二つの計画を同時にもつことはできない。例えば、「論文を書きたい」という欲求と、「（それとまさに同じ時期に）完全に休養して論文のことは考えたくない」という欲求は、たとえ両方の実行が相容れないと分かっているとしても、同時にもつことができるだろう。しかし「論文を書く」という計画をもっているならば、それと相容れない「（その同じ時期に）休養してそれ以外のことをする」という計画は、（本人が両方の実行が相容れないと分かっているかぎり）もつことはできないだろう。このことは計画をもつということが、欲求よりもその内容の実行により強く結びついているということを示唆している。つまり「～しよう」という実行への強い構えを計画はもつから、その意図内容の実行を阻害することが明らかな、別のことに 대해서는 計画をもつことはできないのである（*ibid.*, 30-32）⁵²。

ブラットマンは、このような実行へのコミットメントは、実践的推論のありようにも大きく影響すると考える。ここでの実行へのコミットメントは、実行に移されるまで、特別な事情がない限り計画は再考慮されたり断念されたりしないという意味で、持続的なもの——すなわち「慣性ないし安定性をもつ」もの（*ibid.*, 16）——であろう。そして、このように実行へのコミットメントが持続的なものだという点は、その実行に向けて、実践的推論が一定の期間にわたって方向づけられると

⁵² だから「これから論文を書く計画だ。だが、これから論文には取り組まないで休養をとる計画でもある」という言明は意味をなさない。他方、欲求は、そのような実行の構えを要請しないから、「論文を書きたい気持ちはある。だが論文には取り組まないで休養を取りたい気持ちもまたある」という言明は意味を成すのである。

いうことを意味する。例えば、次郎は「Aというテーマについて論文を書く」という計画を形成したなら、次郎はそうすることに決めたのであり、あくまでもその計画を前提にした上で、その論文の内容や構想に関して推論をすることになる。ここで重要な点は、実践的推論は予めの計画の枠組みの中で行われるようになるという点である。こうして計画の実行に関連する事柄を考慮し、それに関連しない事柄に関しては考慮しないという仕方では実践的推論は方向づけられる。例えば「この章でPという問題を扱おうか、それともQという問題を扱おうか」という比較考量が為されるのも、あくまでも「Aというテーマに関して論文を書く」という計画の背景の下で、なのである。

それでは、そもそも計画をもつことの眼目はどこにあるのだろうか。ブラットマンによれば、計画は、複雑な個人的・社会的活動を達成する際に、あらかじめ活動を調整するのに役に立つ。つまりあらかじめ計画を立て熟慮しておくことで、複雑な活動の見通しをよくし、それによって他の活動との調整を容易にしたり、その活動内部の調整を容易にしたりすることができるのである。我々は時間・資源・知性において限界がある行為者であるがゆえに、前もって計画を決め熟慮しておくことで、複雑な個人的・社会的活動を達成できるようになる (ibid., 11-12)。

こういった点から、なぜ計画が再考慮に抵抗するのかを理解できるだろう。計画をしてあることを為すことに決めたにもかかわらず、その都度の状況で計画を取りやめようかどうかと迷っていたなら、複雑な活動を遂行するために見通しをよくしておく、という計画の眼目が失われてしまう。先述したように計画は、再考慮されたり、断念されたりする可能性があることをブラットマンは認めている。しかし肝心な点は、計画をもち、あることを実行することに決めたなら、それをまさに覆さないことによって、計画は今後の見通しを与え、推論と活動を通時的に一貫した仕方ですべて計画されている事柄に沿った仕方ですべて導くことができる、ということなのである。

ブラットマンは、こういった計画についての考察に基づき、さらに方針という概念を導入する。そこでもやはり強調されるのが、複数の時点にまたがって実践的推論と行為を一貫した仕方で行うという性格である。方針は、その主体の生活において繰り返し起こると考えられる種類の状況に関わる (ibid., 87-91)。例えば「毎朝、朝食をきちんと食べる」「毎日二時間、読書をする」「上司には、文句を言われても歯向かわないようにする」といった様々なものが考えられる。方針の眼目もまた、計画の眼目に類似しており、その眼目は、あるタイプの状況でどうするかを決めておくことで、状況の見通しをよくし複雑な活動を調整することを容易にする、という点にある。むしろ方針は、変更不可能なものではない。その方針を考え直したり、断念したり、またある状況では適用を控えたりすることがある。しかし、ここでも重要なのは、複雑な活動の調整が容易になるためには、方針が安定性

をもたなければならない、ということである。つまり計画と同様、方針は再考慮に抵抗する傾向性をもたなければならない、その眼目は失われることになる。そして方針は安定性もつことで、実践的推論と行為の通時的な枠組みになるのである（Bratman 1989, 456-467）。例えば「上司には、文句を言われても歯向かわない」という方針をもっているなら、上司がちょっとした理不尽なクレームをつけてきたとしても「断固拒否すべきか、または、そのクレームの理不尽さを丁寧に説明した上で拒否すべきか、それとも受け流すべきか」を迷う必要はなく、その方針を前提にして受け流した上で「今回の理不尽な事件を他の（もっと上の）上司に相談するか、それとも話すのは妻だけにしておいて愚痴を聞いてもらうか」を比較考量できるのである。方針がこうした働きを持続的に果たすことで、上司をめぐる、その人の実践的推論と行為は一貫した仕方で通時的に方向づけられることになるのである。

さらにブラットマンは、フランクファートの高階の態度のアイデアを引き継ぐことで自らの計画理論を拡張する。そして、フランクファートが行為論に新たに持ち込んだ問題、すなわち、ある人をその当の人物たらしめるような「その人らしさ」ないし「その人自身の本性」はどのように捉えられるのか、という問題に取り組む。ただしその際、ブラットマンは「その人らしさ」というものを、その人がとる主体的な立場として解釈し、行為者の自己統制による通時的な一貫性において、その人自身の主体的立場が見てとられると考えるようになる（Bratman 2007a, 21-46）。

そしてブラットマンが、その人自身の主体的立場を構成するような通時的な一貫性を捉える上で最重視するのが、「自己統御的方针（self-governing policy）」と呼ばれる欲求に対する二階の方針である。先に指摘したように、ブラットマンによれば、方針は、主体の生活において一回きりではなく、繰り返し、反復して起こりうる状況に関わっている（Bratman 1987, 87-91）。ただし通常の方針が、「行為」を対象とするのに対し、ここでの二階の方針は「欲求」を対象とする点に注意されたい。我々は多様な欲求をもつため、自分が支持しているあり方とは相容れない欲求にさらされる危険性をもつのである（Bratman 2007c, 217-220）。彼は、その人自身の主体的立場というものを構成するような通時的な一貫性を確保するためには、単に行為のみならず、自分の欲求＝動機づけに対しても方針をもつ必要があると主張する。この二階の方針は、ある欲求に対してどのような役割をもたせるかについての方針であり、「行為を導く熟慮（比較考量）において、ある欲求を正当化理由として扱う」という内容をもっている（Bratman 2007a, 32-42）。例えば、健康への欲求に対して高階の方針をもつ人とは、「健康への欲求に対立する欲求「暴飲暴食をしたい」が生じてきたときはいつでも繰り返し、比較考量において、健康への欲求を、行為を導き、正当化する理由として扱おう」と考える人である。

ここでは高階の態度に方針という持続する態度をもつてくることによって、自分の欲求をある一時点ではなく、一定の継続した期間にわたって合理的に制御す

るメカニズムが導入されている。葛藤が生じたときに一度きりでなく、葛藤が生じるたびごとに、健康に対する欲求は、比較考量において他の欲求を差し置いて優先され、行為を導く。こうして、ブラットマンは、行為に対する一階の計画・方針という道具立てに加えて、欲求に関する二階の方針を導入することで、通時的な一貫性をより強化して捉え、そこに行為者当人の主体的立場が見てとられると考えるのである。(こういった発想は、フランクファートの階層モデルを引き継いでおり、それゆえ3. 2で見たフランクファートの二階の関与的態度に極めて類似したものである。)

さてこの節で見てきた、行為者性に関するブラットマンの基本的な捉え方に対して、本稿のケア・アプローチはどう挑むことができるのだろうか。

4. 2 ケアの文脈における計画・方針

ブラットマンはある箇所、フランクファートのケアに関して、それが自己統御的な準—方針 (self-governing quasi-policy)、すなわち自己統御的な方針に準ずるものでありうると述べている (Bratman 2007a, 44 n.60)。フランクファートのケアに関する限り、その指摘は的確なものであると思う。フランクファートは、欲求への二階の関与的態度にケアの核心を見てとる以上、そこでのケアは、同じく欲求に対する高階の態度である、自己統御的方针ときわめて類似している。

そして、「フランクファートのケアは自己統御的方针に準ずるものだ」というブラットマンの指摘は、次のことを示唆している点で重要である。すなわち、ケアという観点を導入しても、二階の関与的態度という意欲の次元を強調するだけならば、意図・アプローチを重要な仕方で補完するようなものにはなりえない。もちろん、フランクファートのように意欲の統合性を分析するためにケアという観点を参照するというのは、ケア概念の一つの活用の仕方なのかもしれない。しかし、その場合は、計画・方針、また自己統御的方针といった拡張された意図概念に加えて、さらにケア概念を導入することのポイントがどこにあるのかは不明瞭になってしまう。というのも自己統御的方针もまた、欲求に対する二階の関与的態度の一種だからである。それゆえ、二階の関与的態度をケアの中心の特徴と捉えてしまえば、ケアは未来指向的意図の一種、自己統御的方针に類するものと見なされてしまうのである。そして、ブラットマン自身もまた、フランクファートのケア概念に関するコメントとは別に、ケアについて自らの考え方を次のように述べている。

ケアに関する私自身の考えを言うならば、ある要件を、正当化するものとして扱う、確定した意図のようなコミットメントを含むように思われる。

それでは、こういった、ケアを未来指向的意図（またはそれを拡張した概念）の一種とする見解に対して、どのような異議申し立てをすることができるのか。私の考えはこうである。ケアの関係的次元を重視するならば、ケアは計画や方針の一種としてではなく別のものとして捉えることができる。そして、ケアを計画・方針と区別した上で、ケアがどう計画・方針と結びつくのかを考えた方が、人間の行為者性に関わる事象についてより肌理の細かい記述ができる。

ここで「気にかかる」という様態に注目することが再び重要になってくる。2.3で指摘したように、ケアは、どれだけ進行しても、「気にかかる」という受動的契機を抜き難くはらんでいるのであった。例えば太郎が花子を進んで気にかける段階や、さらに大切に思う段階に至ったときもなお、花子に関連する様々なこと、例えば花子の浮かない表情や花子の疲れた様子が気にかかるのである。また太郎が、自分の任務にやりがいを感じ、仕事を大切に思える段階に到達していても、その仕事に関連する様々なこと、例えば部下から嫌われていないかどうかなどが気にかかるのである。こうして、ケアにおいては「気にかかる」ということが常に働いているのであり、その意味で「気にかかる」ということはケアにおける一つの核となる要素なのである。

さらに付け加えれば、(2.3で見たように)「気にかかる」という受動的様態は、主体の理解をはみでる事柄に主体を繋ぎ止める働きをする。その働きによって、主体をしばしば動揺させるような未知の局面に出会わせ、対象との関わり方を再考するよう主体に促す。常にでないにせよ、そのような働きをしまう点が重要なのであった。そして留意すべきは、このような対象への関わり方についての再考が、対象に関連する計画・方針についての再考にもつながるという点である。太郎は、部下からの辛辣な批判がどうしても気にかかり、事業計画に関して部分的に再考を促されるかもしれない。また、疲労困憊した花子の訴えが気にかかり、「仕事を期限通りに完成させる」という計画への取り組みや、「仕事で多忙なときは花子に家事を全部任せる」という方針を考え直すように促されるかもしれない。こうして「気にかかる」という様態は、その主体にとって慣れ親しんだ要素のみならず、未知の要素——それは、ときには、その主体がすぐには呑み込めない異質な要素であったり、主体を動揺させるような要素であったりする——に対するアクセスも備えており、それゆえに、予めの計画・方針に重大な影響を及ぼす効果をもつことがある。そこでは、予めの計画・方針によって設定された枠組みは、揺さぶられることになるだろう。

⁵³ ただしこの見解を支持する議論が積極的に展開されているわけではない。

このように考えると、(前節でみたように) 計画や方針は、再考慮や再検討に抵抗することを基本的特徴とするのに対し、ケアに抜きがたく含まれる「気にかかる」という様態は、計画や方針の再考慮や再検討を促すことを一つの基本的特徴としているように思える。むしろ、計画・方針が、再考慮や再検討の機会を常に奪うわけではないように、ケアに含まれる「気にかかる」という様態も、再考慮や再検討を常に促すわけではない。すなわち、気にかかるという様態が「再考慮」に直ちに結びつくとは限らない。しかし、「気にかかったからしばし立ち止まって考えてみる」ということは、「気にかかる」という様態の一つの自然な成り行きであるとは言えるだろう⁵⁴。それゆえ「気にかかったから、しばし立ち止まり、その結果、計画や方針を考え直す(再考慮する)」ということも十分ありうることになる。

だとすると、予めの計画・方針の再考慮を(しばしば)促す働きをするケアを、再考慮に抵抗する働きをする計画・方針の一種として捉えることは、難しいように思える。別の言い方をすれば、実践的推論の枠組みに揺さぶりをかける働きを(しばしば)するケアを、実践的推論の枠組みを保持する働きをする計画・方針の一種として捉えることは難しいように思えるのである。フランクファートはケアを「大切に思う」の水準で捉え、その献身性や専一性を強調した。確かに、そのような仕方ではケアを捉えるなら、ケアもまた推論や行為の通時的な枠組みを提供するようなものとなるだろう。それゆえケアを、計画・方針の一種として捉える見方も有望なものとなる。しかしながら、本稿ではケアが不可避に含む「気にかかる」という受動的契機を重視する。そうするとそこには計画・方針の働きとは異なる(上で見てきたような)ケアの独自の性格が見いだされるのである。

しかし、ここで是非とも気をつけなければならないのは、このようにケアと計画・方針が区別できるからといって、両者を正反対なものとして捉えてはならない、ということである。ケアに含まれる「気にかかる」という様態を「再考慮を促すもの」として捉え、計画・方針を「再考慮に抵抗するもの」として捉えると、両者は対極に位置するもののように見えてくる。だが、ケアと計画・方針を相反するものとして捉えることは、あまり望ましいことではない。それはケアと計画・方針の関係性を、単なる対立関係として単純化することになりかねないからだ⁵⁵。本稿はケアの関係的一動的なアプローチを採用し、ケアや行為者のありようが対象との関係性の内で生成し展開する仕方を重視する。それゆえ、ケアと計画・方針を区別

⁵⁴ ブラットマンは、計画・方針が再考慮や再検討を許容すると述べるが(Bratman 1987, 62-64)、計画・方針が再考慮・再検討を促すとまでは言っていない。そこに「気にかかる」の働きがしばしば関与している、と私は考えたいのである。

⁵⁵ 私は2. 4で能動と受動を単なる対立関係として見る考え方を退けた。ここでも「ケアは受動的で、計画・方針は能動的だ」という仕方で、両者を単なる対立関係として見る考え方を退ける必要がある。

しながらも、それらが結びついて展開する一連の過程に注目することができる。ある時点では、「気にかかる」という様態が、主体を未知の局面に出会わせ、動揺させることで、予めの計画（方針）の円滑な遂行を妨げるかもしれない。その意味でケアと計画（方針）とは対立しているかもしれない。しかし、その後の時点では、その気にかかったことが端緒になって、新たな計画・方針が生成したり、予めの計画・方針が重要な仕方に変容したりする可能性がある。それゆえ「気にかかる」という様態が計画・方針の新たな生成（変容）に貢献するという見方を私は支持したいのである。

こういった点を見ていく前に、まず、ケアに含まれる「気にかかる」という受動的契機をもう少し丁寧に捉え直そう。とりわけ、「気にかかる」という様態は重大なことを予感させるだけでなく、その重大なことは何かを探るような動きを主体にもたらしることがある点に注目したい。例えば、花子の不機嫌そうな表情に注意をとられ、それが気にかかっているとき、その不機嫌さが何を意味するかということに関して、太郎は明確に把握しているわけではないかもしれない。何か重大なことがあると漠然と感じとっているだけかもしれない⁵⁶。しかしそういった花子の様子に太郎は戸惑いつつも、まさに気にかかるからこそ、漠然とした感知に満足することなく、その不機嫌そうな表情が何を意味するのか探るように促される。また部下からの辛辣な批判が気にかかる場合も同様に考えられるだろう。やはり太郎はその辛辣な批判が何を意味するのか、それが気にかかるからこそ、その真意を探るように促されるのである。

むろん、以上のことは、「気にかかる」ということにおける（対象や状況に関する）了解が、常に漠然としたものだということを意味しているわけではない。例えば騒音が気にかかって仕方がない、という場合、うるさい感じがする、というのではなく、隣人のテレビが大音量でうるさいと判然とした形で感じられるのである。しかし重要な点は、「気にかかる」ということが、こういった明瞭な把握に先立って、漠然とした感知のレベルでも働きうる点である。そして、気にかかるという様態は、漠然とした感知しか成り立っていない場合は、「何か重大なことが起こって

⁵⁶ ケアが、価値判断という明示的な判断のみならず、価値（重大なもの）の感知（felt evaluation）を含むという点は、B・ヘルムによっても指摘されている（Helm 2010, 57-66）。またケアの倫理を論じるノディングズもまた、他者へのケアという文脈ではあるが、命題的な知識に先立つ感受や感知の重要性を強調している（Noddings 1984, 30-51）。私自身、感知のレベルの重要性に気づかされたのはノディングズの議論を通じてである。この点に関しては以前、拙稿で論じた（早川 2011）。しかし、ここで気をつけなければならないのは、感知ということは事柄の半面でしかない、という点である。「気にかかる」という様態は、漠然とした感知にとどまることなく、その重大性の正体を探るように主体を促す。この探求促進的な側面が重要な点である。

いないか」、「重大なことを取りこぼしていないか」を探求するように主体をしばしば駆り立てるのである。とはいえ、あることが気にかかっているけれども、それが煩わしくて見て見ぬふりをする、という傾向も我々にはあるだろう。例えば、太郎はあまりに忙しくて、花子の切実な訴えが煩わしく感じられるから、それを見て見ぬふりをする、といったようなことがある。だから気にかかっているならば、それを必ず探るように促されるというわけではない。しかしそれでも、「気にかかるので、探ってみた」ということは、「気にかかる」という様態に関する一つの典型的なパターンであると言えるだろう。

こういった仕方では「気にかかる」という様態を押さえることで、次のように計画や方針の再考慮への道筋を考えることができるだろう。気にかかるということを端緒として、何か重大なことが起こっているかもしれないと主体は漠然と感知するとともに、その重大なことは何かを探るように促される。そして、その探究によって新たに明らかになった状況の重要な側面を踏まえて、予めの計画や方針は考え直される。こういった一連の過程があると考えられる⁵⁷。

このような私の主張の輪郭をはっきりさせるために、ケアにおける認知的活動に関するヤヴォフスカの指摘と比較したい。ヤヴォフスカは、「大切に思う」という水準のケアに注目し「ある対象が大切だ」という認知的把握が、さらなる認知的活動を促す、という重要な指摘をしている（Jaworska 2007, 561）⁵⁸。しかし私がここで強調したいのは「ある対象を大切に思う」という段階に先立つ、「ある対象が気にかかる」という段階において既に始まっている認知的活動なのである。重要な点は、ある対象が気にかかるという段階においては、ヤヴォフスカが注目するような「ある対象が大切だ」という認知的把握が、成立しているとは限らないということだ。例えば部下の辛辣な批判が気にかかるという段階においては「部下の批判は大切だ」という明確な認知的把握が成立しているわけではないだろう（また、その部下のことを大切に思っていると想定する必要もない）。むしろそこにあるのは、そのような認知的把握に先立った漠然とした感知「もしかしたら何か重大なものがあるかもしれない」「ひょっとしたら重大なことを取りこぼしていないか」と

⁵⁷ ブラットマンは計画の再考慮に関する実践的な合理性（規範的な側面）を問題にしているが（Bratman 1987, 64-72）、計画の再考慮がどう生成するのかということは問題にしていない。行為者性に関わる事象をどう捉えるか、という記述的な側面を問題にするなら、この点がきちんと説明されなければならない、ケアが不可避に含む「気にかかる」という受動的様態によって、重要な仕方では——部分的であるにせよ——その点が説明できる、というのが、ここでの論点なのである。

⁵⁸ ザイドマンもまた「Xを大切に思う」という水準でのケアが、その対象Xに関連する事柄についての認知活動を活発なものにする、という点を指摘している。つまりXを大切に思うから、Xについて関連した事柄を把握しようと努めることになると考えている（Seidman 2010, 311）。

いったものであり、そのように未知の要素が多い段階で「気にかかる」ということが既に働き、主体を探索へと促すからこそ、単にこれまでの対象理解が更新され、計画・方針の細部が確定する、というだけではなく、対象や対象を取り巻く状況に関する異なる側面に気づかされ、予めの計画・方針が再考される、ということが起こりうるのである。

さらに、ケアが含む「気にかかる」という様態と計画・方針の結びつきを見るためには、次の点が肝要である。すなわち、「気にかかる」ということを通じての計画・方針の再考は、後には、新たな計画・方針の生成——しかも予めの計画・方針と一貫しないような形で生成——にもつながっていく可能性があるという点である。つまり「気にかかる」ということを端緒にして、主体は（ときには当惑しつつも）自分を取りこぼしていた重大なことが何であるかを探る。そして、その重大性を明瞭に把握したら、今度はその重大な事柄を踏まえた形で、予めの計画・方針とは相容れない、別の計画・方針を立てる、ということもあるだろう。例えば、気にかかるという様態を通じて、花子の切実な訴えに直面することで、「週末まで仕事のみに専念する」という予めの計画や、「仕事が忙しいときは、花子に家事を全て任せる」という予めの方針は揺らぐことになるだろう。そして、太郎はまさに花子の訴えが気にかかるからこそ、動揺しつつも花子の真意を探り、また彼女の気持ちを汲むように促される。こうした形で花子の状況が捉え直されることによって、予めの計画（「週末まで仕事のみに専念する」）と一貫しない仕方で、「明日の午前中は子供の面倒を見よう」といった新たな計画が形成され、また、予めの方針（「仕事が忙しいときは、花子に家事を全て任せる」）とは相容れないような新たな方針「仕事がどんなに忙しくても最低限の家事はする」が形成される。したがって、ある時点ではケアと予めの計画・方針が対立していても、それはケアが計画・方針と結びついていかないということでは決してない。むしろ「気にかかる」ということを端緒として、これまで見落としてきた状況の重大な側面が把握され、その把握が活かされる形で、異なる内容の計画や方針——今までの計画・方針の延長線上にあるとは限らない計画・方針——が生成するということがあるだろう。

自己統御的な方針に関しても同様に考えられるだろう。例えば太郎は、「週末が終わるまで仕事に専念したい」という気持ちを後押しするような、二階の方針（自己統御的な方針）をもっているかもしれない。すなわち、「週末まで仕事に専念したい」という欲求と対立するような欲求が生じた場合は、仕事への欲求を比較考量において重視して、それによって行為へと導かれる」という主旨の自己統御的な方針をもっているかもしれない⁵⁹。しかし太郎は、花子の「仕事、仕事っていい加減に

⁵⁹ ブラットマンは「比較考量においてある欲求を、行為を正当化するものとして扱う」ということを、「比較考量においてある欲求を重視する (give weight)」と

して」という訴えがどうしても気にかかってしまう。そして、気にかかることを通じて、その訴えの重大さを感知した太郎は、当惑しつつも花子の思いに触れるようにも促される。さらに、そうして明らかになった花子の思いを汲んで、(週末まで仕事に没頭したいという気持ちを後押しする) 予めの自己統御的方針を放棄し、週末までは花子に休んでもらうようにする、ということもありうる。そして、ここで新たな自己統御的方針が生成するということも考えられるのである。というのも、太郎は未だなお「仕事をしたい」という気持ちが強いため、花子に休んでもらうという計画を遂行するためには、「花子に休んでももらいたい」という気持ちを後押しするような、自己統御的方針を必要としているかもしれないからである。こうして、「仕事をしたいと気持ちが生じたときも、花子に休んでももらいたい気持ちを比較考量において重視して、その気持ちに従うようにしよう」という自己統御的方針が生成するのである。そしてここでも重要なのは、気にかかることを端緒にして新たに生成した自己統御的方針は、予めの自己統御的方針——「週末まで仕事に専念したい」という気持ちを後押しする自己統御的方針——とは一貫せず相容れないものだという点なのである。

以上を踏まえると、ケア対象(花子・仕事)との関係性やケアにおいて出会う人たち(辛辣な部下)との関係性の中で、予めの計画・方針・自己統御的方針の通時的・一貫性は崩れながら、別の計画・方針・自己統御的方針が生まれてくるとも考えられるのである。こうしてケアは計画・方針(自己統御的方針も含む)の一種としてではなく、それと区別されるべきものとしてある、という見方が支持されるだろう。ケアが抜きがたく含む「気にかかる」という様態は、予めの計画・方針(自己統御的方針)に対して再考を促し、計画・方針の生成や展開を一筋縄ではいかない起伏に富んだものにする。もちろん、必ずそういう働きをするというわけではないが、そのような重要な機能をもつのである。だからこそ、ケアを、計画・方針と区別した上で、「気にかかる」の働きに注目しながら考察することで、計画・方針が生成し展開するありようを、より肌理細かく記述することも可能になるのである。

最後に、「その人らしさ」の問題に関してブラットマンが展開した考察についても、本稿のケア・アプローチによってその不備を補完することができることを示そう。ブラットマンは、フランクファートが提起した「その人らしさ」の問題を、欲求に対する自己統御的な態度に注目して解決しようとする。すなわち自己統御的方針をもち、それに納得している(satisfied)場合に、それは行為者自身の主体的立場を表現しているとされるのである(Bratman 2007a, 34-35)。確かにその人らしさというものを、その人自身の主体的立場という意味に解すれば、ブラットマン

いう形で言い換えてもいる(Bratman 2007b, 239)。後者の方が表現として自然なので、ここではその表現を使う。

の見解は説得力をもつだろう。例えば、太郎は、「仕事したい気持ちを比較考量において重視して行為をする」という仕事に関する自己統御の方針をもち、その方針に彼自身納得しているのであれば、それが太郎の主体的な立場を表現していると言うことができ、さらに、そのような強い決意の内に太郎らしさが表現されていると言えるだろう。それゆえブラットマンの考察は「その人らしさ」の重要な側面に光を当てている。

しかしそれと同時に「その人らしさ」というものを「その人自身の主体的な立場」として解することによって、他の重要な側面を取りこぼしてもいるようにも思えるのである。すなわち、自己統御の方針に関する一連の非連続的な変化——予めの方針の内容と新たな方針の内容が相容れないものであるという点で「非連続的」——の内に、その人らしさが表現されている可能性を見落としているように思える。ある自己統御の方針をもったものの、それに納得できなくなり、その自己統御の方針を放棄してしまい、それとは相容れない別の自己統御の方針をもつに至る。こういったあり方の内にも、その人らしさが表現されうると考えられるのではないか。そして、こういったブラットマンの理論が掬い取っていない可能性にも、本稿のケアの関係的一動的アプローチは注目できるのである。

この点を見るため、花子に対する太郎のケアの事例で再び考えよう。そして太郎は花子の「いい加減にして」という訴えが気にかかることによって、仕事に対する気持ちを後押しするような、予めの自己統御の方針が揺さぶられ、新たに「花子に休んでもらいたい」という気持ちを後押しするような自己統御の方針——「仕事をしたいと気持ちが生じたときも、花子に休んでもらいたい気持ちを比較考量において重視して、その気持ちに従うようにしよう」——が生成する。重要な点は、これまで仕事のみならず、家族のことも同様に大切に思ってきた、という太郎の来歴を踏まえるならば、以上のような自己統御の方針に関する一連の非連続的な変化を、太郎のこれまでのあり方の延長線上に理解することができる、という点である。つまり、太郎は花子をこれまで大切に思ってきたのだから、「気にかかる」という様態を通じて花子の切実な訴えに直面することによって、予めの自己統御の方針を放棄し、花子に関する新たな自己統御の方針をもつことは、太郎にとっては自然なことであり、太郎らしいことであると考えられるのである。こうして本稿の関係的一動的アプローチは、これまでの太郎のあり方（来歴）のみならず、花子の切実な訴えが気にかかることによって生じた、太郎と花子との関係性の変動をも考慮することができるから、予めの自己統御の方針の放棄と、（予めの自己統御の方針とは一貫しない）新たな自己統御の方針の生成という、自己統御の方針に関する一連の非連続的な変化の内に、太郎の連続性を見てとり、太郎らしさを見てとることができるのである。

こうして本稿のケアの関係的一動的アプローチは、「その人らしさ」の問題に関

して、従来のケア・アプローチの不備のみならず、意図・アプローチの不備もまた補完することができる。ここにも本稿のケア・アプローチの重要な貢献があると考えられるだろう⁶⁰。

⁶⁰ 意図は英語で“intention”であり志向性 (intentionality) という言葉と結びついていることを踏まえると、ケアもまた対象を志向する働きである以上、意図とケアは極めて親和的であるように思える (こういった指摘をしていただいた一ノ瀬正樹氏に感謝する)。確かにケアも志向性の一種ではあるだろう。しかしケアにおいて一つの核となる「気にかかる」という様態は、対象への漠然とした感知や感受のレベルで既に働く志向性であり、それは意図・計画・方針 (またさらに言えば欲求や信念) が形成されるのに先立って働く志向性であるように思える。

こういったケアの志向性を読み解く一つの鍵となるのは、情動や身体の役割であろう。ただしここで言う情動は、ケアにおける感情の次元に注目する論者が念頭においているような、喜び・怒り・悲しみ・恐怖のようなカテゴリー化された感情ではない。それに先立つレベルで意識を覚醒させ、注意を活性化させ、また身体活動を活発化させるような情動である。発達心理学研究 (とくに乳幼児研究) で著名なスターンは、このような情動を「生氣情動 (vitality affect)」と呼び、それが生活の隅々にまで行き渡っていて、我々の生活を活気づけている、と考えた (スターン 1985, 64-73; Stern 2010, 3-31)。スターンはとりわけ、親子間のケアにおける生氣情動の重要性を強調しているが、しかし、これは物事へのケアにおいてもまた重要であるように思える。例えば私が本を読んでいて、注意を引き留めるような気にかかる箇所に出会ったとき、私は別に喜んでいるのでも、悲しんでいるのでも、嬉しいのでもなく、ただそれに興味が引かれて、気持ちが高ぶっているのである。そして、その気持ちの高ぶりは身体状態の非随意的な変化 (心拍数の変化、手のひらの発汗、瞳孔の散大、筋肉の緊張など) を微妙な仕方で伴うであろう (こういった身体的な情動反応に関してはコーネリアス (1999, chap.1-2) を参照)。そして、こういった身体的な情動反応が、意図・計画・方針に先立っているのは明らかであろう。しかし同時に気をつけなければならないのは、ここでの情動反応は、「適応的無意識」と呼ばれるような意識下における非自覚的な情動反応 (Wilson 1999) とも異なるという点である。「気にかかる」ということは単に注意を誘引するのみならず、注意を引き留め、その人の意識を占めるように思われるからである。こういった点に関してはさらに考察を推し進める必要があると感じている。

終章 受容性という価値へ

まずは、これまで論じてきたことを要約しつつ述べなおしてみたい。

現代行為論の主流においては、意図または（未来指向的な意図の一種である）計画や方針といった観点から、人間の行為者性——行為者としての人間のありよう——の特徴が論じられてきた。しかしながら本稿では、このような意図中心の行為論の現状に満足せず、ケアという観点を手がかりにして、従来の行為者性の哲学に一石を投じることを目指してきた。とりわけ、ケアの観点からのアプローチが、主体の主導性を重視する従来の行為者性の哲学に対して、どのように挑むことができるのかを考察してきた。

第一章では、本稿における「ケア・アプローチ」の基本的な枠組みを提示した。まず、ケアがある対象への「関心」を含む概念であるという点を押さえ、そこでの関心には行為への傾向性が伴っているがゆえに、ケアと行為者性が結びついているということを明らかにした（1. 1）。次に、ケアにおける関心を分節化すべく三つの区分「気にかかる／気にかける／大切に思う」（ケアの三区分）を導入した。こうしてケアをどういうものとするのかに関して一定の明確化を図った上で（1. 2）、英語の“care”の日常的用法を主題的に取りあげ、その日常的用法においてはケアの対象が多岐にわたっている、という点を確認した。そして、本稿で導入したケアの三区分が、そういったケアの日常的用法の特徴（ケア対象の多岐性）を踏まえたものであることを確認し、その三区分に基づいてケア・アプローチを展開することで、ケアの観点から、人間の行為者性を特定の分野に限定されない形で幅広く論じることができる、という点を示した（1. 3）。さらに、ケアの日常的用法に根ざした解釈（ケアの日常的解釈）と対立するものとして、ケアを道徳性に制約されるものとして厳格に解釈する議論（ケアの厳格な解釈）を取りあげた（1. 4）。そして、その厳格な解釈がかえってケアがはらむ複雑さや危うさに関する考察を妨げてしまう可能性がある点を指摘することで、ケアの複雑さや危うさをきちんと考慮に入れることができるケアの日常的な解釈を擁護した（1. 5）。

第二章では、第一章で示した基本的な枠組みに基づき、「ケア・アプローチ」を本格的に展開させることになった。その際、とりわけ鍵になるのがケアの第一区分である「気にかかる」という様態である。まず、「気にかかる」という様態が、その対象によって注意が引き留められる、という受動的な性格を特徴としている点を確認した（2. 1）。次に、「気にかかる」という受動的様態への着目が、他のケア・アプローチに見られない本稿独自の方向性であることを踏まえ、そもそも従来のケア・アプローチが、なぜ「気にかかる」という様態を軽視し、ケアの第三区分

「大切に思う」という水準でのケアに議論を集中させてきたのか、を考察した。そして、「大切に思う」ということが継続性をもつがゆえに、「大切に思う」というあり方を分析することで、時間的な拡がりをもつ通時的な行為者のありようを明らかにする」という重要な目論見が、従来のケア・アプローチにはあったことを押さえた（2. 2）。しかしながら実のところ、通時的な行為者性を変化に富んだ、豊かなものとして捉え直すためには、ケアに含まれる「気にかかる」という様態にも同様に着目することが決定的に重要になってくる。というのも、「気にかかる」という様態は、その主体にとって慣れ親しんだ要素のみならず、未知の要素——それは、ときには、その主体がすぐには呑み込めない異質な要素であったり、主体を動揺させるような要素であったりする——に対するアクセスも備えており、それゆえに、後の時点での、主体の行為のあり方を重大な仕方で変化させる効果をもちうるからである（2. 3）。そして、「気にかかる」における受動的様態の分析を通じて、「ある時点で気にかかったことがきっかけになって、その後の時点では、これまでとは別の仕方で行為を為す」という受動と能動の結びつきを捉え直すことが重要になるという点を指摘した（2. 4）。

第三章では、ケア・アプローチの最も代表的な論者であるH・フランクファートの議論を取りあげた。とりわけ我々は、彼がケアの核となる要素を意欲の次元（欲求に関わるような動機づけの次元）に見いだしている点を、批判的に検討した。そして、その批判的検討を通して、本稿のケア・アプローチを、関係的一動的なアプローチ——すなわち、ケアにおける関係性を重視し、なおかつ、その関係性の中で揺れ動くケアと行為者のありように注目するアプローチ——として充実させていくことになった。まず、フランクファートが、ケアにおける意欲の次元を、ケアと結びついた欲求を、他の欲求に対して優先させようとする態度（二階の関与的態度）として捉えている点を明らかにした（3. 1）。次に、フランクファートが意欲の必然性というもの（「ケアと結びついている行為へと自らを仕向けざるをえない」という意欲の様態）に訴えて、意欲の統合性をより重視していく点を見た。そして、こういった立場をとる背景には、意欲の統合性の内に、その人を当の人物たらしめるような「その人らしさ」が見いだされる、というフランクファートの考えがあることを指摘した（3. 2）。こうしてフランクファートの洞察を踏まえた上で批判的検討に入った。とりわけ、フランクファートが意欲の統合性を重視するあまり、葛藤を否定的なものとしてのみ扱っている点を批判的に取りあげた。ここでも「気にかかる」という様態に着目することになる。主体は「気にかかる」ということを通じて他の者からの訴えや要求に直面し、しばしば葛藤に陥るが、まさにそう葛藤するからこそ、自らの行為のあり方を重要な仕方で再考することもできる。そうである以上、葛藤を単なる否定的なものとは見なすことはできない、という点を指摘した。ただし、だからと言って葛藤を肯定的なものとしてのみ提示するわ

けでもない。むしろポイントは、葛藤についての我々の評価が、肯定的／否定的の二分法で捉えきれないような複雑なものだという点にあった。この点は葛藤がたとえ深刻なものであっても同様である。その葛藤の具体的な細部に着目すれば、「葛藤は拒否されるべき」とは簡単には言い切れないのである（3. 3）。さらに、こういった葛藤についての評価に関する考察を踏まえつつ、本稿の関係的一動的アプローチは、「その人らしさ」というものが、意欲の統合性において見いだされる、というフランクファートの考えに対しても異議申し立てをした。我々は、その人らしさというもののまた、ケア対象やケアを通して出会う人たちとの関係性の変化の内で捉え直すことになるのである。そして葛藤から自由になった統合的なあり方ではなく、むしろケアにおいて出会う人たちからの訴えや要求にさらされ葛藤する只中において、その人の連続性が保持され、その人らしさが表現される、というケースをいくつか示し、そういったパターンがその人らしさを表現する一つの典型的なパターンでさえあるという考えを展開した。こうして、ケアにおける関係的次元を重視しフランクファートの議論を修正・補完することで、ケア・アプローチを前進させることとなった。

第四章では、それまで展開してきた本稿の（行為者性に関する）「ケアの観点からのアプローチ」が、行為者性の哲学の主流である「意図の観点からのアプローチ」に対してどのような重要な意義をもっているのかを考えた。そして、本稿のケア・アプローチによって、行為者性の記述的側面（行為者性をどう記述するか）に関して、意図・アプローチの欠落部分を補完できる点を示すことを目的にした。まず、計画・方針の眼目が、複雑な活動を遂行するために前もって見通しをよくする点にあるがゆえに、計画・方針には再考慮や再検討に抵抗する傾向性があるということに注目した（4. 1）。そして、ケアが含む「気にかかる」という受動的契機が、再考慮や再検討を促すということの一つの基本的特徴とするため、再考慮や再検討に抵抗する働きをする計画・方針からケアは区別されなければならない、と考えることができる。しかしこのようにケアと計画・方針を区別した上で、ケアは計画・方針に結びついていくものだという点にも注意しなければならない。ある時点では、「気にかかる」という様態が、主体を未知の局面に出会わせ、動揺させることで、予めの計画・方針の円滑な遂行は妨げられるかもしれない。しかし、その後の時点では、その気にかかったことが端緒になって、予めの計画・方針とは一貫しない新たな計画・方針が生成する可能性もあるのだ（4. 2）。

このようにしてケア・アプローチを発展させることで、意図・アプローチの成果を取り入れつつ、同時に意図・アプローチとは異なる仕方で、通時的な行為者性に関する、記述的側面の考察を充実させることができたと思う。つまり、一方で「我々が計画や方針をもつ行為者である」という基本的なアイデアを手放さずに、しかし他方で、「我々は気にかかることを端緒にして、ケア対象やケアにおいて出会う人

たちの様々な要求に直面し、計画・方針の再考を促され（迫られ）、ときには（その予めの計画・方針とは相容れないような）別の計画・方針を新たに形成していく」というアイデアもまた尊重できる。かくして、我々はケアの関係的一動的アプローチを展開することによって、人間の行為者性を一筋縄ではいかない、起伏に富んだものとして理解することへと導かれたのである。

＊

さて以上の議論を踏まえることで、我々は行為者性の記述的側面に関する考察から、その評価的ないし価値的側面に関する考察へと歩みを進めることができる。総じて「人間の行為者性とは何か」という問題は、どのような行為者のあり方に価値があるのか、という問題と切り離すことができない。そもそもフランクファートが「その人らしさ」の問題を考察したのも、「いかに生きるべきか」「どのような生き方に価値があるのか」という生をめぐる価値の問題にコミットしていたからである（see Frankfurt 2004）。ブラットマンもまたこういった生をめぐる価値の問いを継承する。そして両者とも自律的な生というものに大きな価値を見いだしているからこそ、それを成立しめる、行為者性にまつわる条件を、それぞれ微妙に異なる仕方ではあるものの、主題的に考察しているのである。例えばフランクファートがケアに注目したのは、ケアがある形態をとることで、自分のあり方に強い確信をもって生きる、ということが、人間の行為者のあり方として理想的だと考えていたからである。またブラットマンが方針（二階の方針も含めて）や計画に注目するのも、「自己統御的であることは人間の行為者性についての理想の一つであり、その理想は我々のあり方に影響を及ぼすような重要性をもっている」（Bratman 2007, 9）と考えていたからなのである。このように専一的な行為者性や自己統御的な行為者性を価値あるものと見なすからこそ、その内実を明らかにする考察にも重要なポイントがあると考えられるのである。

しかし、我々の生をめぐる価値は、単一の価値基準に回収されるような単純なものではありえない。自律的な生というものが大きな価値をもつということは確かに疑えない。だが、それが善き生や価値ある生を構成する唯一の価値である、というわけではないだろう。そしてだからこそ、太郎の事例や幸子の事例で見てきたように、「気にかかる」という様態を通じて、行為者の振る舞いが自己統御的なものでなくなっている場合でさえ、我々はそのあり方を「望ましくない」とは完全には言い切れず、むしろ何らかの望ましさをそこに見いださうるのである。先に確認したように、とりわけ我々が注目したのは、「気にかかる」ということを通じて行為者は他の者からの訴えや要求に直面し、しばしば葛藤に陥るが、まさにそう葛藤するからこそ、自らの行為のあり方を重要な仕方で再考することもできる、という

ことであった。そうである以上、やはり葛藤を単なる否定的なものに見なすことはできない。そしてこのことは、我々がそういった葛藤的なあり方に、何らかの価値を見いだしていること——全面的に価値を見いだしているのではないにせよ——を示唆しているのである。では、そのように我々が葛藤や動揺を伴う行為者のあり方に何らかの価値を認めるとき、そこには行為者性に関するどのような価値的なコミットメントがあるのだろうか。そのような価値評価は、行為者性に関するどのような価値基準に根ざしているのか。

繰り返し言うならば、それはフランクファートやブラットマンが強く支持する自己統御という価値ではない。というのは、太郎や幸子の事例で見たように、まさにそういった葛藤においては自己統御の綻びこそが見いだされるからである。では、その背景にある価値観を我々はどのように分節化できるのだろうか？

私はそれを受容性という価値として捉えたいと思う⁶¹。私が受容性の価値として考えているのは、重大な事柄に直面して動揺や葛藤を感じつつも、その重大な事柄から目を背けずそれを（徐々に）受け容れていく、そういったあり方に見いだされる価値である。そこには重大な事柄に直面し動揺・葛藤しながらも、それに向き合いつつ自分のあり方を問い直していくような一連のプロセスがある。実際、第三章や第四章で見てきたように太郎が花子の訴えに直面して感じている葛藤、また幸子が被害者に対して感じている深い動揺といったものに、我々が望ましきを見いだすのは、そういった葛藤や動揺を通じて、太郎や幸子が、相手から訴えられている重大な事柄を受け止め、それに対して何らかの応答をしていこうとするからであろう。もしそういった相手の訴えや要求に対して全く無感覚であったならば、そもそもそれに葛藤や動揺を感じることはできない。その重大性を感じ受け止めていくような感受的な姿勢、また開かれた姿勢があるからこそ、他者の重大な訴え

⁶¹ 「受容性」を価値として積極的に捉えるという発想については M・スロートの最近の著作 (Slote 2013) に多くを負っているが、「そもそも受容性の内実をどう捉えるか」ということに関してはスロートと私とで異なる点がある。スロートは、自己のコントロールが及ばない事柄に対する受容的なあり方を、現にある人間のあり方という事象的・記述的なレベルで主張するのみならず、人間の生において実現ないし推奨されるべき価値あるあり方として規範的なレベルでも擁護している。私はこういったスロートの方向性に深く賛同する。しかしながら、スロートは基本的には受容を、共感的な態度を通して「相手の考え・態度・価値観を表立って意識したり熟慮したりすることなしに、取り入れる」(ibid., 196) こととして比較的単純に捉えており、(意識に上るような) 葛藤・動揺・再考を含む複雑なものとして捉えてはいない (see ibid., 34-35, 169-180)。つまり他者の訴えに直面し動揺・葛藤を経験しながら、自分のあり方を再考することへと深まっていくようなプロセス、すなわち動揺・葛藤を伴いつつ自己の問い直しへと至るプロセスとして、受容を捉えてはいない。したがって、私は「受容性の価値」という発想をスロートから受け継ぎながらも、その内実をどう理解するかに関してスロートとは重要な点で異なる見解をもつ。

に翻弄され動揺する、ということも起こるし、さらに、そういった訴えに向き合い、徐々にそれを受け容れていくことへと展開していくような一連のプロセスが成立しうる。

こういった動揺や葛藤を含む一連の受容的プロセスにおいては、フランクファートやブラットマンがとりわけ大きな価値を置いている、専一性や自己統御という要素は希薄である。というのも、相手からの訴えや要求に行為者は直面することで、自分のあり方に確信をもてなくなっているし、これまでの計画・方針の再考を迫られ、自分の意向（計画・方針）によって振る舞いを導くという自己主導的なあり方も堅持できなくなっているからである。つまり、そこでは専一性や自己統御性に綻びが生じているからである。しかしながら我々は、ある主体が相手からの訴えによって動揺し翻弄されていようと、その主体のあり方を単純に望ましくない、と言い切ることができない。なぜかと言えば、「動揺・葛藤を伴いながらも自分のあり方を問い直し、相手の切実なニーズを受け止め、それに応じていく」といったような一連の受容的なプロセスに大きな価値を見いだしているからであろう。実際、我々は、そのような受容的なプロセスの内に、善き生や価値ある生の実現に結びつくような重大な価値を見いだしているのではないだろうか。

こうして我々は、善き生や価値ある生を構成しうる重大な価値として、（従来から主張されてきた）自律という価値に加えて、受容という価値もまた擁護することができるだろう。このことは実践的合理性ないし実践的理性の問題に関しても、重要な含意をもつ。実践的合理性の問題とは、善き生（good life）の実現においてどういう行為者のあり方が理に適っているか（reasonable）という問題である。もちろん、そういった理解のみが、実践的合理性の問題についての唯一の正しい理解であると言うつもりはない。しかし、それでも、善き生との結びつきにおいて、実践的合理性の問題を捉えるというのは、一つの標準的な理解であろう。そして従来、そういった実践的合理性（実践的理性）の問題は、自己統御や自律という側面から考察されてきた。すなわち、自己統御や自律こそが、実践的合理性の中心的な要件として最も頻繁に取りあげられ論じられてきたのである（e.g., Bratman 2007; Korsgaard 1996; Wallace 2006）。しかしながら、もし受容性というものが善き生の重要な構成要件であるならば、それを反映する形で、実践的合理性というものを豊かに捉え直す必要が出てくる。すなわち、実践的合理性（実践的理性）というものを、生に対する自律的コントロールという視点からのみならず、生に対する受容性という視点からも理解していく必要があるだろう⁶²。この問題に取り組むこと

⁶² スロートは、生に対する自律的コントロールというものに加えて、生に対する受容性というものが、善き生にとって不可欠であることを論じている。私の立場もこのスロートの見解に深い影響を受けている。しかし、スロートは生に対する受容性を、実践的合理性を構成するものとしてよりも、実践的合理性に対立するものと

こそが今後の私の課題となる。

して考えている (Slote 2013, 169-179)。その点において、スロートと私の見解は異なる。私は、受容性は生に対する不合理なあり方ではなく、むしろ理に適った (reasonable) あり方であり、それゆえ実践的合理性を構成しうるものだと考える。

参考文献

- Anscombe, E. (1963), *Intention*. Blackwell. (『インテンション』菅豊彦訳、産業図書、1984 年)
- (1995[1989]), “Practical Inference.” In *Virtues and Reasons*. ed. G. Lawrence and W. Quinn, 1-34, Clarendon Press. (「実践的推論」早川正祐訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹監修) 所収、191-258 頁、春秋社、2010 年)
- Benbaji, Y. (2001), “The Moral, The Personal, and The Importance of What We Care about.” *Philosophy* 76, 415-433.
- Benner, P. and Wrubel, J. (1989), *The Primacy of Caring*. Addison-Wesley Publishing Company. (『現象学的人間論と看護』難波卓志訳、医学書院、1999 年)
- Blum, L. (1995), *Moral Perception and Particularity*. Cambridge University Press.
- Blustein, J. (1991), *Care and Commitment*. Oxford University Press.
- ジョン・ボウルビィ (1993[1990]), 『母と子のアタッチメント——心の安全基地』(*A Secure Base: Parent-Child Attachment and Healthy Human Development*, Basic Books) 二木武他訳、医歯薬出版.
- Bratman, M. (1983), “Taking Plans Seriously.” *Social Theory and Practice* 9, 271-287. (「計画を重要視する」星川道人訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹監修) 所収、259-287 頁、春秋社、2010 年)
- (1987), *Intention, Plans, and Practical Reason*. CSLI Publication. (『意図と行為』門脇俊介・高橋久一郎訳、産業図書、1994 年)
- (1989), “Intention and Personal Policies.” *Philosophical Perspectives* 3, 443-469.
- (2006), “A Thoughtful and Reasonable Stability: A Comment on Harry Frankfurt’s 2004 Tanner Lectures.” In *Taking Ourselves Seriously & Getting It Right*, ed. D. Satz, 77-90, Stanford University Press.
- (2007), *Structures of Agency*. Oxford University Press.
- (2007a) [2000], “Reflection, Planning, and Temporally Extended Agency.” In his *Structures of Agency*, 21-46. (「反省・計画・時間的幅をもった行為者性」竹内聖一訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹監修) 所収、289-334 頁、春秋社、2010 年)

- (2007b) [2004], “Three Theories of Self-Governance.” In his *Structures of Agency*, 222-253.
- (2007c) [2005], “Planning Agency, Autonomous Agency.” In his *Structures of Agency*, 195-221.
- (2012), “Time, Rationality, and Self-Governance.” *Philosophical Issues* 22, 73-88.
- ランドルフ・コーネリアス(1999[1995]), 『感情の科学——心理学は感情をどこまで理解できたか』 (*The Science of Emotion: Research and Tradition in the Psychology of Emotion*, Prentice Hall)、誠信書房.
- Dan-Cohen, M. (2006), “Socializing Harry.” In *Taking Ourselves Seriously & Getting It Right*, ed. D. Satz, 91-103, Stanford University Press.
- Davidson, D. (1980), *Essays on Actions and Events*. Clarendon Press. (『行為と出来事』 服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、1990 年)
- (1980a) [1963], “Actions, Reasons, and Causes.” In his *Essays on Actions and Events*, 3-20. (「行為・理由・原因」河島一郎訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹監修) 所収、157-190 頁、春秋社、2010 年)
- (1980b) [1971], “Agency.” In his *Essays on Actions and Events*, 43-62. (「行為者性」、『行為と出来事』(服部裕幸・柴田正良訳) 所収、64-94 頁、勁草書房、1990 年)
- De Gaynesford, M. (ed.) (2011), *Agents and Their Actions*. Blackwell.
- Frankfurt, H. (1988), *The Importance of What We Care about*. Cambridge University Press.
- (1988a) [1971], “Freedom of the Will and the Concept of the Person.” In *The Importance of What We Care about*. 11-25. (「意志の自由と人格という概念」近藤智彦訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹監修) 所収、99-127 頁、春秋社、2010 年)
- (1988b) [1975], “Three Concepts of Free Actions.” In his *The Importance of What We Care about*, 47-57.
- (1988c) [1982], “The Importance of What We Care about.” In his *The Importance of What We Care about*, 80-94.
- (1988d) [1987], “Identification and Wholeheartedness.” In his *The Importance of What We Care about*, 159-176.
- (1988e) [1987], “Rationality and the Unthinkable.” In his *The Importance of What We Care about*, 177-190.
- (1998), “Some Thought about Caring.” *Ethical Perspective* 5, 3-14.
- (1999), *Necessity, Volition, and Love*. Cambridge University Press.

- (1999a) [1992], “On the Usefulness of Final Ends.” In his *Necessity, Volition, and Love*, 82-94.
- (1999b) [1992], “The Faintest Passion.” In his *Necessity, Volition, and Love*, 95-107.
- (1999c) [1993], “On the Necessity of Ideals.” In his *Necessity, Volition, and Love*, 108-116.
- (1999d) [1993], “Autonomy, Necessity, and Love.” In his *Necessity, Volition, and Love*, 129-141.
- (1999e) [1997], “On Caring.” In his *Necessity, Volition, and Love*, 155-180.
- (2002), “Replay to Susan Wolf.” In *Contours of Agency*, ed. S. Buss and L. Overton, 245-252, The MIT Press.
- (2004), *The Reasons of Love*. Princeton University Press.
- (2006), *Taking Ourselves Seriously & Getting It Right*. ed. D. Satz. Stanford University Press.
- 古田徹也 (2010), 「バーナード・ウィリアムズ 「道徳的運」——要約と読解」、行為論研究会編、『行為論研究』1号、109-127頁。
- Gilligan, C. (1982), *In a Different Voice*. Harvard University Press. (『もう一つの声』岩男寿美子監訳、川島書店、1986年)
- Goldie, P. (2000), *The Emotions: A Philosophical Exploration*. Oxford University Press.
- (ed.) (2010), *The Oxford Handbook of Philosophy of Emotion*. Oxford University Press.
- 浜渦辰二 (2005), 『〈ケアの人間学〉入門』、知泉書館。
- Hamington, M. (2004), *Embodied Care*. University of Illinois Press.
- 早川正祐 (2008), 「分析的行為論におけるケア概念——分析哲学の行為論の新たな展開に向けて」、日本哲学会編、『哲学』59号、261-276頁。
- (2011), 「ケアにおける他者感受的な行為者性」、上智大学文学部哲学科、『哲学科紀要』37号、37-61頁。
- Helm, B. (2001), *Emotional Reason: Deliberation, Motivation, and the Nature of Value*. Cambridge University Press.
- (2010), *Love, Friendship, and the Self: Intimacy, Identification, and the Social Nature of Persons*. Oxford University Press.
- Hoffman, M. (2000), *Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice*. Cambridge University Press.
- Hyman, J. and Steward, H. (2004), *Agency and Action*. Cambridge University Press.

- 一ノ瀬正樹 (2011), 『確率と曖昧性の哲学』、岩波書店.
- Jaworska, A. (2007), “Caring and Internality.” *Philosophy and Phenomenological Research* 74/3, 529-568.
- 川本隆史 (1995), 『現代倫理学の冒険——社会理論のネットワークへ』、創文社.
- Korsgaard, C. (1996), *The Sources of Normativity*. Cambridge University Press
- (2006), “Morality and the Logic of Care: A Comment on Harry Frankfurt.” In *Taking Ourselves Seriously & Getting It Right*, ed. D. Satz, 55-76, Stanford University Press.
- Macintyre, A. (2001), *Dependent Rational Animals: Why Human Beings Need the Virtues*. Open Court.
- 松永澄夫 (2010), 「在ることと為すこと」、『哲学への誘い——新しい形を求めて V 自己』(松永澄夫・浅田淳一編) 所収、3-51 頁、東信堂.
- Mayeroff, M. (1971), *On Caring*. Harper Perennial (『ケアの本質』 田村真・向野宣之訳、ゆみる出版、1987 年) .
- Mele, A. (ed.) (1996), *The Philosophy of Action*. Oxford University Press.
- Mellody, P. (1992), *Facing Love Addiction: Giving Yourself the Power to Change the Way You Love*. Harper One.
- Millgram, E. (ed.) (2001), *Varieties of Practical Reasoning*. MIT Press.
- Moran, R. (2001), *Authority and Estrangement: An Essay on Self-Knowledge*. Princeton University Press.
- Moya, C. (1990), *The Philosophy of Action*. Polity Press.
- Nagel, T. (1986), *Views from Nowhere*. Oxford University Press.
- 信田さよ子 (2000), 『依存症』、文春新書.
- Noddings, N. (1984), *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. University of California Press.
- Nussbaum, M. (2001), *Upheavals of Thought*. Cambridge University Press.
- 岡本夏木 (1982), 『子供とことば』、岩波新書
- (1985), 『ことばと発達』、岩波新書
- フィリップ・ロシヤ (2004[2001]), 『乳児の世界』 (*The Infant's World*, Harvard University Press) 板倉昭二・関一夫監訳、ミネルヴァ書房.
- Seale, J. (2001), *Rationality in Action*. The MIT Press.
- Seidman, J. (2009), “Valuing and Caring.” *Theoria* 75, 272-303.
- (2010), “Caring and Incapacity.” *Philosophical Studies* 147, 301-322.
- Shoemaker, D. (2003), “Caring, Identification, and Agency.” *Ethics* 114, 88-118.
- Slote, M. (2007), *The Ethics of Care and Empathy*. Routledge.

- (2013), *From Enlightenment to Receptivity: Rethinking Our Values*. Oxford University.
- Solomon, R. (ed.) (2004), *Thinking about Feeling: Contemporary Philosophers on Emotions*. Oxford University Press.
- ダニエル・スターン (1991[1985])『乳児の対人世界 (臨床編)』(*The Interpersonal World of The Infant: A View from Psychoanalysis & Developmental Psychology*, Basic Books) 小此木啓吾・丸田俊彦訳、岩崎学術出版社。
- Stern, D. (2010), *Forms of Vitality: Exploring Dynamic Experience in Psychology, the Arts, Psychotherapy, and Development*. Oxford University Press.
- 田畑邦治 (1997)『ケアの時代を生きる——かかわりと自己実現 (新訂)』、看護の科学社
- 滝川一廣 (2004), 『「こころ」の本質とは何か』、ちくま新書。
- (2011), 「自閉症と言葉の発達」、『言葉の歓び・哀しみ』(松永澄夫編) 所収、127-163 頁)
- Tappolet, C. (2006), “Autonomy and Emotion.” *European Journal of Philosophy* 2, 45-59
- Taylor, C. (1985), *Human Agency and Language*. Cambridge University Press.
- (1989), *Sources of Self: The Making of the Modern Identity*. Harvard University Press.
- (2004[1992]), 『〈ほんもの〉という倫理——近代とその不安』(*The Ethics of Authenticity*, Harvard University Press) 田中智彦訳、産業図書。
- Taylor, J. (ed.) (2005), *Personal Autonomy*. Cambridge University Press.
- 徳善義和 (2012), 『マルティン・ルター——ことばに生きた改革者』、岩波新書。
- Velleman, D. (2000), *The Possibility of Practical Reason*. Oxford University Press.
- (2002), “Identification and Identity.” In *Contours of Agency*, ed. S. Buss and L. Overton, 91-123, The MIT Press.
- Walker, M. (2003), *Moral Contexts*, Rowman & Littlefield.
- Wallace, J. (2006), *The Normativity of Will*. Oxford University Press.
- 鷲田清一 (1999), 『「聴く」ことのカ——臨床哲学試論』、阪急コミュニケーションズ。
- Watson, G. (1975), “Free Agency.” *Journal of Philosophy*, 72/8, 205-220.
- Williams, B. (1981), *Moral Luck*. Cambridge University Press.
- Wilson, T. (2002), *Strangers to Ourselves: Discovering Adaptive Unconsciousness*, Harvard University Press.

Wolf, S. (2002), "The True, the Good, and the Lovable: Frankfurt's Avoidance of Objectivity." In *Contours of Agency*, ed. S. Buss and L. Overton, 227-244, The MIT Press.